緋弾のアリアXV

Aria the Scarlet Ammo

招かれざる海霧（アクアマリン・クロイツ）

赤松中学

MF文庫J

緋弾のアリアXV

Aria the Scarlet Ammo

招かれざる海霧（アクアマリン・クロイツ）

赤松中学

Kinji

ＭＦ文庫Ｊ

緋弾のアリアXIV

招かれざる海霧（アクアマリン・クロイツ）

赤松中学

口絵・本文イラスト●こぶいち

Contents

1弾 臥竜と鳳雛 Enable & Quadler

2弾 藍幇城

3弾 死亡遊戯（ドラゴンロード）

4弾 その美しい瞳に、俺だけを映して The end of contradiction

5弾 招かれざる海霧（アクアマリン・クロイツ）

1弾　臥竜と鳳雛
Enable & Quadler

――九龍猿王（ガウロンモンク）。
――闘戦勝仏（とうせんしょうぶつ）。
――孫悟空（そんごくう）。

それらの偉大（いだい）な名にふさわしい、武神（ぶしん）のような少女・孫（ソン）。

「よし遠山（とおやま）。見せてやる」

その孫が今、俺（おれ）を見据（みす）えている。

「……って言うとウソになっちゃうか。如意棒（これ）は目じゃ追えないからな」

その右眼（め）を、紅（あか）く輝かせて――！

（――レーザー……！）

ヒステリアモードの俺にも、緊張感（きんちょうかん）が漲（みなぎ）る。

どうする。

孫は如意棒を構えたのだ。俺に対して。
如意棒の正体とは、西遊記に出てくるような赤い棍棒ではない。
孫の瞳から射出される、必殺のレーザービーム。光学兵器なのだ。
――即座に、30倍に亢進した俺の思考能力が対処法を模索する。
レーザーは射撃兵器。
俺たちのキャデラック・デビルと、孫のBMW・Z8――2台のオープンカーは、時速100km超で香港島の東區走廊を併走したままだ。
車上からの射撃は精度が落ちる。
（車の機動で――外させるんだッ、当たりさえしなければ……！）
そこまで考えるが――
ダメだ。
裸足の右足をハンドルに、左足をフロントガラスに乗せ、携えた青龍偃月刀でクルーズモードを調整した孫の運転は――今なお、極めて精緻。

理子が撒いたオイルの効果も薄れ、Z8はスリップによる慣性ドリフトから通常走行に戻りつつある。

キャデラックとZ8じゃ機動力は亀と燕ぐらい違うし、あのレーザーは銃のように手で狙いを付ける必要もない。構造上、ただ敵を見て撃てばいいものなのだ。

孫は俺を射抜けるだろう。俺がどんなに車を左右に振ろうとも。

孫の頭上に煌めく金箍冠、天使のような光の輪が輝きを強め――

激しいカーチェイスで少しポケットから出ていた俺のバタフライ・ナイフが……いつか見たように不可解な緋色の光を放ち始めた。だがそれを気に留めているヒマはない。

その時、

「噂のレーザーかよ」

ここまで余裕綽々だった理子が、少し焦った裏理子の声を上げた。

そして、双剣双銃――

「キンジはあたしの獲物なんだ！　勝手に殺るなっ！」

――バスバスッ！

2丁拳銃（ワルサーP99）の発砲に紛れさせるようにして、ツーサイドアップのテールでタクティカル・ナイフを鋭く2本、孫めがけて投げつけている。

「狒狒ッ！」

笑ってそれらを全て――銃弾を1発肩の防弾セーラー服で受け、1発を偃月刀で弾き、その場で後方2回宙返り1　2捻り（ハノクダブルハーク）を切りナイフを躱した――孫が受け、防ぎ、躱しきる。

後部座席から放たれた理子の4連撃、その狙いは全て同じだった。

（――眼か）

レーザーを備えた、孫の右眼を狙っていたのだ。理子は。

こっちの理子は、無法者の理子。

かつて俺を撃った時と同様、殺す攻め方だった。

だが孫はむしろ嬉しそうに、再びZ8のハンドルとダッシュボード

に着地する。

もはや完全に進行方向に背を向けた、背面運転状態だ。

「いい女だ！　王元姫を思い出す！」

孫は理子の手首を掻き切るような軌道で、偃月刀を振り回す。

ギンッ、ギンッ！　という音と共に、理子のワルサーP99が2丁とも弾き飛ばされ――

「――うッ！」

のけぞった理子は、それでもフリフリの改造制服に包まれた両腕を孫に突き出す。

そのカラの両手に、ジャキジャキッ！

（スリーブガン！）

長袖の中にレールと共に隠されていた、新たなワルサー2丁がバネ仕掛けで飛び出してくる。そして間髪を入れず、ガガンッ！

一瞬で狙いをつけた2連射が、孫を奇襲した。

孫はそれにも即応し、右眼に飛来した1発目を首を傾けて避けたが――

「――！」

理子の2発目は眼ではなく、頸動脈を撃ち抜こうとしていた。

5連続で目を狙ってからの、不意を突く首狙いの一撃は――ビシイッ！

孫の傾けた頭部、顔面に命中した。

「きゃっ！」

白雪が小さく悲鳴を上げる。

小柄な孫は着弾の衝撃で、ばたんっ！

Z8のボンネットにひっくり返る。

「……ッ……！」

だが俺には見えた。

これで終わりじゃない。

「――白雪、残弾13だ」

俺はキャデラックの木製ハンドルを片手で握ったまま、もう片手でベレッタを助手席の白雪に渡す。

今、白雪には銃が無い。デパートでの戦いの後、イロカネアヤメと鎖鎌は拾っていたが弾切れのM60は投棄してたからな。

本来、銃を貸し借りして撃つのは良くない事なのだが……今は四の五の言ってられない。

まだ続くぞ。

と、俺が歯ぎしりした時――ばっ！

背筋でジャンプした孫が、フロントガラスを跳び越えてZ8の運転席に着地した。

そして、ペッ。

ワルサーの弾丸を、口から吐き捨てる。

孫は、噛んで止めたんだ。理子の2弾目を。

「これは初めてやったよ。誉めてやる。お前は写真で見たことがあるぞ。峰・理子・リュパン4世だな？　さすが中退とはいえイ・ウーの元生徒だ」

俺は半年ぐらい前にやったけどな。銃弾噛みは。

だが……弾の威力が違うとはいえ、俺がやった時には1分弱は昏倒した。

数瞬しか失神しなかった孫は、大したもんだ。俺よりタフかもな。

それと――俺は気づく。

ここで孫に、重要な変化が起きている。

（……右眼……）

その瞳の光が、消えているのだ。

頭上の金箍冠もだ。

多分レーザーの溜めや発射には、意識の集中が必要なんだろう。その意識が今ので一瞬飛んだから、キャンセルされたのか。

この状況に、孫は――

すぐには、改めてレーザーを準備しない。

デコピンから核ミサイルまで、どんな攻撃にも発動の条件がある。

それさえ防いでしまえば、その攻撃は無化される。

いくら必殺の決め技とはいえ――

――バカのようにそればっかり使って、その条件や短所をあまり見せないつもりか。

向こう見ずなように見えて、慎重な一面もあるんだね。闘戦勝仏ちゃんも。

もはや仏様までちゃん付けする俺の後ろから、

「知ったような顔で――4世とか呼ぶんじゃねーよこのチビ！」

キレた理子が、カンフーみたいな掌底でキャデラックのハンドルを回した。俺の運転をガン無視で。

ギュンッ！　とZ8側にスライドしたキャデラック・デビルが、思

いきりＺ８の側面に横っ腹を激突させる。
デビルにぶつけられたＺ８は、東區走廊（ハイウェー）のガードレール側に飛ばされて火花を散らす。
「――お前に言われたくないぞ！　チビ理子！」
バウンドするようにして返ってきたＺ８が、ウォンッ！
甲高いエンジン音を響かせて、車体重量を加速で補（おぎな）いつつ側面を当ててくる。
まるでチビと言われて、Ｚ８も怒ったみたいだ。
「あたしは１４７ある！　お前１４０も無いだろ！」
「あと２センチありゃ１４０だ！」
ガスンッ！　ウォンッ――ガスンッ！
時速１００km以上を保（たも）ったまま、理子（リー）と孫（ノン）が車をぶつけ合う。
ある意味……同レベルというか、噛（か）み合（あ）ってるな。この２人。
だが車での格闘戦なら、アホみたいに頑丈（タフ）なこっちのアメ車の方が

有利だ。車体重量も1・5倍は下らない。

意図的かどうかは別として、理子も孫をうまく挑発してレーザーを撃たせずにいる。

有利に傾いてきた戦況に乗じ、車体前方に体を寄せた白雪が――

「キンちゃん、前を失礼しますっ！」

バッ！　バッバッ！

両手持ちしたベレッタを、単射で発砲する。

元々あまり銃が上手くなく、だから分隊支援用の機関銃を選択してる白雪だが……そのマジメな性格で、よく狙って孫を撃っている。

おかげで孫の動きも若干妨害できて――

その隙に、俺がデザート・イーグルを出せた。

「50AE――通常弾だ、合わせてくれ」

理子と白雪にそう言って、俺は少し頭を引いてDEをブッ放す。

ドウッ――！　と砲撃のような音が上がり、Z8にクレーターのよ

うな弾痕が咲いた。

いくらヒステリアモードとはいえ、相手は孫だ。この反動の凄まじい拳銃、しかも運転しながらの片手撃ちで、その動きを先読みして当てられるほどの精密射撃はできない。

だから、俺の狙いはZ8。車を、破壊する。

将を射んとせばまず馬を射よ、だ。

「奇ッ！」

俺がZ8を狙っていると勘付いたらしい孫は、素早くシフトチェンジして――

――再びクルーズ・モードにしたZ8を横からデビルに幅寄せしつつ、DEの2弾目を青龍偃月刀でテニスのボレーみたいに弾いた。

火花を上げて振り回された偃月刀を、そのままプロペラのように片手で回転させ――

孫はカットオフ・セーラー服を翻して、バッ！

「お邪魔するぞ遠山っ！」

――デビルに、飛び移ってきた！

あちこち凸凹になった無人のZ8は、併走を続けている。遠ざかるべきか。いや、利用する手があるかもしれない。付かず離れずだ。

という判断と同時に孫へ向けた俺のDEに、孫は足を突き出し、足の指で銃口の方向を変えてしまう。理子の方へ。

「ちょっ！」

理子が俺の腕を押しやって、孫にDEを向け直させようとする――

その俺の腕に、

「あははっ！」

愉快そうに笑った孫が、片足一本で乗ってきた。

その場でスカートを広げてコマのように回転した孫のシッポが、俺の頭を殴る。さらに偃月刀が理子の首を薙ごうとする。理子は伏せて躱した偃月刀を髪で絡め取ろうとしたが、間に合わない。

パンパンッ！　と白雪が至近距離からベレッタを撃つが、孫は踊るように弾丸を避ける。

どこまで戦い慣れてるんだ。この距離で当てさせないなんて。

（――やはり、近接戦ではこっちが不利か）

さっきだって、ヒステリアモードの俺でも孫はK.O.できなかった。判定勝負だったら俺の負けだったような展開だった。

だが離れれば――レーザーが来る。

一体、どうすれば……！

「「このチビッ！」」

ハモる声に続いて、近接拳銃戦の構えで飛びかかった理子を、孫の前蹴りが後部座席に弾き返す。

デビルから転落しかけた理子の胸元から、ちゃりっ。

紅鳴館でブラドから盗んだ、青い十字架がのぞいた。

それも、発光している。さっき見た俺のバタフライ・ナイフと同じ

ように。

まるで、孫との戦いに共鳴（きょうめい）しているかのようだ。

「――弾切（たまぎ）れですっ」

そこで白雪がベレッタをシートに置いて、しゃんっ。

孫とゼロ距離になった今、制服に収めていたイロカネアヤメを抜刀（ばっとう）する。

それを見るやいなや、孫は……グイッ。

デビルのハンドルに足の指を掛け、Z8から遠ざかるように回した。

予期せぬ急カーブにグラついた俺たちを置いて、

「啊吖（アチャ）ッ！」

孫はデビルから飛び出してしまう。

青龍偃月刀（せいりゅう）を横向きにして抱え、髪を靡（なび）かせながらクルクルッと抱（かか）え膝前宙（ひざぜんちゅう）を何回転も切り――

すとんっ。

Z8の運転席に収まった。

（イロカネアヤメを……厭がった？）

そういえばさっきデパートで戦った時にも、孫はイロカネアヤメを嫌っていた。それも単なる嫌い方には見えなかった。何かあるぞ。

……だが。

周囲の光景に覚える焦りにジャマされて、俺はそれを深く考える事が出来ない。

湾岸沿いの高速を走り続けた俺たちは――北角――昨日迷子になった俺が世話になった地区に、差し掛かっているのだ。

あそこの人たちには一宿一飯どころか、一宿二飯の恩があるんだ。

絶対、巻き込むワケにはいかない。

もう少し行けば高速の出口がある。一旦そこを下りて、別の高速に乗り換えるんだ。

俺が出口側にハンドルを切ろうとした時、その高速出口から……

「……そ、装甲車……っ!?」

唖然とした白雪が言う通り、FV603が逆走で入って来ようとしている！

その回転銃座についた少女と、前方のハッチから顔を出している少女は――

どっちも同じ黒髪ツインテール。同じ顔。ココだ。

（動きを先読みされてたのかッ）

俺がハンドルを捌いて回避運動を始めたのとほぼ同時に、バリバリバリバリッ！

ココがサラセンから、M1919機関銃を撃ってきた。

射角も悪く双方走りながらだからビシバシ当たるような事はないが、あれじゃあ高速を下りることはできないぞ。

Z8と併走しながら、デビルはノロマな装輪装甲車の前を飛ぶように横切り――

逆側の高速出口から逆走で逃げたいところだが、ここはもう北角。ただでさえ巻き込みたくない市民を、サラセンの機銃掃射に晒すわけにはいかない。

この立体高速道路を走り続けるんだ。それしかない。

（だが、この高速は……）

見覚えがあるぞ。

俺は舌打ちして工事中の看板を撥ね、Z8が蹴散らした進入禁止のコーンを回避する。

そのままデビルとZ8が併走して行く真新しい立体高速道には――

――先がない。

この橋のような高速道路は、造りかけなのだ。ちょうど今朝、俺と猴が遭遇した粥屋の上。つまり、ある種の行き止まり。ココはこれが狙いで、あの出口で張ってたワケか。

ヴィクトリア湾へ向かってジャンプ台のように突き出ている道が見

えてきて、
「えーっと……」
「あちゃー……」
これには白雪と理子も困り顔。
併走しているZ8の方をチラッと見ると、孫はむしろニヤァと笑って視線を返してきた。
……チキンレースがお望みかい。それはあまり俺の趣味じゃないんだけどな。
だが、急ブレーキをかければ――
孫も止まるだろう。
そこから近接戦になるのは望ましくない。白雪が振り返ったのでバックミラーを見ると、やっぱりサラセンも追ってきている。俺たちのキャデラックは今や、袋のネズミだ。
どうする。どうするキンジ。

という俺の自問に答えるように、

「キンジ、加速だッ！」

アドレナリン出まくりという感じの理子が叫ぶ。

……ここでアクセルを踏んだら、１００％海へドボンだぞ。

映画なんかじゃそういうシーンは溺れる程度で済んでるが、時速１００km超で突っ込む海面は――コンクリートよりも固くなる。

だが俺に代案は無い。

ここは理子を信じよう。

「ブレーキが踏めない以上、あと踏めるのはアクセルぐらいのもんだしな」

ボヤいて、俺はキャデラック・デビルをフルスロットルで走らせる。

そのスピードに、ウォンッ！　Ｚ８が応じた。

「キヒッ！　楽しいヤツらだなお前らは！」

８気筒エンジンを唸らせて、孫も併走を続ける。

高速道路の終わりを前にして、むしろ加速する2輌。

クレイジーだな。

サラセンも呆れて停車しちゃって、ココたちがポカーンと成り行きを見守ってるよ。

さあ……

もう……

道が、無くなるぞ……！

今からブレーキを掛けても、もう止まりきれない。俺たちも、孫も。転落は確実だ。

そこで理子が、緩くウェーブのかかった金髪を美しく靡かせて――

「よっと」

俺と白雪の間、繋がったベンチシートの背もたれの上に腰掛けてきた。

俺たちの顔の真横で、理子の太ももが元気よく上下動し――しゅる

っ、しゅるっ。

サクランボみたいな飾りのついた靴下、その下の赤いストラップシューズが、それまで使ったり使わなかったりだったシートベルトを釣り上げる。

そしてその金具を、制服の背面、セーラー・カラー裏に隠していたフックに連結し、

「キンジ、今――ブレェーキ！」

叫んで、ばっ！

俺がブレーキを蹴り込むと同時に、理子は背中のリボンを一気に解いた。

――ばさばさばさっ！

ヒラヒラの改造制服は瞬時に解け、パラグライダーとなっていく。

そのブレークコードを掴んだ理子は、慣性で一旦前方につんのめってから、すぐ後ろに振られるようにしてデビルの後部座席へと転げ落

ちていった。
　パラグライダーはデビルの後ろで空気をはらみ、パンッ！　と音を立てて広がりきる。
　耳をつんざく急ブレーキ音の中で――減速ナシで高速から飛び出すZ8に白雪が何かを投げるのが見えて――
　ぼふんっ！　デビルの全座席前から、あまりの急制動にエアバッグが飛び出る。
（そ、そういう事か……！）
　車体のブレーキに理子が併用したのは、空力ブレーキ。
　要するに車体の後ろにパラシュートを展開し、空気抵抗で減速をかける方法だ。
　実際これは極めて効率が良く、ドラッグレースの車、地球帰還時のスペースシャトル、あるいは戦闘機にも採用されている。
　おかげでデビルの制動距離は大幅に短縮され――

がくんっ、と前輪だけを高速道路の端からハミ出させる形で……停車、できた。

「孫ッ……！」

俺がエアバックを掻き分けるようにして顔を上げると、

「……な、なんとかなるものなんだね。キンちゃんもお疲れ様でした」

助手席側のエアバックに体を預けつつ、白雪が苦笑いしてきた。

その笑顔の横では、ぎらり。

車のドアに、白雪の補助刀剣こと鎌が突き立っている。

鎌からは玉鋼製の長い鎖が、高速の縁から下へと垂れており……

恐る恐る車から降りてそこを見下ろすと、鎖の先端には分銅に掴まった孫がいた。

「……フンッ」

俺と目が合った孫は、ちょっと決まり悪そうにソッポを向く。

Z8は更に下の消波ブロックの上に突き刺さるように落ちていて、

前半分は水没、後ろ半分は炎上している。あのまま落ちてたら、孫も命が危なかったかもな。

俺は――キャデラックからお行儀良く膝を揃えて降りてきた白雪に、

「偉いぞ、白雪。孫は人間かどうか微妙なところだけど……おかげで武偵法違反のような行為はしないで済んだよ」

なでなで。

風で少し乱れたロングの黒髪を梳くように、右手でイイ子イイ子してあげた。

「はい……お役に立てて嬉しいです……あなた……」

どなた？

ウットリしたとき恒例の二人称で俺を呼んできた白雪に、俺が苦笑を返していると……

「理子は理子はー!?　偉かったでしょー!?」

俺の左側に、ニョキッと理子が出てきた。

ハニーゴールドの下着姿で。

「――とおーッ！」

白雪が三本貫手（数字の3を表すような手つきで敵の両目を突く空手の荒技。チョキで突く二本貫手より目潰し成功率が格段にアップする）を放つが、理子はそれをヒョイッとふざけた動きでかわして俺に抱きついてくる。

そして、ゴロニャーン。

普段の理子全開で、頬をスリスリして甘えてきたよ。

ので、

「ああ、おかげで助かったよ。理子は本当に天才だ」

理子にも、なでなで。

左手でイイ子イイ子してあげておく。

「えへへ～。キーくんのナデナデ優しいよぉ～。理子、溶けちゃいそう……」

とろーんと潤んだ目で見上げてくる理子には、
「俺が優しい？　そうかな？　それは相手にもよるね。今もし俺の手が優しいのなら……それは、理子に触れているからじゃないかな」
そう語って、
「はうぅーん……」
甘えきった吐息を漏らす理子を、無力化させておきつつ……
同時に白雪には、制服の裾から少し背中に指を入れさせてもらい、
「ひゃうっ」
という艶めかしい声をスルーして、トントン、トトン。『白雪が一番だよ』と指信号でケアしておく。
俺が左右の腕で2人の腰を抱き寄せ、順番にその顔をのぞき込めば
――
白雪は『ですよね！』的にニコニコしており、理子もマタタビを嗅いだ猫状態で、共に安定期に持ち込めている。暴走はしなさそうだ。

ここから、ここで2人にケンカされちゃ困るからな。
そう思って見やった、高速道路のフチに……
「さっき銃弾を噛んでちょっとグラグラしてるんだぞ。これ以上あたしの歯を浮かすな」
うんしょ。と、孫が手足とシッポを使って上がってくる。
「……歯の浮くようなセリフで悪かったね。でも、お聞きの通りだ。俺は相手によっては、激しい触れ方をするよ？」
孫にそう警告してやると……
さっきの勝負には負けたと自覚しているらしい孫は、ぐい。
無い胸の前で腕を組み、
「調子に乗るな。言っとくが、お前とあたしは今ようやく引き分けになったところだ」
俺を睨み付けてきた。
対し、白雪と理子が改めて孫に鋭い視線を送る。

俺は孫の言葉を否定する気はなかったので、

「ああ。それは分かってる」

とだけ、返しておく。

孫と、俺の戦い。

その1本目は――

俺と俺のバカ弟が仕掛け、逃げて、負けている。東京、鏡高組本家の屋上での戦いだ。

今のこれは、2本目を返したに過ぎない。

3本勝負だと考えると、もう1本要るんだ。この対戦には。

「どうする？　すぐ闘るか？　あたしは今の組み討ちの余韻に浸りたいとこなんだけど、曹操たちがそうはさせてくれない気がするんだよな」

視線で俺たちの背後を示した孫に促されて、振り返れば――

装甲車が高速道路の上、ここから少し離れた所で停車している。

一目で分かる。拳銃の有効射程外、M1919の有効射程圏内だ。
ココたちは俺たちがそっちを見たのに気付いたらしく、ゾロゾロと4人出てきて……
路上で何やら戦隊モノの決めポーズみたいに組み合わさって、バッ、バッ、バッ、バッ。
こっちに向けて、中国拳法の構えをそれぞれ見せてきた。
そして、
「一、二、三ッ――四象罗汉陣！」
声を合わせて、叫んだぞ？
何……あれ。
カワイイけど何。
「……組体操か？」
分からん、という顔を俺が孫に向けると、
「えーっと、あれはそれぞれ青龍・白虎・朱雀・玄武だ」

と、孫はココ1～ココ4を順番に指さした。

……？

……あ、ああ。言われてみれば。

なんとなくそれぞれ全身でヘビ、ネコ、トリ、カメを表現してるっぽく見えるよ。

「で、何なんだよ」

「お前たちを威嚇してるんだよ。コワイだろ？」

孫がドヤ顔で説明したので、俺・白雪・理子は顔を見合わせてから……

組体操みたいな姿勢を保つのが難しいのかココたちがちょっとプルプルしてるのを見て、あれをシカトするのも忍びなかったので……思い思いに『コワイなあ』というジェスチャーをしてやった。

すると満足したのか、ココたちはニヤーと笑う。

それからバラけて、手際よくそれぞれいろんなハッチから装甲車に

搭乗し直した。

「……」

しばらくの沈黙に続いて、俺はココたちはともかく孫に向き直る。

そして、

「さてどうしよう？　すぐ闘るかい？　俺は一休みしたいところだけど、Sランク武偵のお2人さんがそうはさせてくれない気がするんだよね」

さっきの孫の言葉を言い直すような形で、話題を元に戻す。

「……？」

という顔をした孫のセーラー服の胸、その中央に……

赤く光る、ドットが浮かんでいる。

レーザーサイトだ。狙撃銃の。

孫がそれに気づいた事を確認したように、フッ、とドットは消える。

これは、レキによるものだろう。それと……

「A―TNK弾よ、それ」

――ココッ、ココココッ――

立体高速道路の下から、YHS　01――ホバー・スカートから噴射推進音を断続的に鳴らしつつのアリアが現れた。

ピンクのツインテールとスカートをフワリと翻し、孫から少し離れたところに着地したアリアは……

ぎろり。

まず両手に花の俺を睨み、それからサラセンを見た。順番おかしくないですかそれ。

俺は一応、戦いながらアリアにもメールを送ってたんだが……

呼ばない方が良かったかな。俺の身の安全上。

ちなみにアリアは途中からこのカーチェイスについてきていた。レキを抱っこして吊り下げ、上空から。

運搬したレキをビルの谷間に下ろしてからは、洋上を飛んでたが――

―花の女子高生さん、お空を飛ぶ時はスパッツぐらいはいた方がいいんじゃないかな？

これは俺がここの理子にチャリジャックをやられた日、初めて会ったアリアにも思った事だけど。

「じゃ、まず炸裂弾を潜らせて装甲車ひっくり返すわ。その次、あんたら3人とも風穴。孫悟空はレキに任せたの」

ガバメントに武偵弾をコンバット・リロードしたアリアは、全員処刑モード。

それに苦笑いしつつも、俺は……

ふてくされ顔の孫に、視線で警告しておく。

レキがレーザーサイトを使うのは、珍しい事だ。

そしてそれは大抵、何らかのメッセージを伴っている。

レキは……通常、敵を無警告で撃つ。しかも台場でパトラを撃った時に見たが、敵にも狙撃能力がある場合は眉間を狙う。

それはやめろよ、と、かつて叱ったところ……『人は心臓を撃たれても、希に反射的に反撃してくる事がありますから』とか、的外れながらもレキなりの理屈を語っていた。

だがさっきのレーザーサイトは、孫の胸の中央にドットを灯した。

そこは俺がレキにも教えてある、ジーサードが撃たれた位置。

つまり――『孫がジーサードにしたのと同じ事を返す』という宣言だろう。

さあどうする？　孫。

孫は銃弾をヒラリヒラリと躱し、あるいは噛んで止めてみせた。

だがそれは拳銃を相手に、だ。

レキは狙撃手。無数にある香港のビルのさらに無数にあるどれかの窓に潜み、今も孫に照準を合わせている。それを今から見つけ出して斃すというのは現実的な話じゃない。

レキ本人やジーサードがやったのを見たが、数km単位の超・長距離

狙撃なら『発砲から着弾までに対処する』という道もあるだろう。だがレーザーサイトが見えた以上、そんな距離が狙撃手と自分の間に無いことは明らかだ。

しかもアリアが言うまでもなく、孫が名古屋武偵女子の防弾セーラー服を着ている以上……レキの銃弾は、それを貫く装甲貫通弾だろう。

先月、規制緩和で解禁されてたしな。

（もし俺が孫だったら――）

という予想通り……

……キラ……キラ……

「――そんなに見たいか。よし見せてやる」

孫は頭上に、金色の微粒子を回転させ始めた。

金箍冠。レーザーに頼るつもりだ。

紅く光りだしたその瞳は、アリアに向けられている。

さらにサラセン側ではアリアの出現に対応するかのように、ココが

2人出てきて――

車上で1人が身を丸めて三脚代わりになり、そこにもう1人が単装発射筒式の火箭炮を載せた。あれは、中国軍の85式ロケット砲――最高秒速372mのロケット弾をぶっ放す、地対地ロケット砲だぞ。なんでそんなモン流出してんすか人民解放軍さん。

ココの狙いは、俺・白雪・理子。

今回は長距離だが、これも複数射撃線状況。銃口を突きつけ合い、身動きが取りづらい状態を作られた。鏡高組でのヤクザたちとの撃ち合いを思い出すよ。

（孫と、因縁の3本目が……始まるか……？）

俺が腹を括りかけた時――

「……？」

この戦いをビルの窓や木に登って見ていた香港市民たちのうち、数%が……サッ、サッ。次々に敬礼を始めた。その場に慌てて跪いたり、

ひれ伏したりしてるのもいる。

そして、パカッ、パカッ、パカッ――

ちょっとこの場にそぐわない、蹄鉄の音がやってくる。

高速道路を駆け上がってきたのは……

えーっと……あれは俺の……目の錯覚かな？

「お、お馬さん？」

隣で白雪もそう言った。見間違いじゃない。白い馬だ。

その白馬に跨るのは、色鮮やかな刺繍入りの漢族・文官の宮廷衣装を着た……

――諸葛静幻。

藍幇の大使だ。

「……チッ。つまんないのが来やがったな」

孫が舌打ちする中、駆け足から並歩になりつつやってきた白馬は――颯爽とココたちの前を通り過ぎ、サラセンとデビルの間で止まった。

ヒョロッとした体――前に見た時より、痩せたな――をした諸葛は、張り付けたような笑顔で俺たちに一礼してから、ココたちの方に馬ごと向き直る。

そして丸メガネの下の糸目をニコニコさせたまま、

「鬼ごっこの時間は終了ですよ。曹操」

ココたちに怒った声で告げ、カラフルな羽根で出来た軍配を向けた。

あれは……あの笑顔で、怒ってるのか。

目がやたら細いから表情が読みにくいのもあるが、ある種のポーカーフェイスだな。

「あいつ、武器を持ってないよ。強いて言えば馬ぐらいだね」

俺にだけ聞こえる声量で、理子が一瞬でそれを見抜いて教えてくれる。

俺の見立てでもそうだ。諸葛は丸腰の単騎で、ここに乗り込んできたのだ。

だとすると……絶対に、何かあるぞ。アイツは力を隠している。すぐ人質に取ろうかとも思ったが、それはやめた方がよさそうだな。

それにしても、あちこちで諸葛に敬礼しているのは……全員、藍幇の構成員か。凄いな。

それと……

「……」

ココたちも、イタズラを見つかった子供みたいな顔をして装甲車から降りてきてる。

諸葛はどうやら、藍幇の中でも相当な地位を持った人物らしい。

場の空気を読んだアリアも銃口を上に向け、孫もレーザーを改めてキャンセルした。

藍幇と、バスカービル――

ここでの全面抗争は、水入りだな。とりあえず。

「今、あなたたち姉妹の役目は闘うことではない。極東戦役のルール

には違反しませんが、藍幇の議決に悖ります。孫を勝手に連れ出し、バスカービルに仕掛けたのは重い罪科です。上海の本部に正式に伝えましょうか？」

そこで、はぁ、と溜息をついた諸葛は――

「あなたたちの位階はまた下がり、上げるのにコストがかかりますよ？まあ、私の報告次第ですが……」

やれやれ、と首を横に振っている。

叱られたココたちは、

「バーカ！」「チクリ魔！」「宦官ヤロー！」「頭でっかち！」

口々に諸葛を罵りつつ、ガンガンとサラセンを蹴っている。

激しく怒ってはいるが……諸葛と仲間割れはしない。負け惜しみを言ってるだけだ。

ＩＣＣビルのＯＺＯＮＥで理子から聞いたが……

藍幇は、序列や階級のあるヒエラルキー組織。

その地位は組織への献金で買う事もできる、金権組織でもある。
新幹線ジャックをやった時も、ココたちは日本政府から金をせしめようとしてた。俺とアリアを中国に連れ去ろうとしていたのも、手駒として戦わせて荒稼ぎする目論見だったらしいしな。
そういった組織内のパワー・ゲームで――
諸葛は、ココの上役に位置しているってワケか。
そしてその位置関係が、ココたち的には面白くないらしい。見たところ。
（諸葛亮孔明は曹操孟徳を赤壁で破ったけど……現代でも、諸葛は曹操を凌いでいるって事か）
バスカービルも人の事は言えないが……どうやらというかやはりというか、藍幇という組織は内部の統制がいまいち取れていないんだな。
人数が多すぎるせいもあるんだろう。傍目に見ても、ギクシャクしてる。

ここの派閥は、タカ派のココ、ハト派の諸葛、板挟みの猴／孫ってとこかな。

「孫。あなたもいいですね。もうお休みの時間でしょう」

と、諸葛は懐から……エジプト風の、小さな鍵を取り出す。

それを見た孫は、

「ケッ。曹操とは気が合うんだがな。お前はニガテだ」

すとん。超ミニのスカートお構いなしで、その場にあぐらをかいてしまう。

……凄いな。諸葛静幻――

この場を、言葉だけで治めたか。

高い身分があってこそ出来た事だとは思うが……金の話をちらつかせるとか、その辺も上手かったな。

それでココたちを静まらせて、そのココと友好的な孫を次に処理したのも巧みだ。

そして、そのトドメにちらつかせた鍵。
見た目から考えて、あれが『パトラの鍵』ってやつか。思ったより小さいな。
「――遠山キンジさん」
俺の名を呼んだ諸葛は、ヒラリ。
馬から下り、左右の手を胸の前でそれぞれ反対の袖に突っ込んで恭しくお辞儀してきた。
うーん。行動がいちいち慇懃な男だな。
「猴から聞きました。あなたの講和案を。私も大筋で同意です。あなた方バスカービルと正面衝突するのは、コストがかかりすぎますし」
という諸葛の発言に、俺の講和案を知らないアリアがキョトンとして俺を見てくる。
「それに――遠山さんは北角の人々と仲がよろしいとのこと。私としましても巻き添えが出るのは望むところではありません。極東戦役の

理念もありますしね」

元から細い目をさらに細くした諸葛は、ニコニコ。

あくまで笑顔を崩さず、語りかけてくる。

そのフレンドリーな印象は……悪くないけどな。俺の知る限りじゃ、こういうタイプは笑顔のまま人を撃てるんだよな。小夜鳴徹（ナイトウォーカー）がいい例だ。

今の発言も、ここの市民を人質（ひとじち）に取ったように聞こえなくもないし。

「猴から聞いてるだろうが、交渉（こうしょう）が決裂したら――その時こそ決戦だ。ただ、まあお前も知ってるみたいだが、俺は北角（ここ）の人たちには恩（おん）があるんだ。何にせよ場所は変えるぞ」

北角（ノースポイント）のみんなに迷惑をかけたくない、というのも本音だが――

もう一つ。俺の中心・中央に流れる血流は、時間経過と共に弱（よわ）まってきている。

タイムリミットが近づいてきている以上、ここで戦い続けるのは不

利だろう。

「ええ、もちろん。立ち話でしていい交渉でもないですからね」

諸葛は、深ーく頷いている。

「なので、バスカービル諸氏を香港藍幇の本営――藍幇城へご招待します。皆さまが香港入りされたことは随分前から存じていたので、貴賓客としてお迎えする準備も整っておりますよ」

「……俺が敵のアジトにノコノコ入るほどのバカに見えるのか？」

「虎穴に入らずんば虎児を得ずですよ、遠山さん。それに、ココたちの度重なる御無礼をお詫びもしたい」

「やったー！　藍幇城だぁー！　行こうよキーくん！」

イ・ウー時代に藍幇城へ行ったことがある理子は、金色下着姿でバンザイしてる。

「理子、あそこだーい好き！　藍幇城！　藍幇城！　ばんざーい！　ばんにゃああい！」

まだヒステリアモードの俺には、分かったが……

理子のこれは、わざとだな。

これは場所が不明だった敵の拠点に行くチャンスだぞ、ってことか。

「是非ともおいでください。それとも私、三顧の礼でもやりましょうか？」

「ジョークが好きだな。それはお前のご先祖様が劉備玄徳にやってもらった事だろ」

敵の、アジトか……

だが確かに、このまま物別れになっても埒が明かないしな。

諸葛をすぐに信用することはできないが、交渉しようと言ってるのは確かだ。

それに今、バスカービルは全員揃ってる。

マズいと思ったら一丸になって逃げるくらいの事はできるだろう。

あと……

諸葛はこれだけの騒ぎに単身、丸腰で乗り込んできた。
今も何か、奥の手を隠しているに違いない。
ヘタに拗らせない方がいいな。ここは。
「……分かった。行ってやる。みんなもいいな？」
そう言うと理子は俺に飛びついて喜び、白雪もそれに対抗して抱きついてきて頷く。
そして二丁拳銃をくるくるすぽっとスカート内のレッグホルスターに収めたアリアも、特に異存はない素振りだ。
そして、ずかずかずかっ。大股でこっちにやってきて……
「それはいいけどっ。ところでキンジ、いいわねェー！　両手に花で！」
がし！　がしがしっ！
蹴り込んだ水月を踏み台にしての、跳び二段蹴りっ……！
俺を高速道路から落とさんばかりの勢いで蹴ってきた。
てか、白雪と理子が引っぱってくれなきゃ落ちてたぞ今の。

「キンちゃんになんてことするの！　男性は大きな胸が大好き！」
「そうだよ！　自分に胸が無いからって逆ギレしちゃダメだよアリア！」
「何よっ今は何をどう考えても胸は関係ないでうぐえっ！」
最後アリアの声が詰まったのは、手を繋いだ白雪と理子のツープラトン・ラリアットがノドにヒットしたからだ。
どたーん！　と割とガチに危険な角度で後頭部から道路に倒れたアリアを、ココや孫も『えーっと……その本気度の高い仲間割れは、バスカービルの日常風景なのか？』という引き気味の顔で見てる。そうなんですよ。すみませんねホントこんなチームで。
「いやぁ、それにしても臥龍鳳雛をいっぺんにお招きできるとは。光栄ですよ」
諸葛だけはニコニコしつつ、今の仲間割れを何でもない事としてスルーしてるが……
「誰だよ……ガリョウ・ホースーって」

「眠れる龍と、鳳凰の雛です。遠山さんとアリアさんを示す、香港警務処が付けたアダ名ですよ」

寝てるドラゴンと、ピヨピヨ状態のフェニックス……

なんとなく、っぽいかもな。

ていうか、

「マークされてたのか。俺たち。香港警察から」

「ええ。警察内部にも藍幇の会友は大勢いますもので」

どうりで、ココが香港警察の装甲車に堂々と乗って来たわけだ。

大した組織力だぜ。会員１００万人はダテじゃないな。

「香港武偵局でも、準一等要注意人物としてリストされてましたよ。そちらでの通名は、エネイブルとカドラだとか。実際、孫と互角に戦うお姿も示されたワケですし……今後、有名人として永くその名をこの地に覚えられる事でしょう」

などと諸葛に聞きたくない話を聞かされ、ガックリうなだれる俺に

……

平然と復活してきたアリアが、

「何しょげてんのよキンジ。人間じゃないのと戦って世間から危険人物認定されるぐらい、今さらどうってことないでしょアンタ」

まだ俺とのOZONE（オゾン）での大ゲンカを引きずってるっぽい冷たさで言い放（はな）つ。

あーあ。

日本（主に自分のせい）、イギリス（アリアのせい）、アメリカ（ジーサードのせい）だけじゃなくて、香港政府にも目ェ付けられつつあるのかよ俺。もう蘭豹（らんぴょう）を笑えないな。

しょげ返った俺に近づいてきた諸葛は、

「……ところで、ひとつ質問なのですが」

何が面白いのかニコニコとこっちの顔をのぞき込んできた。

それこそ日本から来た芸能人を見るかのように、興味津々（きょうみしんしん）の目つき

で。

「そもそも一体、何者なのですか？　あなたは」

なんだその訊き方。根は失礼だなコイツ。

俺は諸葛と目を合わさず、

「――ただの高校生だ。ちょっと偏差値低めで、荒っぽい学校のな」

ブレザーの襟を整えて、そう答えておいた。

そうありたいと願うぜ。まったく。

2弾　藍幇城

デビルとZ8の後片付けは、藍幇に任せて――
俺たちは送迎車としてやってきたリムジン、フォード・リンカーン2台に分乗する事になった。
意外とすぐ近くの4階建てビルの屋上にいたレキも、1階のレストランから吊しの北京ダックを掻き分けて出てきて……
『白雪と理子をキンジに近づけるべからず』というアリア様の意思通り、そのレキと俺が1台目に諸葛と同乗することになる。
諸葛はまずレディー・ファーストでレキを、次に俺を、広いL字型シートのある車内のVIP席に並んで座らせた。
（想定してた流れとは、かなり違うが……）
これで、所在不明だった藍幇城に入れるワケだ。
キラキラ輝くシャンパンクーラーにはボランジェやドン・ペリニヨ

ンが挿さっていたが、酒を呑まない俺とレキにとっちゃシャンパンなんか水ほどの価値もない。

という俺の表情を素早く読んだのか、後から車内の下座についた諸葛は――

「まあ、これは気分出しという事で」

と、ウィルキンソンのジンジャエールをシャンパングラスに注いでくれた。

同じ瓶から自分にも注ぎ、グラスもテーブル上の選ばせるような位置に置いてる。

これは……武偵業界的には、最も腰の低い行為の1つだ。

普通、敵対する相手には飲み物は『毒が怖くてビビってるか？』って顔をして出すものだからな。

ノドが渇いていた俺はそれを飲みつつ、

「で、お前はどんな戦闘能力を持ってるんだ？　あの場に1騎で堂々

と出てきたって事は、超能力者か何かか？」

見るからにひ弱そうな諸葛に、気になっていたことを詰問する。

すると諸葛は、

「不是。なんにもありませんよ。さっきはあなたに殴られたら、ノビて囚われてしまっていたところです」

自分もグラスを傾けながら、しれっと答えてきた。

あれ……おかしいな。ウソをついてる感じじゃないぞ。

という顔を俺がすると、

「ああいう出方をしたのは、『何かあると思わせること』が目的だったからですよ。そうしないと、藍幇側はともかく――あなた方の収まりがつかなさそうでしたから」

「……」

だとすると、さっきの俺の停戦判断は――

完全に、一本取られた事になる。

やってればこっちが勝ってた場を、コイツにうまく切り抜けられたって事か。

諸葛(しょかつ)――こいつめ。

（ヒステリアモードの俺を……欺(あざむ)きやがったのか）

そのポーカーフェイスと、知略(ちりゃく)だけで。

やっぱり、デキるな。この男。

過大評価するつもりはないが、シャーロック級に頭がいいヤツかもしれないぞ。

それに昔、カナが言っていた。

銃弾(じゅうだん)をバラ撒(ま)いて場をおさめるのは、実は簡単なこと。

本当に難しく、価値があるのは、一発も撃たずに砲火(ほうか)を治めることだと。

それを諸葛は、やってのけたのだ。俺たちの目の前で。そしてそれを誇(ほこ)りもしない。

コイツも今までとは……違うタイプの敵だな。

「……お前、ココたちに『役目は闘うことではない』とか言ってたな。あいつらの仕事は何なんだ、今、本来」

「虫が報せましたかね。彼女たちの役目は今、遠山さんの饗応役なんですよ。本当は」

「はぁ？　全く逆の事をされたぞ」

「すみません」

ぺこり。普通に謝りやがった。

気が抜けるな。

「でも、仮想アリアさんの髪型は続けさせてるんですよ。遠山さん向けに」

何だか分からん事を諸葛が言うと、きろっ、とレキが俺に鋭く流し目してきた。

なんで俺に怒るよ？　レキ。お前もお門違いだなー。

「あとは孫の監督役なんですが、これはもう解任します。孫は、ココと一緒の時はうまく勢いに乗せられるところがあるのですが……気が合いすぎるというのも、考えものですからね」

なるほど。

それでココと猴・孫は割とセットで動いていたわけか。

だがそれも解任という事で、

「それは、こっちとしてもそうしてもらいたい所だ。もうココと孫は離しとけよ」

俺は一応、クレーム気味に言っておく。

諸葛という人物は、暴走しがちな藍幇を取り締まるためにも奔走してるんだな。そこはバスカービルのリーダーとしてちょっと同情するよ。

見たところ香港藍幇の頭はコイツらしいが、戦闘力を持たない事務方がリーダーという武闘派組織は無くはない。得てして構成員が乱暴

すぎると、自浄作用として調整役が上に立つものなのだ。

そしてそこにこういう頭の切れるヤツが立つと、全然違う。

どんなに豪傑を揃えても、頭の切れる参謀がいなければ烏合の衆になってしまうからな。武力集団に於いて、『そこに頭のいいヤツが1人いるかどうか』は極めて重要な事なのだ。シャーロックが統率していたイ・ウーなんかには、世界中が手を焼かされたワケだしな。

正直、頭にはあまり自信のない俺としても――

あまり、敵に回したくないタイプだ。諸葛は。

本物の策士、名参謀って感じがする。

うちにも自称策士のジャンヌがいるけど、あれはコソコソしてるのか正々堂々としてるのかすら自分の中でハッキリ決まってない不良品だしな。

というワケで、俺的にはかなり高く評価できる諸葛静幻なのだが……

（コイツは……）

少し、気づいた点があるな。もう切れてしまった、ヒステリアモードの最後っ屁で。

間近に見て、それも確認できた気がする。詳細までは分からないが。

しかしそこは俺が気づいた事に気づかれても面倒だ。

あまり軽率に話したい話題でもない。

ので、

「ところでお前、ずいぶん日本語が上手いな。ヤクザとの絡みは長いのか？」

ここはヨタ話を振っておいた。

すると諸葛は普通にそれにも応じてきて、

「ええ。それと藍幇にはイ・ウーとの通商の歴史もありますので。あの艦で共通語として使われていた日本語とドイツ語は、喋れる者が多いんですよ。ココも簡易日本語――協和語を喋りますでしょう？　な

んとかネ、とか、なんとかアル、とか」

ちょっとお茶目なモノマネを交えつつ、グラスを傾けるのだった。

香港島の西部は、急峻すぎて人家を建てづらい土地が多い。

なので自然が多く残っており、リムジンの広い窓から眺める景観も良かった。

リゾート地みたいな感じだな。東京周辺で言えば熱海ってとこか。

ノンビリとそこを周遊するように走ってから、日が傾いてきた頃――

俺たちは深湾遊艇會というヨット・ハーバーでリムジンを降りた。

ＯＺＯＮＥで理子も言っており車内で諸葛にも説明を受けたが、藍幇の起源は海賊。

その名残で、藍幇城は古くから洋上に浮かんでいるんだそうだ。

だが船舶ではなく、要は浮体構造物のハシリみたいなものらしい。

武偵高のある学園島、人工浮島の小型版だ。

スポーツクルーザーやキャビンクルーザーが所狭しと停泊する船着き場から、ホテルの一室みたいな内装の小さなクルーザーに乗せられて……

ヨット・ハーバーを出て大した時間も経たないうちに、

「見えたよ見えたよー！　藍幇城ダヨー！　きゃっほーい！」

きゃーきゃー大騒ぎする理子に、俺たちは甲板へと引っ張り上げられた。

そして、

「うおっ」「な、なにあれ。ちょっと凄いわね」「うわぁ、派手だねえ」「でしょでしょ！　中はもっとキラキラなんだよー！」「……」

俺、アリア、白雪、理子、レキはそれぞれ、ドン引き3人、ハイテンション1人、ノーリアクション1人でその豪華絢爛な水上建造物を眺める。

藍幇城は目測、横幅２００m・奥行き５０m程。
洋上にどっかりと浮かぶ、3階建ての巨大な建物だった。
屋根瓦は藍色。優雅に反った棟やシャチホコ代わりの中国龍は眩い金色。外壁は朱色を基調に、薄青緑、白、そしてこれまた金で彩られており、そのほぼ全面に余すところなく龍・虎・亀・鳳の見事な彫刻がビッシリ施されてある。
巨大な城全体が、緻密な美術品のようだ。
そんじょそこらの世界遺産が裸足で逃げ出すな、こりゃ。
「金あるなぁ……」
日本で凄いモノは見慣れたつもりの俺も、世界に出て見る『凄さ』には、そんな小学生並の感想しか出てこない。
水上にあれを造るとなると、もう幾らかかるのか見積もることもできん。
どんだけ金持ちなんだよ。藍幇。

しかもこの城、無法者のアジトだというのに隠れてる感じが一切無い。

周囲には普通に民間人のボートや四角帆の戎克船、水上警察の警備艇までもが往来してる。

タグボートで曳航できる構造にはなってるが、接近して見えた竹色の水際についた藻の具合から見ても、普段はほとんど停泊しているんだろう。堂々としたもんだぜ。

こういう無法者のノリも、日本の尺度で考えちゃいけないんだな。

俺たちを乗せたクルーザーが藍幇城の正面玄関に横付けすると、

「さあどうぞ、ご入城を」

諸葛の声と共に、入口の左右に飾られた龍の像の陰からチャイナドレスの女の子たちがゾロゾロ出てきた。

そして笑顔で手を引いて、俺たちをクルーザーから上げてくれる。

アリアが持ち込んだホバー・スカート……YHS／01も、コワレ

モノ扱いって感じで丁寧に搬入してくれた。
降り立った藍幇城はとても大きいので、水上に在っても揺れは全く感じない。
「……」
外から見た分には――
この洋上の城、あまり高速での移動はできなさそうだった。波浪にも弱そうだ。沖合に出る事もよほど凪いでないとムリだろう。連れ去られる心配はまず無い。
それに建造物として見ても、窓だらけの扉だらけ。出口は至る所にある。
入っても、大丈夫だろう。
そう態度で示すように、俺は玄関ホールへと入り――
みんなも、ついてきた。
象牙、翡翠、珊瑚の彫刻で壁や天井が埋め尽くされたホールでは、

「どーもどーもー！　おっひさしぶりぶりー！　イ・ウーの頃以来だねー！」

理子が居慣れた様子で、藍幇の女の子たちとキャッキャウフフ。

向こうに好かれているらしい理子は、みんなにチヤホヤされてご満悦だ。

コイツは、ホントに……

ワルとつるむのに慣れてるよな。

藍幇は俺たちの敵。悪党なんだぞ？　基本は。

とも思ったが、理子も元々怪盗＝悪党なわけだし自然といえば自然な光景かもだ。

それに理子はアレだ、急に捕まっても少なくとも自分だけはスルッと逃げられる自信があるからああなんだろう。

なんたって俺とアリアからも逃げおおせた、逃亡の達人だからな。

藍幇城の所在を明らかにするために、理子はわざとここへ来るのを

勧めてたのかなとも思ったが……

なんか本気で遊びに来るのを楽しみにしてたんじゃないか？　これ。

「よーし！　りこりん今日はとことん飲んじゃうよー!?」

……あーあ……

もらったドラゴンフルーツを手に、なんだか分からんウェルカムドリンクをラッパ飲みしてるよ。理子。

ありゃもうダメだな。敵の手に堕ちてる。戦力外として考えよう。

だが、まだだ。

まだアリア・白雪・レキ、そして俺がいる。

俺たちがしっかりして、交渉をしっかり進めるぞ。

と、俺は少し遅れて到着した、ココや孫を乗せたクルーザーに鋭い一瞥を送っておいた。

ヴィクトリア湾に暮れゆく夕陽を眺められる、2階の貴賓室に案内

されると――

（……うおっ……）

大理石の床には柄つきの赤絨毯が敷かれてるし、円柱には黄金の龍がグルグルと巻き付いた立派な飾りがついてるし、鏡張りの壁には朱色の彫刻が重ねられてるし……

目がチカチカするので上に視線を逃がせば、そこでも鳳凰を象った金色のシャンデリアから赤い紐飾りが垂れてる。

「どんだけ赤と金が好きなんだよ、こいつら……」

「中国では赤は健康運、金や黄色は金運を表すラッキーカラーだって言うけどね……」

ボヤいた俺の横で、白雪も苦笑いしてる。

ここまで派手派手だと、なんか落ち着かないぞ。俺たち日本人的にはむしろ。やたらに広いし。

ただレキは別に何とも思わないらしく、壁際にあった玉座みたいな

イスに座って置物化。
そしてここでも理子さんは、
「いよっしゃー！」
10人は寝れそうな天蓋つきの大ベッドにダイブして、フカフカの羽根マクラをポンポンヘディングしてる。お前もうここに住めよ。
一方イギリス出身のアリアは――
「悪くない部屋だけど、クリスマス・ツリーが無いのはいただけないわね」
腕組みして、きゅっ。
さも当然のように玉座風のイスに腰を下ろし、レキと並んでお内裏様とお雛様みたいになった。中華風の。
「ツリーって。この部屋には似合わないだろう」
「似合う似合わないの問題じゃないの。キンジ、あんたがなんとかしなさいよ。ツリー。明後日はもうクリスマスなのよ？」

こだわるなー。

「見て分かるだろ。ここはバリバリの中国間だぞ。そんなもん置いたらカオスに……」

「――Hum?」

やばい。これはアリア様がお怒りの時の発声だ。

子供を怒らせると周囲に迷惑が及ぶからな。なんとかしなきゃ。

俺は不可能を可能にする男。あとでオリガミか何かでごまかそうっと。

「お……俺はちょっと偵察してくる。調査は武偵の基礎だからな」

俺は対アリア時にのみ発揮できる理子並の回避センスで巧みなアドリブを放ち、手近な扉を素早く開けてバルコニーに出た。

機嫌の悪いアリアの視界内にいて、得する事は何もないからな。

で……海からも見えてたが、俺が出た2階のバルコニーは藍幇城の外周をグルリと繋ぐ回廊にもなっている。実際、偵察するにはいいコ

ースだろう。

——夏に日差しを防ぐためだろうか、バルコニーの庇はかなり飛び出している。

一応、拳銃の安全装置を外してその大きな庇の下を歩くと……

窓から他の部屋も見えて、ここが戦闘拠点というより金銀財宝を収めた美術館みたいな施設だという事も分かってきた。

（理子は前に、藍幇とイ・ウーが共鳴してたって言ってたが……）

確かに、イ・ウーにも少し似てるかもな。

中華版、洋上版のイ・ウーって感じだ。ただ見た目の絢爛さとは異なり、造りは甘いというか古い。増改築を何度もしてる感じだ。木造部分も多い。

（イ・ウーよりは日常感があるというか、もうちょっと地に足がついてる感じだな）

俺なりの印象をまとめていると、バルコニーの一部……

果物のなる植物園みたいな所に差し掛かった。
そこには髪をお団子結びにした庭師みたいな女の子も何人かいたが、非戦闘員に見える。
多少の覚えはあるんだろうが、ほぼ全員、カタギっぽい。隙(すき)だらけだな。
本物――
――ココや孫(ノン)がいる限り、戦力的には不安は無いって事か。

「ただいま」
と、外回廊を一周して貴賓(きひん)室に戻ると――
……!?
室内に、て、天女(てんにょ)が4人いるぞッ……なんでだッ!?　神々しい……！
と思って目をゴシゴシして改めて見たら、それはアリアたちだった。
なぜちっとも神々しくない武偵娘(ブンキー)4人が天女なんかに見えたのかと

言うと、みんなして――ぞろっとした、中国の民族衣装を着ていたからである。

レキはさっきと同じイスに同じ姿勢で座っていたが、その衣装は常磐緑の絹服。中国の時代劇に出てくる高貴な身分の子女っぽいものに変わっている。一人称で『朕』とか言いそうな感じだ。ズボンだし。ヘッドホン外してるし。

「やっほーキーくん！　見て見てー！　藍幇のみんながコスくれたんだよー！」

きゃっはは～ん！

と、わざとらしいX脚で女の子走りしてきた理子は――見事な藍色のチャイナドレス姿。

これが凄く……に、似合ってる。

むかし聞きたくもないのに聞かされた事のある『金髪は意外とチャイナドレスに合う』という武藤の妄言は、真実だったのだ。

一方、黒髪ロングというチャイナドレスへの互換性が高い髪型をしてる白雪は……

「あっ、あっあっキンちゃんっ、私まだちゃんと着れてないの……！」

腰の上まで入ったスリットを結う金色の紐が結びきれておらず、緋色のドレスが乱れている。

ふくらはぎから太ももまで、側面スリットに柔らかそうにのぞく雪肌が艶めかしすぎる。

というかその更に上部に今チラッとのぞいた白い布は……位置関係から考えて……っ。

一瞬ヒスりそうになった俺の耳を、ぐいーっ！

「い、痛たたッ！」

「なに着替え中に堂々と帰ってきてんのよ！」

これも中華コスプレをした、アリアが引っ張ってきた。

ちなみにアリアの中国服は一言で言ってキョンシー。ココたちとお

揃いの清朝満州族の官衣を着てる。色はピンクで、帽子やら布の靴までフルセットでお着替え済みだぞ。

か、かわいいけど。みんなキレイだけど。

「お、お前らこそ、なに敵からの貰いモンなんか着てんだよ！　ここには遊びで来てるんじゃない、交渉で来てるんだぞ！　警戒心が無さすぎだ、防弾制服はどうしたッ」

俺がまくし立てると、

「だって戦って汚れてたんだもん。洗濯してくれるって言うから」

つーん。

中華アリアはソッポを向いて、反抗ムードだ。上半分を三つ編みにしたツインテールで。

「それに最初に着たのは理子よっ！　自分で着た挙げ句、レキにも着せてたし！」

しかも理子への責任転嫁。

アリアめ、ホントにガキだな……いつまで経ってもッ。

「ゆきちゃんが最初に『うわぁいい絹を使ってるね』って触ったんだよ！」

アリアから指さされたガキ2号こと理子は、すぐさま白雪に責任転嫁。

「ア、アリアが一番喜んで着てたよ！　『一度は着てみたかったのよ

ね』とか言って！」

白雪も白雪でアリアのせいにする事にためらいがない。

ていうかアリアを指す動きでまた腰横で下着がチラッとのぞいてるし……！

「し、白雪も！　言い訳より先に、着るならちゃんと着ろ！」

「じゃなくてアンタが出ていきなさいよ！」

げす！

アリアは『その場で真上へジャンプしてのドロップキック』というバリツの荒技で俺を蹴り飛ばし、玉を持った龍の置物に突き刺さりそうになった俺を――

「たあーっ！」

白雪がダイビングキャッチ。俺と共にごろごろっと床に転がって、命を救ってくれた。

だがそこで白雪のチャイナドレスは大きく着乱れ……

その長くて軟らかそうな脚部がほぼ１００％、露わになってしまった――であろう事が分かっていた俺は、素早く伏せてヒステリアモード化を防ぐ。

わーわー！　と白雪の下半身の有様に騒ぎ立てるアリアと理子の声からも、これが唐突ながらヒス的には間一髪のピンチだった事が分かる。

一方の白雪は、

「だ……だめだよ。みんなが見てるよキンちゃん……でも、キンちゃん様が見られるのが好きだったら……私は、いいの……女の子ばかりだし……見せつけてやりたいし」

俺に背後からしがみついたまま、全くもって理解不能な事を囁いている。

そんな白雪は左右の足をそれぞれアリアと理子に掴まれてズルズル引っ張り下げられ、なんとか俺とは分離してもらえた。

「も、もうお前ら……服でも何でも勝手にしろッ。俺は知らん！」

俺はヨロヨロと、また部屋から出ようとするが……

「キーくん、こっちの壁をバックに記念写真撮って！　はい女子はここに並ぶ！」

理子がラインストーンでデコった携帯を渡してくる。

振り返ればいつの間にか4人は服を整え、横並びになってこっちに目線をくれてるし。

チクショウ。もうどいつもこいつも完全に観光客じゃねーか。

この携帯、窓から海に投げてやろうかな。

日没後、しばらくして……

諸葛の案内で1階の大食堂に呼ばれた俺たちは、人が入れそうなほどでかい青磁の甕や壁に飾られた多種多様な中国剣なんかを鑑賞してから赤い漆塗りの円卓についた。

そこに、お団子頭のチャイナ服メイドたちが運んできたのは――

――出たぞ満漢全席。

中国全土に伝わるご馳走が全部出る、至高の贅を尽くしたメニューだ。

テーブルには次々と、山海の珍味が載ってくる。どれも見た目からして手が込んでるし、香りからして美味そうだ。

しかも諸葛の指示があったのか、ちゃんと日本人の口に合わなさそうなモノは除外しているな。高いサービス精神が見て取れるぞ。

だが……俺が香港に来る前から狙っていた、

（ラーメンが、無い……っ……！）

あれは庶民的すぎ、平凡すぎて無いという事か。日本の会席料理にも牛丼は普通出ないしな。

食べてみたかったのに。本場中国のラーメン。

などと自分も観光客的なセンスで料理を眺める俺の横では、アリア

が、シュルッ。

絹の官衣の袖を鳴らして、腕組みした。

そしてテーブルについてる諸葛に、キリッと眉をツリ上げてる。

「――毒じゃないでしょうね。私はあんたたちを疑ってるわよ」

そのカッコで言うかお前。

「何なら毒味役をつけましょうか？　皆様の食べる分が減りますが……」

フカヒレの姿煮から上がる湯気で丸メガネを曇らせた諸葛が、相変わらずニコニコ顔でそんな事を言うと――

「当然よ。まずあたしが選んだ物をアンタが食べなさい。そしてふあのふいふいふい」

発言後半でアリアの発言が不明瞭になったのは、目の前に出されたももまんを無意識のうちに掴んで食べながら喋ったからだ。

あーあ。

あの言ってる事とやってる事の違いっぷり。

（アリアも、陥落したか……）

藍幇側はそれがアリアの好物とハナっから知ってたらしく、ももまんをピラミッド状に積み上げた大皿を運んできてる。

昔アリアが夢に見ていたももまんピラミッドが、ここ香港で実現されたのである。

それをバクバク平らげたアリアは、次に出されたももまんパフェなる西洋と東洋の融合スイーツをパクつく。さらに出た、ももまん麺、ももまん粥、ももまんまん（？）などのおぞましい、あるいは不可解なメニューも全て吸引していく。まるで星のカービィだな。色もピンクだし。

一方では白雪も、あんかけ麺みたいなものを上品にお箸で食べ……

「お、美味しい……！　キンちゃん、これ私も今度キンちゃんに作ってあげるね！　あの、どうやって作ったのか、お伺いしてもいいです

か？」

お料理教室気分で、通訳の少女に尋ねてる。

（……白雪も饗応に落ちた……）

理子は見るまでもない。

頼みの綱のレキも、当初はテーブルを「……」と人形の目みたいな目で見ていたが……

自分の前に運ばれてきたカロリーメイト、それも幻の『高級的枫糖蜜味』を前に鳶色の目をピカッと光らせたかのように見えた。

そして、もそもそもそ。

リスみたいな動きで、食べ始めたぞ。

レキ、お前もか……だがまあ、今は普通に夕食の時間でもあるからな。

これはまだ半落ちという認識にしておこう。

とはいえそもそもレキはコミュニケーション能力不足の交渉下手。

武偵高の校長を前にしても自分の要求しか言わないという、取り扱い注意の女だ。

つまり、最初から今の目的『藍幇との交渉』に於いては戦力外なのである。

（ここで頼れるのは、自分の力だけか……）

バスカービル一味を見回す俺の食が進んでないのを、サービス不足と思ったのか――

ちょこん、ちょこん。

席の左右に、超美人のお姉さんが2人ついた。スラッとした、チャイナドレス姿で。

そしてにこやかに箸やスプーンを取り、『はい、アーンして』的な動作。

あー……

これは……

「こらぁーッ！　バカキンジィ！」

ほら来た！

ももまんを咥えた状態のアリアがイスの後ろに回り込んできて、バターン！

「ふあのふいふい！　あんたはすぐそうやって！　ひんひんのふいふいなんはやら！」

イスごと俺を真後ろに倒してからの、俺の上でのオリジナル地団駄。

「ふむ。遠山さんは女性の尻に敷かれるタイプ……ですね」

そこでメガネを光らせて観察してる諸葛。そんな事まで分析すんな。

「お、おい！　行儀が悪いぞアリア！　食うか蹴るかどっちかにしろ！」

と言った、俺は――

蹴るのは選択肢に入れなければよかったと、70発ぐらい蹴られてから気づくのだった。

結局、満漢全席を供されたのに何も食えなかった。

中国の歴史上初なんじゃないか？　この悲劇。

レキのデザート用に山積みされてたカロリーメイト・水果味だけはギッてきたが、いまこんなダイエットフードみたいなもんを食うとむしろ虚しくなりそうだ。ポケットにしまっておこう。

しばらくバルコニーでほとぼりが冷めるのを待ってから……アリアがクールダウンした頃合いを見計らって、貴賓室の窓から内部を窺うと――

キャッキャッと、バスカービル女子一味は宴会ムード。

藍幇城をエンジョイしてる。俺抜きで。

その中心で騒いでるのは、やっぱり理子。

理子が完コピで歌い踊るももクロのダンスに、アリアと白雪は大ウケだ。正座して輪に加わってるレキまで、無表情だけど手拍子してるぞ。

（アイツらめ……ホント、何しに来たんだよ）

さらに見れば、アリアたちの傍らには立派な器がある。

そこには饅頭やら月餅やら果物入りのゼリーやらがメガ盛りだ。

女どもめ。あれだけ食って、まだ食うか。

あれが女子7不思議の1つ、『お菓子は別腹』ってヤツだな。

――ガラッ。

「お前らに一言、物申すッ」

俺は勢いよく扉を開いてバルコニーから登場し、室内の注目を集める。

「武偵高で習っただろ。こういう豪華さは、魚を釣るルアーみたいなモノなんだぞ」

藍幇による一連の歓迎は、見え見えの『わざと』。

金銀宝石を見せて、うまい物を食わせて、敵を骨抜きにしちまおうって作戦なんだ。

あの諸葛はコストがどうのとも言ってた。一見こういう接待は高コストにも見えるが、敵を殲滅するまで戦うよりずっと安上がりだったりもするからな。

それに、まんまとノセられやがって。

特に藍幇城についてからのコイツらは、見るに見かねる。

ここはリーダーとして、諫言してやる。

もう逃げん。折れん。ビシッと言ってやると、心に決めたぞ。

「お前らはダメな武偵の典型例だ。犯罪者に高い車や金品をチラつかされて、美味いもん食わされて、挙げ句に弱みを握られたりするのは……ダメな……ダメ武偵の、だな……」

……

なんか途中から、俺自身が東京でヤクザに一通り歓待された時の事を話してるみたいな気がしてきたな。

決意から10秒も持たずに勢いを失った俺に、

「分かってるわよ！」「分かってるよ。みんなはともかく、私は大丈夫だから安心して」「うっうー！」「……はい」「それよりキンジあんた、なに手ブラで帰ってきてんのよ！　とっととクリスマス・ツリーを持ってきなさい！」

4人がそれぞれ返してきた。ちっとも反省してない顔で。ちなみに5つめの発話は銃を振り上げつつのアリアによるものだ。

そして行儀よく正座してる白雪が、元から優しい垂れ気味の目をうんと優しくして……

「それよりキンちゃん、さっきご飯食べてなかったでしょ？　これお菓子だけど、お腹にたまりそうなのだよ。紅豆沙湯丸？　っていうんだって」

白玉アズキのスープみたいなのを差し出してくる。

ああ言った直後の俺も、空腹と、白雪の癒しオーラには抗いがたく……

「ま、まあ、『腹が減っては戦が出来ぬ』とも言う」

誰にともなくそう言って、その甘味をいただく事にした。

で、予想した通り、空腹も手伝って……

これがやたら美味い。ふんわりした甘さが、舌や喉、腹に染み入るようだ。

「山査子のお菓子もどうぞ。お羊羹みたいな見た目だけど、甘酸っぱくてサッパリする味だよ」

……まあ食べとくか。『毒を食うなら皿まで』だ。

だが食っても警戒心は解かないぞ、藍幇。

こういう饗応を受けるのはヤクザで経験済みなんだよ。俺だけはな。

「――うわぁー！　超おいしー！」

唐突に理子がジャンプしたのでそっちを見ると、朱塗りのヒョウタンから切子グラスに注いだジュースみたいなものを掲げている。

そして、トクトクトク。また注いで、グイグイ飲んでる。

「あらやだ何コレ。美味しいわね」

赤紫色の目を丸くしつつ、アリアも同じのをコップで飲んでるぞ。

正座したレキもグラスを両手持ちして膝に置いているが、飲んだ様子だ。

「……なんだよそれ。うまいんなら俺たちにもよこせ」

ちょっと食べたら腹が本気になってきた俺も、理子からヒョウタンを取って飲むが……苦っ。不味いじゃねーか。

ブルーベリー風味なのは分かるが……コップ1杯飲んでみても、美味さが分からないぞ。

だが、俺が置いたヒョウタンから金杯になみなみとそれを注いだ白雪も……

「うん。これは最高品質だね。ぬる燗か、お湯割りの方が香りが立ちそうだけど」

したり顔で、高い評価を下している。

（中国には、こういうジュースがあるのかな……？）

俺が訝しんで眉を寄せ、ヒョウタンをパスし合って回し飲みするアリア・白雪・理子を見ていると……

「ねえ白雪。もうちょっとだけ、ちょうだい……？」

アリアが白雪に対し、おずおず。

気弱なカンジで、コップを出した。

これは珍しいな。いつものアリアなら白雪には常に強気なのに。

すると、げしっ！

さっきまで正座していた白雪が、いつの間にか胡座に崩していた足でアリアを……

け、蹴ったぞ……!?

「きゃんっ！」

普段は白雪が上げるタイプの悲鳴を上げたアリアは、転んじゃってる。

な、なにこれ。アリア・白雪逆転現象。

今まで俺が見た幾多の超常現象（ちょうじょう）の中でも、最も超常な現象が起きてるよ。

「ふふふぅ……」

白雪はなんか満足げな笑い声をノドの奥から上げ、どんっ。

片足はあぐらのまま、もう片足の膝（ひざ）を立てて座り直してる。スカートなのに。

ま、まるで絵本とかで鬼が酒を呑（の）むときの座り方みたいだ。

（……酒……？）

そこで気づいた俺は、白雪の持つヒョウタンをいろんな角度から見てみる。

すると底に――『藍苺酒（ランメイチュウ）』。

――酒とか書いてあったぞやっぱり！

ヒョウタンに入ってる時点で、気づけば良かったぜ……！

「……」

恐る恐る周囲を見回してみると、アリアは――

「うえぇぇぇん、白雪がいじめるー！」

ぺたーんと崩れた正座をして、めそめそ女の子泣き。

な、なんてこった。

普段ならもう弾切れまで白雪を撃ってるところなのに、泣いちゃってるよ。ふえぇーんとか、アリア的には決してありえん泣き方で。アリアは呑むと泣き上戸だったんだな。

一方の白雪は、ぬぬぬぬぬぬ……

「この、ピンク武偵イ……」

今まで見た事のないタイプのオーラを漂わせ、赤ら顔でアリアを睥睨してる。

そして、カッ！　ノーモーションでキレ顔になり、

「――アリアは！　キンちゃん様と喋る時と、女子だけの時とで、態

度が違ァう！　特に自分の機嫌がいい時！　最初っから最後まで、キンちゃん様にニコニコデレデレと……！　私みたいに旦那様を遠くから見張る、じゃない、見守る慎ましさが理解できんのかァ！」

怖ッ！　なにこれ！　最後なんか男喋りだし！

ていうか目ェ据わってるって、白雪！

普段から時たま黒雪になる白雪だが、言うなればこれは……赤雪ッ。

赤鬼のごとき形相で、ひんひん泣くアリアをイジメてる。なんという絡み酒。

「おっほー！　これは珍しい光景ですなぁー」

ケータイで動画を撮り始めた理子は、一番呑んでたのに普段と全く変わらない様子だ。

コイツはどうやら、酒に強い体質らしい。

というか普段から酔っぱらってるような人格だからな。酔っても変わらないんだろう。

「よ、よせっ撮影は！　白雪のイメージに関わるッ！」

「えーそんなの壊していこうよー！　新しいゆきちゃん、鮮烈すぎるデビューなり！」

「ほらほらー！　ダンゴムシやれェー！　あははー！　しゃけだしゃけだー！　おしゃけもっと持ってこーい！」

丸まったアリア（防御体勢らしい）をゴロゴロ手で転がして室内を走り回る白雪は……

どうもあれ、初めて呑んだってカンジじゃないな。そういや星伽神社には御神酒を造る酒蔵があるとか聞いた事もある。それをちょろまかしてたんだろうよ、この巫女さんは。

「あははははー！」

「うえぇえぇえぇん！」

笑い上戸の白雪が泣き上戸のアリアを転がして、俺は理子とケータイを巡って取っ組み合い、頼みの綱のレキは……

ウト……ウト……

さっきと同じ姿勢で、正座のまま目を閉じてウトウトしてる。

コ、コイツは呑むと寝るタイプか。

「遠山くん……」

ん？

今の、レキが言ったのか？

と首を傾げた俺の前で、レキはそれを最後にそのまま眠ってしまった。

よく座って寝れるな……とも思ったが、コイツは普段から座って寝てた。あれがマジ寝の姿勢でもあるってワケか。

赤雪が「あつぅーい！」と叫んでチャイナドレスを脱ぎだした辺り

で――

やむなく俺は、室内にあった巨大な瓶に飛び込んでシェルター代わりにした。

そして鋼の精神力で、アリア・白雪・理子の乱痴気騒ぎを30分ほどスルー。

自分の携帯で映画サイトをチェックし「へぇー、ダークナイトの続編が作られるのか」などとひとしきり現実逃避してから……

貴賓室が静まりかえったのを確認してから、ソー……ッと顔を出す。

室内は、主に赤鬼が暴れたせいで荒れ放題。

目を回したアリアと酔いつぶれた白雪、それとレキは床で寝てた。

その白雪は下着姿だったが、大の字になって満面の笑みで熟睡……

というヒドい潰れ方だったため、俺的にはこれにヒスるのもどうかという正常な神経が働いてセーフ。

とはいえなるべく直視しないようにしつつ、葛篭の中にあった毛布

をかけてやり……

抱っこしている酒のヒョウタンを取り上げようとしたら「いやん、いやんっ」と寝言を言いながら放さない。ので、もう白雪はそのまま寝かせた。

レキは元の位置から微動だにせず正座で寝てる。あの騒ぎの中よく寝れるなこれも。

アリアは自分で自分を抱きしめるようにしてグスングスン鼻を鳴らしながら、こっちも床で熟睡してる。

（コイツらは……寝首をかかれるとか、そういう発想は無いのか？）

警戒心に乏しいバスカービルにガックリきつつも、俺は――

墨をつけた毛筆でアリアの額に『にく』とか書いてる理子と、

「……留守番を任せる」

「ラジャー！」

という短い会話をしてから、この惨状を見ちゃいられなくて貴賓室

から出て行く……という素振りで、藍幇城の城内を改めて偵察させてもらう事にした。

もう夜も更けた。監視の目も緩む時間帯だろうしな。

少し本腰を入れて探らせてもらおう。探偵科生徒の名にかけて。

拳銃を確かめつつ、俺は貴賓室から藍幇城の2階ホールの方へ出る。

そこにあった水瓶には石像の龍の口から常時水が出ていたので、酔い覚ましに少し飲む。

（俺も理子と同じで、あまり酔わない体質……だったのかな？）

よく分からないな。人は自分が酔ってるかどうか、よほど泥酔してないと自分では判断しにくいと聞いた事もあるけどな。

（中国では飲酒に年齢制限が無いから、違法にはならないんだが……）

少し、頭痛はする。後から効いてくる体質なのかもしれない。

アルコールは少量なら全能力を喪失させるような事はないし、スト

レスを緩和したり、血行が良くなったり、人によっては勇猛さが増すなど効用もある。

ただ中毒性があるのと、何より判断力が低下するので……武偵としては自ら摂取したいものではない。

今回のように誤って飲んでしまった場合は、バスカービル女子たちみたいに――休憩も兼ねて、寝てしまうというのも確かに1つの手だ。

ただ、交渉で訪れたとはいえ敵のホームでそれをやるのは下の下だけどな。

ていうか、あの部屋の惨状を思い出すことで気づいたが……

（俺、今夜どこで寝りゃいいんだ？）

あの部屋にはデカいベッドがあったが、俺と理子だけあのベッドで寝てたら、雑魚寝の3人に翌朝何て言われるか分かったもんじゃないし。

それ以前に理子にヘンな事をされてヒスっても一大事だ。

困ったな。

武偵が気をつけるべき3つのもの……闇・毒・女。

闇――今は夜だ。このホールさえ薄暗い。毒――酒は俺たち若手には毒。そのトドメに女までくらった日には、もうどうなるか分かったもんじゃないぞ。

あの女だらけの貴賓室には戻らず、どこか手頃な空き部屋か物置でも探そう。

と、ホールを歩いていくと……

3階へ続く、妙に明るい階段が見えてくる。

「……？」

近づいて、その階段が明るい理由に気づかされた。

――何と、黄金の階段だよ。

それも、金メッキをしたって感じじゃない。それなりの厚さの黄金の板金を階段に敷き、スキ間もしっかり金で繋いでいるんだ。水平に

も、垂直にも。

少し上ってみて、上から見渡すと……壮観だな。

（……ちょっと削って、貰っちゃおうかな……？）

とか良からぬ事を考えてたら、ちょいちょい。

いつの間にか3階の方から俺の隣まで下りてきていた女の子に、袖を引っ張られた。

その子は――

「キンチ」

――アリア？

アリアだ。ニコニコ顔の。

でもお前、2階にいたハズじゃ……？

しかも、いつの間に武偵高のセーラー服に着替えたんだ？

と思ってると、そのアリアが2人、3人、と増える。

「な、何だッ……アリアが……？」

「キンチ、来なさいよ！」「まあまあ、来なさいよ！」「こっちこっち」

4人に増えたアリアたちは、みんなニコニコ笑いながら俺の手やベルトを引いて3階へ連れていく。

そして、大きく『喜』と金縁赤字で描かれた扉を開き――

ここも絢爛な、赤を基調とした純中華風の部屋に案内された。

中には御簾の掛かった大きなベッドがあり、周囲にはコントローラーが4つのPS3、4つ散らばったPSP、麻雀卓など……4人用の遊具が幾つか見て取れた。

――それで気づいた。

（コイツら……ココかっ）

みんな小柄で顔つきもアリアっぽいから、見間違えた。

ていうか全員黒髪じゃねーか。なんで見間違えんだよ俺。

「ココ……！」

見回せば、窓には御簾が掛かってる。扉も閉められて、外から見えない密室になったぞ。

「キンチー！」

及び腰になった俺に、どれかのココが抱きついてきた。

そしてどれかとどれかのココが、ペンヤンペンヤンペンヤン……！

と、2枚の銅鑼を互い違いに鳴らしてる。

それから4人して……

下に棒が4本ついたハリボテの龍を出してきて、うねうねと俺の周囲を回り始めた。

敵対的な行為ではないので、何だろうと思ったが……どうやら俺を楽しませようとしているらしい。ココたちなりの歓迎か。

そりゃまあ、可愛いは可愛いんだが――

「お、おい。ココ。何のつもりか知らんが、俺はお前らと仲良く過ごすつもりはないぞ。まだ俺とお前たちは敵同士で……」

どのココがどれなのかも分からないので、俺は眉を寄せてランダムに話す。

だがココたちはニコニコと無邪気な笑顔のままで、

「ココたちはキンチと戦うしないネ。自分を売り込んでキンチの部下になるネ」

「キンチに取り入る、一生懸命トライするネ」

取り入るとか言っちゃったよ。まあ下心あっての宴会芸だろうとは思ってたけどさ。

「――そして諸葛殺っちゃうネ！」

とか物騒な事を言い出したので、先頭のココを手で止めると――

ドラゴン・トレインをやってたココたちはそれぞれの背中にぶつかって静止した。

だがさすが四つ子らしいだけあって、

「上海藍幇、1～2年のうちにスゴイ刺客を香港藍幇に送り込んでく

るネ」

「そしたらココたちが香港藍幇もらえなくなるヨ。今のうち、キンチがココたちと一緒に香港藍幇を乗っ取るあるヨ」

「それでキンチが香港藍幇のリーダーになるヨロシ」

「そしたらこの藍幇城も、家来の女たちもココたちも、みんなお前の物なるネ」

息の合った調子でセリフを分割しつつ、みんなで俺を見上げて話し続けてくる。

「そ、そんな藍幇内部のゴタゴタに俺を巻き込むなッ。俺は藍幇のリーダーになんか幾ら積まれたってならないぞ。女なんか逆効果だ。それに俺は武偵高に籍も部屋もあるんだ、香港に引っ越すワケねーだろッ」

するとココたちは、きょとーん。

揃って、ハトが豆鉄砲を食ったような顔をした。

そして、ごにょごにょ。

『わけがわからないよ』という顔を並べ、中国語で何やら話し合ってから……

「为、为什么？」

「キンチがあのキタナい学校の一生徒に納まってたら、其れ変な事。キンチの損するヨ」

「名将――腕のある者、その腕を高く買ってくれる豊かな地に移って、そこを治めるべきある」

「これは世間の常識ネ。政財界でもみんなそうしてるネ」

そ、それが中国人の価値観なのか。

いや、日本でも有能な会社員が高い報酬や役職に釣られて会社を移る事はある。それが海外の企業だってケースも。

寄らば大樹の陰。藍幇は巨大組織で、確かに何でもある。反社会的なヤクザと違って、国家権力とも金やコネで密接に繋がってる様子だ。

俺が『武偵高の一生徒』から『藍幇の地方リーダー』へ抜擢されるとすれば……

それは、広い視野で見れば大出世。

算盤勘定だけで言えば、断るのはおかしい話なのかもしれない。

だが――

「キタナい学校で悪かったな。だが俺はそこにいっぺん背を向けて、不義理をしてるんだ。二度目は無い。それに金と権力に目が眩んで眷属の藍幇に――敵に寝返ったなんてなったら、末代まで笑われる恥になるぞ。そんな交渉、人として出来んッ」

俺が『義理』『恥』『人として』などというとっても日本人的な価値観を持ち出すと、ココたちはまた意味が分からないといった顔。

えっ、相手の値踏みと、それに応じた地位と金と異性の授受が交渉の全てじゃないの？　という目で、また4姉妹して中国語で話し合ってる。

するとココのうち1人が何やら残りの3人に「じゃあこうしよう」的な事を言って……

3人はそれに大賛成。みんな、カードゲームで次の強いカードを切るような顔になった。

イヤな予感がするぞ。

「――キンチはアリアが好きネ」

「……は？」

予想のナナメ上を行くココの発言に、今度は俺が豆鉄砲を食ったハトの顔だ。

「女の目はごまかせないある！」

「ハタから見れば見え見えヨ！」

ココたちは両手を飛行機みたいに広げ、それぞれブーンと走っていき……花鳥（かちょう）の彫刻（ちょうこく）が施（ほどこ）された、アンティークの中国箪笥（だんす）に飛（と）びついた。

そして……

（ちょっ……！）

俺の視界内でそれぞれ、ぽんぽーん！

ココたちは武偵高のセーラー服を、宙に舞わせた。脱いじまったよ！

一瞬で！

腰を抜かした俺がさらにその場に座り込んでしまう事に、よ、４人とも下着を、その、下にはつけてるけど、う、上にはつけてないッ。なんて豪放なっ。アリア並にぺったんこだと、あれはつけなくてもOKな下着だったのか……ッ！

「アリアはこれとかこれ、着たデータあるネ！」

体型がみんな同じココたちはどうやら共有らしい衣装箪笥からチア、メイド、バニー、日本の小学生――なんでそこまで知ってるんだというレベルで、今までアリアが変装等で着てきた歴代のコスチュームに着替えていく。

（――うッ……！）

俺は見てはならぬものを見ないよう、両腕で目を覆う。
だが一瞬見てしまった。ココたちのお揃いの、クルミを持ったリスのバックプリントがされたガキパンツを。ちなみにパンツはさすがにココたちも共有に抵抗があったらしく、猛・炮・狙・機とそれぞれの頭文字が書いてあったよ。
俺が亀みたいな姿勢になって、素数を数えていると――
「キーンチ」
お声がかかった。
しかもすごく近くから。
逃げるにも敵の位置が分からないと逃げられないので、恐る恐る顔を上げてみると……
ココたちは俺の前後左右、東西南北をしっかり取り囲んでしゃがんでる。逃げ場無しネ。
「キンチは男。ココたちは女ヨ」

「なのでココたち、女であることを使うネ」
「でも、これはココたちが初めてやる手ネ」
「なのでうまくできないかもしれないある」
ないのかあるのか。
ココたちのカタコト日本語に脳内でツッコむ、俺は……
「「「「嘿吆(ヘイヤオ)！」」」」
掛け声と共に、神輿(みこし)みたいに持ち上げられた。ココ4姉妹に。
そのまま運ばれて、御簾(みす)の向こうの巨大なベッドに放(ほう)り投げられてしまう。
さらにココたちは、理子(りこ)語で言うところのゲス顔で次々とベッドに上がってきた。
「……ッ……な、何をする気だッ……！」
それこそ理子的ゲームに出てくる女騎士がゲス集団に追い詰められた時みたいなセリフを言いながら、俺は上体を起こし、座った姿勢の

まま後ろに逃げる。

だが、ドンッ。すぐベッドの背もたれに背中がついてしまう。

チア、メイド、バニー、小学生のコスプレをしたココたちは絢爛(けんらん)なベッドの上を歩き、または這(は)って……ぺたん。ぺたんこ。次々と俺(おれ)に、くっついてきた。

「アリアごっこするネ」

そしてまた、予想のナナメ上をいく発言が飛(と)び出す。

「ア……アリアごっこ？」

さりげなく身動きを封じるように、チアのココとバニーのココが俺の左右の脚に跨(またが)ってきている。メイドと小学生のココたちは俺の両腕を抱き、肩の方から密着してきた。

「キンチ、アリアとなかなかうまくいってないネ」

「特に最近アリアとケンカしてて悲しいネ？」

「そこでココたちがアリアやってやるヨ」

「ココのアリアはキンチに優しいアリア、キンチの奴隷のアリアある……」

くすぐったいぐらい耳元の近くで囁きつつ……

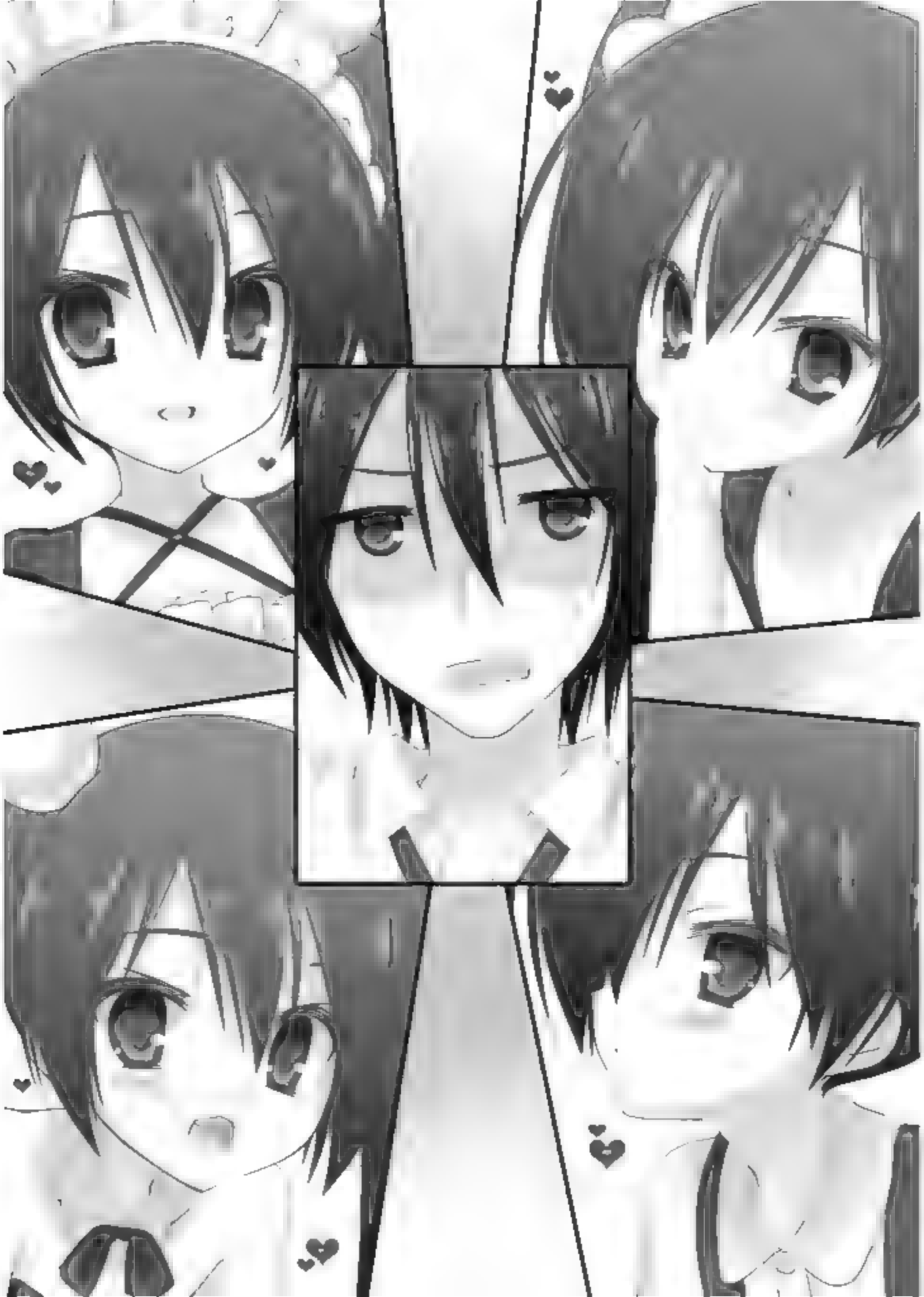
どれかのココが、室内を薄暗くしていく。

（……ッ……！）

元々、さっき見間違えるほどアリアっぽかったココたちが――

な、なんとなく……

本当に、アリアに見えてきた。



ココたちの誘惑で頭に血が上り、さっき飲んだ藍苺酒（ランメイチュウ）の酔いが回ってきてるんだ。

俺（おれ）は酒が後から効（き）いてくる、時間差タイプだったんだな。

「キンチ。いつもはゴメンね」

「でもホントは好きよ。分かってたよね？」

「だからキンチの言う事、何でも聞いてあげる」

「ううん……聞いてあげる、じゃないね。聞かせて……？」

……や、優（やさ）しいアリアとか……

信じられん。

いや、これは藍幇（ランパン）の酒とココたちが見せてきた幻。

幻だとは分かっている。だが幻でも、なんというか――いい、幻のような気が……

今、4人のアリアたちが、俺を切なげな目で見つめている。

「ねえ、あたしに何をしてほしい……かな？　キンチ」

「それとも、何かしたいことある……？」
「したい事、言ってみて。なんでもさせてあげるよ」
「順番に4人で、4回させてあげる」
アリアたちは、さわさわ。
俺の体のあちこちに触れ、くすぐるようにモミモミとマッサージし始めた。アリアたちの、8つの手が。
これが……とんでもなく上手だ。き、気持ちいい。全身から疲れが抜けていく。
身動きを取らせてもらえず、強制的にリラックスさせられた俺は——
まるで王様になったような気分に、させられてしまう。
普段と……まるで逆だ。
いつもは俺が奴隷でアリアが女王様だが、今は俺が王様でアリアが奴隷状態。

しかもそれが4人も俺に傅いている。

この夢の中にいるような心地よさには、抗いがたい。認めざるを得ない。かつて理子が新幹線で言っていた『藍幇城は酒池肉林』が、今、実現してしまっている事を。

「――ねえ、アリアって呼んで？」

メイドのアリアが俺の頬に頬ずりしてきながら、妙なプレイを要求してきて……

「ア、アリア」

つい答えちまったよ。

何やってんだ俺……！

だがそれはココたち的には待望の一言だったらしく、とても嬉しそうにキャッキャッと笑いながら俺の手足に抱きついてくる。

そこで俺とココ4姉妹との間に、何らかの合意が成立してしまったような感じだ。

向こうも言っていたが、俺は男でココたちは女。
それがこんな状態になってしまったら、もう後は転がる石のように――

……ドクンッ……！

俺の困った性――ヒステリアモードも、とうとう起動しつつある。
昔っから俺はなぜかアリアにはこのスイッチを簡単に押されてしまう癖があるのだが、それがニセアリアでもけっこういけるという事は理子が何度か化けたアリアで実証済みだ。
「キンチ、大好き」「キンチも好きって言って？」「キンチぃ」「キンチ……」
催眠術のように俺の名を呼び続けるアリアたちを、どうしても見てしまうと――
か、可愛い。このアリアも。細部はもちろん違うが、それを補う数がある。俺、複数人相手でもＯＫな人だったんだな。

「キンチ」「キンチ」「キンチ」「キンチ」「キンチ」
……ドクンッ……！
も、もうダメかもしれない。
「キンチ」「キンチ」「キンチ」「キンチ」「キンチ」「何やってるのよォ……
キンジぃ……！」
……ギリギリギリギリィ……！
ごっ、5人目のアリア……!?　が室内に響かせた歯ぎしりの音に、
俺の目玉が飛び出しそうになる。
「こっこっこんな幼いココたちに、あ、あ、あたしの黒歴史のカッコ
をさせてェ……！」
こ、この怒りに震えるアニメ声。
――ほ、本物のアリアだ……ッ！　クチナシっぽい恒例のいいニオ
イもするし！
がば！　と起き上がろうとした俺だがココたちに乗っかられている

のでそうもいかず。

「幼いとは何ネ！」

「ココたちはもう14ヨ！」

憤慨したココたちが立ち上がってくれたので、俺も慌てて立とう——としたら、なぜかいつの間にかベルトを外されていて、ずりっ、とちょっとズボンが落ちた。何故にッ!?

チャック全開の俺に、ドアの前にいたリアルアリアは怒りでツインテールをわさぁ……と広げつつ、

「ほぉう……」

戦国武将みたいなドスの効いた声で、赤紫色の瞳をギロリッと見開いた。

こ、こええェっ……！

常人ならここで気絶して無意識下へ逃げられるところだが、武偵高で鍛えられたせいで失神できない自分の中途半端な精神的タフさが憎

い！

のしい……

と、二丁拳銃を手に大股でベッドに上がってきたアリアの背景は、怒気みたいなモノでぐにゃあと歪んで見えている。

これにはさすがのココ姉妹も後ずさり、俺の背後に逃げてきて――4人分の体積による圧力で、俺を前に押し出してしまう。ど、奴隷どもが裏切りやがった！

のし、のし、とやってきたアリアは、俺の前に仁王立ち。

うわぁ……

「――うるァァ！」

アリアは美少女キャラが決して上げちゃいけないタイプの掛け声を上げて、ビシィィ！

3本束にした金属バットを3本とも『く』の字に曲げた実績のある殺人ローキックで、さっきまでココたちの柔らかいアンヨが乗っかっ

てた俺の膝を蹴ってきた！

どうやら酔いは醒めてるらしい。酔うのも醒めるのも早い体質なんだなアリアは。てか、こうなると泣き虫アリアのままでいて欲しかったぜ……！

「うおっ……！」

一撃でダウンした俺の後ろから、

「嘿ッ！」「呀ッ！」「哈ァ！」「――双蛇刎頸抱！」

次々にココ1～3がアリアにフェイントをかけ――最後の1人、猛妹と思われるココがアリアの首にツインテールを掛けた。

そして脚でアリアの胴体に組み付き、ぐいーっ！

絞めてる、首をッ！

よく見ると猛妹のツインテールは昔レキに狙撃で切られたとあって鬘というか付け毛。だが、張り具合から見て通常の髪よりしっかりした素材でできているようだ。

アリアに必殺の技を掛けたココの勝利で、俺生還かと思いきや……

「――ダブルスネーク・バイナウ！」

あるんだバリツにも同じ技！

アリアもピンクのツインテールをココの首に巻き付け、ぐぎぃー！

と腕と背筋（はいきん）の力で後ろに引っ張って首を絞めてるぞ。

えっと、アリアが負けたらそれはそれで困るが、ココが負けたら俺がアリアに殺される。

この場合どっちを応援すればいいんだ俺っ。

非常に見苦しい首絞め合戦を前に、残り3人のココは拳（こぶし）を振り回して猛妹を「加油（ジャーヨー）！」「殺（シャ）ー！」などと応援してる。なので俺は「アリアがんばれぇ……」と後々の事を考えて無難な方を応援しておいた。

アリアは「Bloody hell（ブラディ・ヘル）！」と叫んでムエタイのような膝蹴り上げで猛妹のオシリを強打。

猛妹の脚によるロックが外れるやいなや、髪で首をロックしたまま

首投げというどんな格闘技の教則本にも載ってない投げ技を放った。

べちい！　と壁にぶつかった猛妹がベッドに落ちてくると、馬乗りになってからの鉄槌という俺によくやる処刑コースをアリアは中国初公開。

そして猛妹を撃沈してからの、

「このドスケベ！　ツリーも用意しないで、なんでやるに事欠いてココにあたしのカッコさせてたのよ！　なんでなの！　理由をキッチリ詳細に説明しなさいこのエロキンジ！」

今度は俺にのし掛かってきての、鉄槌地獄っ……！　さっき応援したのに！

だが俺も俺でこれはやられ慣れてるので、下からアリアをリストコントロールしようと決死の抵抗を試みる。すぐには潰されんぞッ。

とか死に物狂いで藻掻いてたら、

「ヒューヒュー！　いいねー！」

いつの間にか理子がケータイを手に、ベッド上に湧いてるし。

た、助けろよッ！　撮影してないで！

「旅行先では、たーんと記念撮影しないとね！　これはいい思い出ムービーになるよー!?　アリアちゃん動画、『愛情の裏返しでツンツンしてみた』！　ホントはキーくんがアリアごっこでコーフンしてるの見て、嬉しかったくせにぃー！」

「なっなっ……！　理子！　あんたも人をツンデレみたいに言うんじゃないわよ！」

「……え、自覚無いの……!?」

マジ引き顔をする理子に頭突きをしつつ、アリアは俺を攻める手も休めない。

ていうかOZONEでの大ゲンカ以降、アリアは俺に対してキレるまでのウェイトが超短い。虐待は（悲しい事に）いつもの事だが――

――怒ってるんだな、まだ……俺が香港島で迷子になって、心配さ

せた事。

その後、俺は「あっ、ももまんUFOが窓の外に！」と低次元なブラフ。だがしっかりアリアは引っかかってくれて、俺は鉄槌地獄から脱出できた。

で、ダッシュで1階の大広間まで走り、そこにあった大甕に飛び込んで——

中に隠れてアリアの追撃から逃れ、そのまま寝ることにした。

そして翌日、クリスマス・イブの朝を甕の中で迎える。

（梅干しになった気分だぜ……）

などと心にボヤキながら甕を出たが、案外居心地良かったな。甕の中。背中に挿してるスクラマ・サクスがイイ感じで背もたれになってくれたし。我が家にも1つぐらい置いておこうか。防弾甕。

で、階段を上がって貴賓室に入ろうかとも思ったが……

ちょっと扉を開けて中を伺うと、まだ早朝なせいもあり白雪もレキもまだ寝てる。

藍苺酒をしこたま呑んでた白雪は……二日酔いで魘されてる感じだな。まあ自業自得か。

レキは呑んだのが適量だったせいか、天使みたいな寝顔だ。お前寝顔の方が表情あるな。

巨大ベッドにはアリア様が陣取って、ナイトキャップまでして気分良さそうに寝てるよ。一発撃ったろか。

ベッドのシーツや毛布は部分的に、少し乱れている。理子が寝てたんだな。だが理子の姿は無い。もう遊びにでも行ったのか。元気なヤツだなー。

「……」

俺はクルーザーから見えていた上の階のオープンカフェでコーヒーでも飲もうと、昨日見た黄金の階段を上り……

3階の、だだっ広いカフェテリアに入った。
そこは南国のリゾートみたいな造りになっていて、バー・カウンターには色とりどりの洋酒のビンが並んでいた。ビリヤード台やピアノもある。
早朝なせいか、見張りもいない。
俺の目当てのコーヒーメーカーもあったな。スイスのジュラ社の、全自動のやつだ。
（ここは……欧米の客が来た時に、もてなす場所なんだろうな）
エスプレッソを淹れてホールを渡り、オープンテラスに出ると……
「……」
そこにはリクライニングした木のデッキチェアに掛け、明け方の海と空を眺める――
――いつもの改造制服姿の、理子がいた。
俺と同じコーヒーカップを持ち、少しアンニュイな目で水平線を眺

めている。

物静かにしてる理子は、普段の子供っぽさがなくて……

見慣れたハズの俺も一瞬目を奪われるような、すごく大人びた表情をしていた。

こいつは……二十歳ぐらいになったら、傾国の美女になるな。母親も絶世の美女だったらしいし。

今でも十分可愛いが、成長したらどんな男でも虜にする魔性の女になるタイプだ。

そんな、アリアや白雪、レキとはまた違った独特のムードを漂わせる理子を――

「おはよう理子。珍しく早いな」

もっと眺めていたい気もしたが、俺には個人的な体質上の理由もある。

あまりその魔力に囚われないうちにと、声をかけて自ら現実に戻っ

ておいた。

「理子、旅行中の早起きって好きなの」

にこっ、と振り返った理子の、ツーサイドアップのテールが揺れる。

旅行中の早起きか。その感覚は分からなくもない。センスいいな、理子は。

「おはようキーくん。藍幇城(ランパンじょう)はどう？　キラキラで超いいとこでしょー？」

上体を背もたれから起こしてこっちに寄せてきた理子は、普段のガキっぽい顔に戻っている。

今まで気づかなかったが、これは理子なりのネコかぶりなのかもな。人前での。

「今までけっこうドンパチやったから、藍幇(ランパン)は俺(おれ)たちに好印象(こういんしょう)を持たせようとしてるんだろうけどな……派手(はで)すぎて、下品に見えるぜ」

俺は理子(りこ)の隣のデッキチェアに掛け、濃いコーヒーを傾(かたむ)ける。

「えー。理子はここ大好きだけど。むしろ藍幇城（ランパンジョウ）で反感情（ハンカンジョウ）を強めてますなぁ」

「ダジャレは犯罪だぞ？」

「えー、こないだアリアが作ったダジャレなんか『白雪（しらゆき）がしくじった』だよ！？　『し』しか合ってないんだよ!?」

「……そのアリアだが。藍幇へのオチっぷりはどうなんだ。あんなんでもバスカービルの副リーダーだぞ。ももまんだけで全落ちはしないと思うが、不安だぜ」

敵対組織に歓待（かんたい）を受けた際は、仲間の心情のバランスを把握（はあく）しておくこともリーダーの務（つと）めだ。

特にどの程度、心理的に敵（てき）の手中（しゅちゅう）に落ちたか。これは重要と習った。

どうせ本人に聞いても『あたしは落ちてなんかないわ』と言うに決まってるから正確な把握は難しいのだが、『全落ち』『半落ち』『ゼロ落ち』ぐらいは大ざっぱにでも認識しておく必要がある。

特に主要メンバーが敵に対して友好的になりすぎると、交渉で不利になるものだからな。理子はともかく、俺とアリアの間で意見が割れるとマズい。俺の迷子事件からこっち――向こうは俺に怒ってるワケだし、最悪、仲間割れのリスクすらあるのだ。

なので、アリアの様子を内偵してみると……

「アリアはチョー喜んでたよー？　大乳膏もらって」

「何をもらってたって？」

「胸の大きさが2倍になるっていう、漢方薬入り豊胸クリームだよ」

「……」

藍幇も藍幇でよく分かってるなー。いかにもアリアが目の色変えて喜びそうなアイテムじゃねーか。こりゃもうダメかも分からんね。バスカービル。

ていうか、なんだよそのうさんくさいクリーム。

そんな都合のいいもんが、あるワケねーだろ。しかも喜んでたって

ことは、それ塗って2倍になったとしても人並み以下だってことに気づいてないな。アリア。

「アリアで思い出したけど」

きしっ、とデッキチェアを鳴らして、理子がフリフリスカートの下の足を組む。

「昨日はちょっと胸が痛んだなあ、理子りん。理子がアリアに変装した時も、キーくんはああだったしねぇ」

「何の話だよ」

「キーくん、ココ版アリアたちにマジで全オチしかけてたよね？　アリアってやっぱり、キーくんにとって特別なんだなーって思わされましたよっ。はっはっは」

ぺしぺしぺし、と俺の肩を叩いてくる理子には……

ちょっと身に覚えがありません、って顔をしとくか。

「あれは……酒も入っててての事だ。あまり大ごとに取らないでくれ」

ヒステリアモードではない俺は、こういう話が苦手なので――けっこうマジで弱り顔をしてしまったらしい。

それを見た理子は、ニヤーっと笑って『おうおう少年。カワイイのう』的な目だ。

なんだよその上から目線。こういう時の女子はホント、腹立つな。

「好き、って不思議だね」

「何の話だ」

「好きって思うと、幸せなのか不幸なのか、よくわからない気分になるよ」

「よく分からん」

「さすがキーくん、ムリゲーキャラだ！　でも理子、ムリゲーのが燃えるんだよねー！」

たっはー！　と理子は空を仰いで高笑い。

なんなのもう。ほんと。

「ところでイブだねー」

急に話を変えてきたなぁ……

まあ、それはいつもの事だからどうとも思わんが。

「朝だと、あんまりそういう感じもしないけどな」

「日本にいる女子にも、メリクリメールは早めに送っておいた方がいいよー？　忘れたら拗ねられちゃうかも。理子が昔育ててた戦妹なんか、イブが誕生日でさぁ――あーそうだキーくん！　本人たちから個別に聞きましたよぉ～？　アリアとゆきちゃんのお誕生日をお祝いしたんだって～？　すんごい祝い方で！」

また話題が変わった。クリスマスから誕生日ネタに。俺一言しか喋ってないのに。

しかし、確かに誕生日は祝ったが……すんごい祝い方？　何のことだ？

アリアには露店で買った指輪を、白雪には花をあげただけだ。どっ

ちにも『俺を気軽に撃つな』『ボディーガードになれ』とそれぞれ条件つきで。

なので俺が、

「凄かったか……？」

と首を傾げると、

「おうふ……」

理子はそんな俺にマジ引きしたような声を、ノドの奥から上げた。

はて、何がそんなに凄かったんだろう。

「いやーさすがキーくん。生粋のジゴロですなあ。あー、理子も楽しみだなぁー。でもぉ……理子の誕生日知らないでしょ？」

チラッ。

理子は俺の方を横目で盗み見つつ、試すような言い方をしてきたので——

「いや、覚えてる」

ある種の売り言葉に買い言葉で、俺はそう答えた。

「え」

すると理子は、また素で驚いたような顔をする。

実際、俺は理子の誕生日を知っている。こないだジャンヌが探偵科（インケスタ）に遊びに来たときに喋（しゃべ）ってたからな。やたら覚えやすい日だったから、覚えてるんだ。

理子め。自分も何か欲しいんだな？

まあいい。知ってると答えちまったからには、当日に何かあげよう。

クレーンゲームのヌイグルミとかな。

「……」

俺が黙っていると、

「……あ、え、えっと」

理子はわたわたして、理子にもあったらしい赤面（せきめん）回路をＯＮにした。

そして「あはあはあは、暑くなってきちゃった」とヒラヒラのスカー

トを手でバサバサやってる。
それで理子から、甘いバニラみたいな理子スメルがしてきて……
割とそのニオイが嫌いじゃない俺は俺で、ちょっと赤くなってしまう。ていうかなんでスカートで下半身を煽ぐよ。ふとももがしっかり見えちまったじゃねーか。
恥ずかしくて少し目を逸らした俺に理子は、
「キ、キーくんのエッチ！　クンクンナー！」
ワケの分からんセリフと共に、満面の笑顔で抱きついてきた。
な、なんで批判しながら抱きついてくるよ。
ほんと分からん女だな。
だが、理子にはどうやら抱きつくまでの流れに意図があったらしい。
自然に口を近づけた俺の耳に――
「――猴は水面下の階。感覚的には地下階だ。今は孫じゃなく、猴になってる」

裏理子の声で、囁いてきた。

……調べて、いたのか。

藍幇城に着いてからというもの、一番ノリノリで遊んでると見せかけて――情報怪盗の理子は、城内を探ってもいたのだ。

それもいま最も重要な、敵の戦士の所在と状態を把握してきている。

「使えそうな協力者もいた。お前の女好きもたまには役に立つもんだね、キンジ。まあ、そいつはあたしがうまく動かすよ。そもそも交渉なんか、あるかどうか五分五分さ。戦るとなったら、号令はあたしがいる時に――お前が下しな」

こっちはこっちで言いようのない凄味と魅力のある、裏人格の方の理子を見て……

少々の反省の念と共に、俺は小さく頷く。

敵が交戦ムードじゃないので交渉はあるものだと思い込んでたが、それも確かに疑ってしかるべきだ。しかもただ漠然と歩き回って偵察

していた俺とは違い、理子はスパイまで作ってたみたいだし……お手柄だな。

しかし、その協力者ってのは誰だ？

と聞こうとした辺りで、

「おっと、お邪魔でしたか？」

ノホホンとした声が、階段の方から聞こえてきた。

デッキチェアの上で理子に抱きつかれている俺に、丸メガネの下の糸目をニコニコと向けてきたのは……諸葛。

藍幇の重鎮、諸葛静幻だ。

「あーもー。せーっかく2人っきりだったのになぁー。ぷんぷんがおーだ」

すでに表理子のおバカな膨れっ面になっていた理子が、指でツノを作って諸葛を叱る。

対藍幇の密談をしてたところで急に諸葛が現れたから、俺は少しテ

ンパった表情をしてしまったが――

理子はそれも利用して、いかにもこれが男女の逢い引きだったように演出してくれた。

「陰と陽で、なかなかお似合いの2人に見えますよ。遠山さんの周囲にいる女性たちとの組み合わせをそれぞれ考えてみましたが、うん。ベスト・カップルでしょう」

体よく理子のご機嫌取りをしながら、諸葛はバー・カウンターにつく。そして俺たちがコーヒーを飲んでいたのを見て「おかわりをお持ちします」と微笑んでくる。

まったく、相変わらず調子のいいヤツだな。

敵は敵なんだが、緊張感を持ちにくいよ。

ていうか今の陰陽、陰＝俺って事か？　またサラッと失礼な事を言いやがって。

「中国といえばお茶というイメージかと思いますが、最近はコーヒー

も流行りでしてね。日本のお二方には甘すぎると感じられるかもしれませんが……甘党の私も含め、中国人は甘いコーヒーが好きなんです」

諸葛は慣れた手つきでエプロンを文官服に重ね――冷蔵庫からバウヒニアの花を象ったケーキを出して、パティシエっぽい手つきで皿に盛りつけ始めた。俺たちの分と、自分の分も。同時に淹れてるコーヒーも3人分だ。寝起きはみんなで血糖値上げましょう、ってことか。

（しかし……諸葛……）

探偵科の習慣でチェックしてしまったが、ひ弱そうな体つきをしてるな。男らしくないというか、ヒゲも全くない。俺も薄い方だけど。

諜報科のチャン・ウー先生みたいなオネエ系ってんじゃないが、男らしくはないヤツだ。声も高めだし。

朝からしっかり髪型も整え、服の留め紐も昨日と少し変えてオシャレしてきてるしな。ファッションを楽しんでる感じだよ。

家事が好きなのか、楽しそうに給仕役を買って出た今の諸葛は……

なんとなく、戦いの場に出てきた時よりも『本当の諸葛』っていう感じがする。

元々が温厚な性格なんだろうな。

「ココたちの事は可愛がってやってください。遠山さんは男性としてもしっかりしてそうです。4人まとめても相手ができるでしょう」

お盆に載せたケーキとコーヒーを俺たちの所に運んできて、諸葛はニコニコして自分も近くのデッキチェアに座った。

俺は歓声を上げてケーキをパクつき始めた理子に溜息をつきながら、

「何の相手をさせるつもりだよ。俺は昨日のあれを接待とは感じなかったからな？」

まあ固辞するのも何なので、自分もそのフルーツで出来たケーキ細工をもらう。

「どうぞ、側室にしてやってください。あなたの下でなら、良い臣下にもなれるでしょう。さもなくば将来、あの子たちは上海藍幇の影響

で悪徒になる怖れがある」

「側室……っていうか、将来って。俺はこんな所に長居するつもりはないぞ」

「良禽は木を撰んで棲み、賢臣は主を撰んで事う。あなたなら香港藍幇を次世代に導く、新しいタイプのリーダーにもなれるでしょう」

「ココと同じような事を言うなよ。俺には藍幇は合わん。第一、金持ちじゃないしな」

「相性や金銭で決まるのは、中間管理職の地位までです。トップは才干、普段はどうあれイザという時に人を導き、纏め、敵をも味方に変えてしまう力――いわゆるカリスマ性を重視するのが、古からの知恵ですよ。共産党だってそうですし」

ったく……

「どこも人材不足なのは分かるが、昼行灯の俺なんかを神輿に担ごうとするな。だいたい俺に人を導くだの敵を味方に変えるだの、そういい

う器量は無いんだよ」

「そちらの峰理子さん、それとジャンヌさん、ワトソンさん、ヒルダさん、ジーサード・ジーフォース兄妹――」

指をおりおり、諸葛は俺の旧敵……今は仲間となっているメンツを挙げる。

よく調べてあるなぁ。

とはいえそれも、ジャンヌみたいに司法取引で同級生になってたり、理子についてきたヒルダみたいに……俺の力で仲間になった面々とは言い難いのもいる。買いかぶりだ。

「あなたには、多様な人格、多様な思想、すなわち多様な集団を一纏めにする力がある。極東戦役（FEW）では藍幇（ランパン）とバスカービルは対立していますが、将来は一つになれるかもしれない。そこではレキさんのウルスも藍幇と一つになれる。あらゆる集団が一つの奔流になれば、世界中の結社・機関・組織――そのどれとどれもが争う必要もない、恒久の

平和が訪れることでしょう。キンジさんは、その起点になれる御方なんですよ」

「中華思想ってヤツだねェ。あたしには夢物語に聞こえるよ」

諸葛の話に、理子がシラケた感じで鼻を鳴らす。

「夢は大切ですよ？　私たち諸葛の一族は代々『誰の作った、どんな世界を見たいか』で動きを決めてきました。遠山さん、私はあなたの作った世界を見てみたい――と、思ったまでです」

つまり……

世界各地で超常の力を誇る、アンダーグラウンドで秘密主義的な個人・集団――藍幇、ウルス、バチカン、リバティー・メイソン、ジーサード一味、吸血鬼一族などなど――を多少強引にでも全部集めて、纏め上げてしまう。そうすれば天下太平。人類みな兄弟って寸法か。

悪い考え方じゃない。悪い事じゃあ、ないんだが……

やっぱりそれは非現実的だ。少なくとも俺が生きてる間には実現し

ないだろう。個人的には、乗ってあげられそうもないな。

だがこの諸葛という男は、個人という小さなスケールで物を考えてはいないんだろう。

その話が、それはそれは長久な課題だって事が分からない人物には見えないしな。

今の話はつまり、理念の話。

それは今日明日の話ではなく、もっと遠い未来に据えた大目標。自分が生きている間に実現しなくても構わない。それでも自分は、その理想に向けて今を生きる。

そういう……

大きな男なんだな。コイツは。

どうりで個人レベルでは敵味方の感覚が薄いと思ったぜ。

目先の金や戦闘のことしか考えてないココや俺とは違って、物の見方が壮大だ。それも極東戦役でドンパチやってる最中に、そんな事を

考えてたとはな。只者じゃないよ。

「あ」

そこで急に、諸葛が何かを思い出した顔をした。

そして文官服の袂から、小さな螺鈿の宝石箱を出してくる。

「そうそう、アリアさんの殻金はこちらです」

……！

何でもないもののように差し出された小箱を、俺が開けると……

中には赤い絹布にくるまれた、見覚えのある緋色の宝石が入っていた。

これはアリアの心臓付近に撃ち込まれた緋弾――その悪影響を抑えるために被せられていた、カバーみたいなもの。それが結晶化した宝石だ。

本来7つないと機能しないのだが、今は3つしかない。

その4つめが今、この箱の中にある。

この殻金の出現には理子も驚いて、一緒に小箱をのぞき込んでくる。

「……本物か？」

理子がそう言うと、諸葛はニコニコ顔のまま頷いてる。

ウソじゃ……なさそうだな。

「なんで今くれるんだ」

眉を寄せた俺に、

「いやぁそれが、忘れてまして。あっそういえばと思って、昨日探してきました」

笑顔のまま諸葛がそんなことを言うものだから、俺はデッキチェアからズリ落ちそうになってしまう。理子はズリ落ちちゃったよ。

「――香港と上海で、それぞれ分析させていただきました。とても勉強になりましたよ」

「これを上手く使って、交渉を有利に進めようとは思わなかったのか？」

「今そうしたつもりですよ。この殻金はもう結晶化してますからね。

これをアリアさんの緋弾に戻すには、相応の手配が必要になるでしょう。それは、ここからあなた方が生きて帰るという事に他ならず……すなわち私たちと講和ないし決着した後に限られるのです。どうです？一刻も早く藍幇との争いを手打ちにして、帰りたくなってきたでしょう？」

チクショー頭いいなコイツ。

その通りだぜ。俺は痩せても枯れてもアリアの相棒だからな。あいつの事となると頭に血が上るというか、一刻も早く何とかしてやりたいと思ってしまうんだ。スられた携帯を泥棒市で買い戻してもらった、新鮮な借りもあるしな。

「よし、もらうぞ。もう返さないからな。しかし……ずいぶん甘いな、お前」

「講和するべき相手ですからね、臥龍は。それに私たちは忙しいんですよ」

「忙しい？」

「香港藍幇にとって、極東戦役（FEW）は多くの抗争の中の1つに過ぎません。他にも対処すべき事案はいっぱいあるんです。それに今のところは固辞していますが、戦役の騒ぎが大きくなれば中国全土から何人でも将兵が来てしまう。そうなれば彼らに支払う報酬は計り知れない。つまり、講和が良策なのです」

あまり隠すつもりもないのか、自分たちの内情を話した諸葛に――

「昔の諸葛と、ずいぶん変わったな」

ケーキを平らげた理子が、少し疑り深い裏理子のムードを交えてツッコむ。

「――よしましょう。過去の話は。あなたも好まないでしょう」

返す諸葛の声も、少し固い。

朝日に光るメガネの奥で、その細い目が少しシリアスになっている。

「……？」

俺が首を傾げると、理子は少し諸葛に落ち気味だった俺を諫めるような顔を向けてきた。

「諸葛は昔、もっとムキムキの荒くれ者だったんだよ。人材の取り合いでシャーロックと戦った事もある。それも互角だった」

……シャーロック・ホームズと……？

あれと互角に闘ったっていうのか。この痩せっぽちの諸葛が。

シャーロックは……なんだかんだで俺が一番スレスレで勝てた、最強の難敵だ。

しかも捕り逃がしてる。『犯罪者の取り締まり』という武偵の任務から考えれば、実質負けたも同然の相手だ。それと互角だったのか。

目を丸くした俺に諸葛は、

「いえ、互角だなんて。私は敗れたのです」

手を振って、否定の仕草をするが……

「ノン、あたしは見た。あの戦い、最後はシャーロックが――」

「いえ、あのまま戦っていれば、私が負けていたハズです」
「――戦うのをやめたんだよ。『諸葛君。残りの命を大事にしたまえ』って言ってな」
「……」
諸葛はニコニコしたまま、黙って……昔を思い出すような顔をしている。
「……やっぱり……病気なのか、お前」
俺がそう言うと、
「中医学――東洋医学でも、抑えきれないものはあるのです」
否定しない。
そう……なのか。
最初から、それこそ鏡高組（かがたかぐみ）の屋上で見た時から、コイツは体に何か病を抱えていそうだとは思っていた。
たぶんそれも、もう治らない病気。いま自分でそう言ってたしな。

探偵科で教わった習慣もあり、俺は……重要人物に会う時は、できるだけ特徴を覚えるように努めている。太っている、痩せている、という縦横比みたいなものも。

その横幅が、諸葛はかつて空き地島の宣戦会議で見た時から急激に減っていたのだ。

それも、異常なペースで。

元が太っていれば、人は痩せようとして痩せることもある。だが諸葛は初見から細身。減量するスポーツ選手でもないし、役作りのために体型を変える俳優でもない。

――ココたちは、上海藍幇が1～2年の内に香港に進出してくるような事を言っていた。

それも、諸葛の病を知っての事かもしれない。

（言葉も……出ないな）

ただ、ただ、惜しいとしか思えない。

何であれ、こういう大きな夢のあるヤツこそ長生きさせてやりたいのに。

「そんな顔をなさらないで下さい。一個人の生死など、此(ヤ)しょう少なものです。島国の少年――もっと広大な世界、悠久(ゆうきゅう)の未来に目を向けてください。その視野が広がれば、自(おの)ずから、ご自分の進むべき道も見えてくるものですよ」

笑顔で観念的な事を言ってから、諸葛は――

「私は香港藍幇が好きなのです。この藍幇を、未来に継ぎたい。極東FFW戦役は、争いとは、敵(てき)味方の中に優秀な将……後継者(こうけいしゃ)を見定めるためのものでもあります。今は、遠山(とおやま)さんが第1希望なのですけどね」

――自らなってはくれないのでしょう。それは、分かりました。

というその後の言葉を飲むように、細い目を香港島の方へと逸(そ)らした。

「私が香港にこういう長閉(のどか)な藍幇を保(たも)てるのも、あと1、2年といっ

たところでしょう。上海藍幇は中国の経済成長の波に乗って、どんどん力をつけている。中国本土と香港の、思想の違い――『中港矛盾』というものは、藍幇にもありましてね。香港藍幇は古藍幇、リバティー・メイソンと同じような互助組織なのですが――新藍幇、上海藍幇は、日本でいうところのヤクザとしての色合いが濃い。學好千日不足學壞一時有余。乗っ取られれば香港藍幇も凶悪化することは、火を見るより明らかなのです」

悲観的な未来を先読みして語る、諸葛に……

俺は、それでも力になってやれない。

残念ながら――その藍幇の運命は、もう変えられないのかもしれない。諸葛は俺が頭になれば変えられると期待してくれたのかもしれないが、済まない。俺は、武偵。無法者のリーダーにはなれないんだ。

だが、それはそれと……

この男、一つ気にくわない点がある。

だからそこは、指摘しておこう。

「頭が良すぎるのも考えモノだな」

俺はそう切り出し――

少し黙って、諸葛にこっちを向かせた。

「……先が読めるのは、いい事だろうよ。だが、この世に『絶対こうなる』なんて読みはありえない。あのシャーロックだって、推理をミスった事があるくらいなんだぞ」

2人の共通の好敵手だった男の話に、諸葛は少し「へえ」という顔をしてくれる。

「本当ですか。何を推理し損ねたのですか、彼ほどの男が」

「俺のことだ」

「ああ！　なるほど！」

「納得しすぎだぞコラ。と、ともかく俺が言いたいのは……お前、すぐあれこれ諦めるな。猴も言ってたけど、すぐ諦めるのは中国の悪い

文化だぞ。往生際がいいといえばいいんだろうけどな。それでも、だ。お前は武偵じゃないし、これは俺たち武偵の言葉だが――」

俺は強襲科で訓示を垂れる蘭豹みたいに、諸葛の眼をしっかり見る。

「――武偵憲章10条。諦めるな。武偵は決して、諦めるな。諸葛、見える未来に納得がいかないなら、抗えよ。俺も抗って、ここまで生き延びてきたんだ。往生際悪く、な」

諸葛は、いつの間にか……

その糸目を、少し見開いて俺を見ていた。

そして、にこっ。相変わらずのニコニコ顔に戻って、デッキチェアから立ち上がる。

「うーん。好きですよ遠山さんの――日本人の、そういうところ」

トコトコと、テラスを去っていく諸葛は……

「……楽しかったです。噂の『不可能を可能にする男』とお話しできて。お礼と言っては何ですが、今日も藍幇城にご滞在下さい。そちら

でも事前に考える時間が必要でしょうし。そして明日の晩にでも、皆で和平交渉のテーブルにつきましょう。そこで、『決闘』――遠山さんほどの器の人物を殺めるような結論が出ない事を、祈りますよ」

「殺める？　――俺が孫に負けると思ってるのか？　強気だな」

「ええ、強気ですよ。ですから交渉でも、心してかかってきて下さい。先ほど、あなたは『この世に絶対の読みは存在しない』と仰った。ですがこの件については、私は絶対視をしているのです。孫なら絶対に、あなたを討てる。古今東西、如意棒に勝った者はおらず、今後もいない」

「……」

これは……

交渉は交渉で、難儀な道だったかもしれないな。

いま諸葛も仄めかしたが、あの必殺のレーザーを持つ孫とは……俺も正直、戦いたくはない。

交戦を避けるためには、向こうが出してくる条件を幾つか呑まざるを得なくなるだろう。

その条件には、おそらく――

俺の藍幇入りが含まれている。

そうなれば……バスカービルが眷属に鞍替えする、或いは師団と眷属に分裂してしまうリスクもあるぞ。今のうちに、交渉対策を考えておかないとだな。

考え事をするときは、釣りをしながらがいい。

と、むかし爺ちゃんが言ってたので……

俺は藍幇城の1階、桟橋みたいな所で釣りをしながら交渉対策を練る事にした。

お団子頭のメイドさんにジェスチャーで『釣りがしたいんだが』と伝えると、香港では竿を使わないらしく、プラスチックの糸巻きにテ

グスがついたものを渡された。
スクラマ・サクスを竿にしてみようかとも思ったがそれも面倒だったので、俺は糸巻きを手に――桜エビみたいなエサをつけたカブラ針を海に投げ、座る。
世間ではリア充たちがパーティーの準備をしてるであろうクリスマス・イブの午前中に、俺はヘンな糸巻き持って、釣り。
……まあいいか。笑わば笑え。
話によればアイゴが釣れるらしいぞ。それも毒のないやつが。
（交渉決裂で戦闘になれば、向こうにも被害が出る。リーダーの諸葛は穏健派だろうから、あまりムチャな話は……たとえば『無条件降伏せよ』とかは言い出さないだろう。じゃあ、こっちは何を条件にするか……？　殻金は、もうもらったし……）
ヒステリアモードでも何でもない俺が、海を眺めながら考えるものの……

ヘタの考え休むに似たり。
名案は出てこない。
戦略Ⅰの授業、もっとマジメに出とくんだったぜ。
爆釣と噂のアイゴも釣れないし。俺、ヘタなんだよな。釣り。
「――あんたヘタね。釣り」
見ての通りを言われて、振り返ると……
ちょっと中国風にアレンジされたメイド服を着た、見覚えのある少女がいた。
それは三つ編みにした変則ツインテールの、
「……ユアン！」
北角で路頭に迷っていた俺を助けてくれた、院美詩だ。
「藍幇城に来てたのか。驚いたよ」
「まさか、あんたが噂の男だったとはね。有軌電車で係様と戦うのを見て、ビックリして藍幇の上に報告したら……根掘り葉掘り聞かれて、

参ったわよ。『一晩一緒に寝た』って言ったらさ、言い方がマズかったみたいでさ。ヘンな誤解されちゃってさ。あんた付きのホステスやれって、ここに来させられたの」

よく分からんが赤くなったユアンは、俺の隣にしゃがみ……

「来て」

ちょっと背後を気にしながら、小声で言ってきた。

「……？」

ユアンの後ろ、屋内の窓際には――ツンツンした感じの二十代の女性が立っている。

彼女もメイド服を着ているが、ユアンのものより少し立派な体裁だ。

「女傭長様が、『猴様が遠山に会いたいと仰ってる』って言うから」

まだちょっと事態を把握しきれてない表情で、ユアンはそう耳打ちしてくる。

猴が……？

交渉前に猴と接触できるのか。

だとすればかなり有利になるぞ。猴はどちらかといえば俺に友好的だしな。金糸全蛋麺、プレゼントしといて良かったぜ。

うまくすれば、孫の弱点とかも聞けるかもだ。たとえばシッポ掴めば弱くなるとか。

願ってもない話だが――

「いいのか、藍幇的にそれ」

「いいわけないでしょ。あたしだって、大体の事情は聞いたわよ。でも女傭長様の位階はあたしより5段も、猴様の位階はあたしより11段も高いの。逆らえると思う？」

俺が先輩や先生に睨まれてる時みたいに、ユアンはツリ目を弱らせた。

……俺は窓の中の女を目で示し、

「あれがメイド長だな。あの女は日本語が分かるか」

「日本語は通じないよ」
「俺たちは日本語で喋るぞ。ここじゃ俺も、まだ微妙な立ち位置だからな」
そう言って、2人でメイド長さんの所へ移動した。
メイド長は一言も喋らず先導してくれて、門番みたいなメイドにはユアンが事情を話し、地下へ続く階段の扉が開かれていく。
階段と廊下には幾つも扉があり、それを一つ一つ通過していく間―

俺は一応、
「……騙すつもりはなかった。北角で俺たちが出会ったのは、偶然なんだ」
隣を歩いてくるユアンに、謝っておく。
「分かってるよ。そういうタイプじゃないもん、あんた」
ユアンも日本語で答えてきて、ニッコリ笑ってくれる。

いい子……だな。いかにも義理と人情の下町育ち、って感じだよ。

「猴様はアンタに対する追撃が酷かったから、休息も兼ねてここに幽閉されてるんだよ。ココ様たちの罪をみんな被る形でね」

ユアンはついでに、小声でそう説明してくれるが……

なんか、藍幇内での処遇がそうなったのも分からなくもないなあ。ココたちは言い訳をしたり人に罪を被せるのが上手そうだし、猴はその正反対って感じだし。

イジメられてるんだな、猴。あれだけ強い戦士なのに。

北角でも、使いっ走りさせられてたしな。

（なんかホントに、バスカービル内での俺を見てるみたいだなぁ。同情するぜ）

ちょっと溜息をつきながら到着した、中国風の座敷牢は……あれ？

思ったより環境がいいぞ。

ちゃんと置き行灯もあって、桃の載った皿もある。猴の趣味なのか、

パズルの本もだ。
同情するのは中断する。
防弾物置や甕の中が住処の俺が、俺だけが、本当にかわいそうな戦上なのである。
こっちに背とシッポを向け、キンキラの畳に寝そべって数独をやってた猴に――
「猴様。遠山様をお連れしました」
ユアンが声をかけると、
「あゃ！」
それまでシッポを『？』形に立ててたせいでマイクロミニスカートが大変な事になっていた猴が、慌てた様子で飛び起きる。
そして空中で正座の姿勢になって、ぽん。
そのまま畳に着地した。白雪がたまにやる一発芸と似てるね。
「あー……そもそもお前、なんで名古屋武偵女子高の制服なんか着て

んだよ」

短いスカートの苦手な俺がクレーム気味に言うと、

「こ、これは……日本でココが遠山にご迷惑をおかけした時、狙姐（シュシュ）が名古屋武偵女子高（なごやぶていじょしこう）を拠点（きょてん）にして諸々（もろもろ）の準備を進めてたのです。そこで入手したこの制服を狙姐が猴に着せたら、ココたちがヘンに気に入って……」

そうだったのか。

まあ、たしかに似合ってるけどな。目のやり場に困るんだよなぁ。個人的には。

猴のスカート周りを見てると、なんかユアンが横から厳しい目つきで俺を見てくるし。

「……私も、こういう肌を出す服装、恥ずかしいですが……」

「まあいい。今のはお前が猴か孫（ソン）か一応確認をするために、ちょっと喋（しゃべ）らせてみただけだ。どうやら確かに、猴らしいな」

「あい……」

「昨日、孫は俺と戦わされた。その後、お前の調子はどうだ。見たところ元気そうだが」

「そうでもないです。孫として過ごすは、心身に疲れが溜まるです。長時間それをやって猴に戻った直後は、ふらふらするです。もちろんもう普通に戦えますが、あと1日半ほど休めば完璧になるかと。なので……それまで猴はここで待機させられてるです」

……なるほど。それで諸葛は明日の夜に和平交渉をすると言ってきたんだな。

とはいえ、暴走の怖れがある孫を交渉に同席させることはしないだろう。

出してくるのは、猴だな。孫はあくまで、交渉決裂時のための向こうの奥の手――

「遠山たちと孫の戦いのこと、ココたちから聞いたです。遠山たちが

戦ったのに殺されず済んだは、孫が遊びに徹したからでしょう。ですが孫は、負けず嫌い。次は遊ばず、すぐ討ち取りにいく。そういう性格の女です」

ションボリと視線を下げた猴も、孫が俺を殺す事を確実視してるようだ。

「……再戦の可能性はある。そうならない事を祈るがな」

「遠山。孫を、殺してやってください。ここで私を殺せば混乱になりますが、孫となって戦う流れの中であれば藍幇もそれを認めるハズです。それが……私を、救う」

孫から、猴を救う――

俺はヒステリアモード時に、その決意をしている。

だが。

そんな事が、救いになるっていうのかよ。

猴と孫は2つの心を持つ、1人の少女。

それを引き離す方法が、殺すしかないなんて。
殺すことが、救いだなんて……！
「よし殺してやる」
いきなり日本語で喋ったメイド長が、ベリベリッ。
顔につけていた特殊メイクのようなマスクを、自ら剥がす。
その下から出た、顔は――
「り、理子っ……！」
ビックリする俺の横で、ユアンが『げえっ』という顔をしてる。
「……まだ交渉の道だってあるんだぞ、理子。妙な事を言うな。武偵法9条だって――」
「キンジはロリに甘いなあ。殺んなきゃ殺られるぞ。あのレーザーは超必だ」
メイド服の理子は、きゅ。
その場にしゃがんで、猴の右眼をのぞき込んでる。

そして、

「ゴタクはいいから、とっとと聞かせな。レーザーの事だよ。あたしもあれは撃たせたらヤバいと思ったから、撃たせなかったんだ」

尋問するように、猴に詰め寄った。

「何か返し技は？　鏡で反射できたり、湯気で弱らせたり、そういう簡単なのは無いの？　ねえ猴ちゃーん」

最後は猫なで声で語る、理子だが……

猴は、ふるふる。

伏せたネコミミみたいな髪と共に、首を横に振った。

「如意棒は熱線銃のようなものです。鏡は瞬時に溶け、蒸気など消し飛ばします」

まあ……

そうだろうな。出力の小さいレーザーポインターとはワケが違うんだ。

実際、ジーサードのプロテクターも紙キレのように撃ち抜かれた。中のジーサードごと。

あれは装甲車――いや、戦艦の装甲でも貫きかねない。

「……如意棒は無敵の矛。『矛盾』の故事にある、『どんなものでも貫ける矛』なのです。見えてるものを目で狙うので、狙いを外す事もありません。光線は直進するので、進路を変えたり曲げたりする事もできません。速度も光速なので、発射の後に躱す方法もない。なので、撃たせない――という峰理子の対応は、正しかったのでしょう」

強すぎてスミマセン、という感じにしょぼくれる猴に……

理子も、やれやれという表理子の顔で立ち上がる。

「ダメだこりゃ。キーくん、あまりに強い武器を持ってこられたら――『使わせない』。やっぱ、これしか手はないよ」

「それじゃあ皆の納得いく決着にはならないだろう。第一、ここは藍幇のホームだ。孫やココたちに難癖つけられて再戦させられかねん。

もし決闘になったらの話だけどな」

俺は腕組みして、考え込む。

少し、観点を変えて聞いてみるか。

「俺も、あのレーザーについてはもっと把握したい。だから特性を教えろ」

「あい。元より遠山には伝えるつもりでした。何を知りたいですか」

「そうだな。あれを……極めて貫通力の高い徹甲弾を発砲できる狙撃銃……と考えてだな……まず、装弾数を知りたい。何発撃てるんだ。連射はできるのか」

「それでいうと、1発です。連射はできません。乱戦の時の人避けに2射目を撃つフリはできますが、それは右眼を光らせるだけです」

――装弾数、1発か。

不便そうだが、あの必殺技に限って言えば合理的な構造なのだろう。

1発撃てば、確実に敵将を仕留められるワケだからな。2発目は要

らないんだ。

「再装填（リロード）にはどのくらいかかる」

「およそ一昼夜（いっちゅうや）――22～24時間要ります。いまムダ撃ちすることもできますが、撃ったかどうかは虹彩（こうさい）をよく見れば分かってしまいますので……交渉（こうしょう）を1日中断・延期（えんき）されるだけでしょう。もし交渉が決裂したら、その瞬間に猴が如意棒装填（そうてん）状態で孫にされると考えてください」

再装填に要する時間は、約1日。

これも耳より情報だが、よく考えるとあまり意味はなさそうだな。

撃たれりゃこっちは終わりだし。猴にムダ撃ちさせてもバレるみたいだし。

「レーザーの照射（しょうしゃ）時間は？」

理子（りこ）が横から聞くと、

「計（はか）った事はありませんが、コンマゼロ数秒です」

「ふーん。ほんの一瞬なんだねえ……レーザーの直径は、どんなもん

なの？」

「瞳径のおよそ半分、7㎜ほどです」

……うーん。あまり有益な情報は出てこない。

銃のスペックのノリでこんな事を聞いても、埒が明かないか……？

「さっき如意棒は『どんなものでも貫ける矛』って言ってたけどな。この世にそんな物は存在しないんだ。たとえば地球を貫通はできんだろ」

言うに事欠いて小学生みたいな発言を俺がすると、猴は苦笑いして

「できません」

できますよ？　って言われたらどうしようと思ったが、さすがに常識的な回答をした。

「何か貫けなかった物はないのか。長い歴史の中で」

「あ、あの。思い出しました。第二次世界大戦の時……猴は軍人にさ

れそうになった事があるです。実験をされてる間に脱走しましたが、その実験で――全力で撃ったのに、あとほんの数ミリの所で貫けなかった装甲板が……」

「おっ、何の装甲板だよ」

「戦艦大和です」

……ちょっ……

「正確には、米軍からの情報共有を受けて『こんな感じなんじゃないかな』と國民黨軍が想像した主砲防盾ですが。厚さ67センチの、高張力鋼でした」

強襲科の副読本で読んだが、大和の装甲板は最厚部で65センチ。当たらずとも遠からずだな、中国軍。

しかし……

「理子、大和を盗んできてくれ」

「ちょーっと荷が重いかなぁー」

理子と俺は苦笑いで、顔を見合わせ……2人揃って、ガックリと肩を落とした。

さっき戦艦の装甲でも貫きかねんと思ったが、ホントに撃ち抜いちゃうのか。

そんな戦艦クラスの装甲、今日の明日で用意はできん。

もし用意できても、鎧みたいに着込む事は到底できないし。

お手上げだな。

「何か奥の手はないのかよ。猴。撃たせても、なんとかして防ぐ方法」

敵に敵の倒し方を聞くという、末期症状の俺に――

「ありません」

猴はハッキリと首を横に振り、それから黒い瞳で俺を見上げてきた。

「……っ……」

猴のこの目つきに覚えがある俺に、緊張が走る。

あの北角の路上で、猴が死を覚悟した時に見せた――目だ。

「ただし――見かけ上、撃たせて外させる方法はあるかもしれません。いろいろな前提が必要になるですが。その直後に孫を殺してしまえば、証拠も残らないです」

「撃たせて、外させる……？」

俺が眉を寄せると、

「――遠山の仲間に、日本の巫女がいますね」

唐突に、上目遣いの猴がそんな事を聞いてきた。

「……？　白雪の事か。いるはいるが、それが何だ」

こっちもさっきいろいろ聞いた手前、正直に答えてやると……

「姓は星伽のはずです。違いますか」

「……いや、合ってる」

「彼女は太刀、日本刀を持っていますね」

立て続けに白雪の事を言い当ててきた猴に――

「ああ。持ってる。よく知ってるな。孫が日記でも書いてたのか？

藍幇（ランパン）に聞いたのか」

俺がそう言うと、猴は小さく「いいえ。刀の存在を感じたです」と答えてから――

「ふむ……でも、刀で孫を猴に戻さなかったということは、彼女は孫の正体を知らないのかも……哎（アイ）、そうである事を、祈りますが……」

少し困り顔で、独り言するようにブツブツ呟（つぶや）いた。

「おい、ひょっとして――白雪の刀で、孫を猴に戻せるっていうのか？」

「あい。逆もです。でも、星伽は……悠久（ゆうきゅう）の時の中で、それに使える術式（しき）の継承（けいしょう）を途切れさせてしまったかもしれないです。だとすると、私の作戦は成り立たないですが……ここからは、白雪が術式を知っているという前提で話を進めるです」

「ちょ……ちょっと待て。なんで白雪と孫が関係あるんだ。今、『孫の正体』がどうとか言ってたが……お前は、お前たちは……何者なんだ？」

俺に問われた猴は再び顔を上げ、

「星伽は古代、日本から緋緋色金を手に渡ってきて――時の皇帝の求めにより私を変えた巫女・緋巫女の一族。白雪はその末裔です」

俺の1つめの質問に、驚くべき回答をした。

そして――もっと驚くべき、2つめの質問への答えを告げてくる。

「猴はあくまで猴です。しかし孫は、十全ではない神。不完全な『緋緋神』なのです」

……！

――緋緋神――

緋弾を撃ち込まれた事でアリアが変貌してしまいかねない、荒ぶる戦神。

それは……

あの孫と、同類の存在って事なのか。

金メッキの格子越しに語られたその話に、俺と理子が息を呑む。

さらに猴は、

「――私の胸には、取り出せない位置に緋緋色金が埋まっているです。それは昔、星伽の巫女が外科的に埋め込んだものなのです」

そんな事を、告げてくる。

に……似ている。

シャーロックが大質量の緋緋色金――緋弾をアリアに撃ち込んだ話と。

この話、デタラメじゃなさそうだぞ……！

「星伽の刀は、人類には制御しきれぬ緋緋色金の力を操作するため――人が造り出した物。今の言葉でいえば、制御棒のようなものなのです。パトラの鍵は、その破片から作られているです」

――制御棒。それも聞き覚えがある。確か、孫が白雪の刀を見た時に口走ってた。

あの刀の銘は、イロカネアヤメ。

イロカネアヤメは一度、星伽神社からパトラに盗まれている。その後アンベリール号で取り返してはいるが、その前にパッと見では分からないような部分……たとえば刃から下に延伸した、柄に覆われている金属部分……中心かどこかを、削られてたんだろう。

イロカネアヤメと――イロカネ。

さっきの理子じゃないが、この2つの言葉はダジャレみたいに被ってる。

どうして今まで、こんな簡単な言葉の繋がりに気がつかなかったのか。

アヤメとは花の名前のようにも聞こえるが、殺め、危め、といった対象に影響を及ぼす言葉として読めなくもない。

猴の話を鵜呑みにしないまでも――

少なくとも、何らかの関係はありそうだぞ。イロカネアヤメと、緋緋色金の間には。

だが、なぜだ？

俺の身の回りでいえば、白雪と、アリア。その2人が緋緋色金に関係している。

あの2人は偶然出会ったんじゃなかったのか？

分からない。

ヒステリアモードでもない俺の頭では、この話は考えれば考えるほど分からなくなっていく。

俺の周囲では、ずっと前から、知らず知らずのうちに……

着々と、仕組まれた何かが蠢いているのかもしれない。おそらくアリアや白雪たちも、認識していない領域で。スケールの大きな、何かが——あのシャーロックが後ろで事件の糸を引いていた、イ・ウーの時のように——動いているのかもしれない。

それはさっき諸葛が言っていたように、大きな視野を持って考えれば実態が見えてくるものなのかもしれない。だが俺はアイツの言う通

り、小さな島国の少年。そのせいかどうかは知らんが、身近な物しか見えない性質(タチ)だ。

俺1人で考えるべきことじゃないな。これは。

――考え込んでしまった俺を現実に引き戻すように、

「……如意棒(にょいぼう)は、発射する前に溜(た)めの時間があるです」

猴(コウ)が、自分の攻略法の話に戻る。

「それは右瞳(みぎひとみ)が赤く光る時で、分かりやすいです。光は次第に強くなっていき、ある瞬間急に明るさが増すタイミングがあるです。そこからはもう発射をキャンセルできないです。なのでその時を見極めて、星伽巫女(ほときみこ)の制御棒(せいぎょぼう)で――孫(ソン)を猴に変えてください。猴はわざと外して撃ちます。そこですぐ、遠山(とおやま)が猴を撃ち殺すです」

その話に……俺は……黙ってしまう。

猴を、殺す。孫もろとも。

そんな事、したくない。

この無邪気でおとなしい猴を、いや……乱暴な孫の事だって、俺は殺したくなんかない。

だが……

分かる。分かってしまう。俺を横目で見てきた理子も、分かってるから——黙ってる。

——この作戦は多分、通る。

できるのだ。俺、孫と猴、白雪、全員の条件が整えば。

そして……

見かけの上で俺が孫を倒し、藍幇にもその光景を信じさせる方法は……これしかない、

という事も、分かる。

「遠山。この話、遠山に預けます。星伽巫女との下相談、それに遠山の心の準備の時間も要るでしょう。ですがそれも、一昼夜あればできると信じます。遠山は男の子。ある種の八百長にはなるですが、今度

こそしっかり――勝ってくださいね」

猴はそこで――ニコリ……と、笑った。

自分を殺す話の後で、殺す役の俺が臆することなくやれるようにと。

なんという……度胸。胆力。いや……覚悟。

猴は見た目こそ小学生のようだが、とても大人びた……

それこそ古代中国の戦国武将のような、潔い女傑なのだ。

3弾　死亡遊戯（ドラゴンロード）

その後――

猴（ユウ）の作戦の事は、さすがの理子（りこ）も「キーくんに任せる。ゆっくり考えた方がいいよ」と一任してくれた。

昼、夕方と、相変（あいか）わらず食っちゃ寝してるアリアたちを横目に藍幇（ランパン）城（じょう）で考えたが……

猴の八百長（やおちょう）作戦の他に、道は思いつかない。

だがそれもやりたくはない。

（そんなんだったらいっそ、藍幇の軍門（ぐんもん）に降（くだ）るか……？）

とも、ちょっとマジメに考えてしまうぐらいだ。

だがその案も却下だ。次は藍幇の内部抗争、その矢面（やおもて）に立たされるんだろ？　どうせ。

上海（シャンハイ）には香港（ホンコン）の3倍以上も人がいるんだ。そこから超人どもがワラ

ワラ攻めてきてみろ。大変なことになるぞ。孫悟空もいたぐらいだし、昔話に出てくる長い中国龍とかをマジでけしかけられるかもしれない。そいつがアナコンダみたいにグルグル巻き付いて、全力で締め上げてきてみろ。全身複雑骨折でタコにされちまうぞ。

などと末期的な戦闘図の想像なんかをしているうちに……

夜になってしまった。

おだんご頭のメイドさんたちに1階の大食堂へ案内されると――

「キンジ。ツリーは？」

すでに円卓を囲んで夕餉を心待ちにしてたバスカービル各位の中から、アリアがジロッとこっちを見てきた。

「お前なぁ……」

こっちが鬱ってた間、そっちはクリスマス・ツリーの心配かよ。

「あたし注文したでしょ。あーもー、ツリーのないクリスマスなんて信じられないわ！」

テーブルに上半身を伏せて、ジタバタとだだっ子するアリア。
虫の居所が悪い俺はベレッタの握把で一発ごっちんしてやろうかとも思ったが、それが1京倍の反撃の引き金になる事が分かっているのでグッと堪える。対アリア危機管理とは、ガマンのことなのである。
「じゃあ藍幇に頼めよ。5分で用意してくれるぞ」
「そんな事は分かってるわよこのドベ。でもまだ和平交渉の前でしょ。勝手にくれるならともかく、こっちから依頼したら弱味になるわ」
へー。
ドベ呼ばわりはともかく、一応、アリアもその辺はわきまえて行動してるんだな。
確かに見たところ、洗濯してもらった後は例のキンキラ中国服をみんなやめて武偵高の防弾制服に着替えてるし……それぞれの武器も、あまり目立たないようにだが持ってきている。一応、心の奥底で警戒心は絶やしてないんだな。

まあ、美味しい中華料理を並んで待ってる姿はもはや食客以外の何者でもないんだが。

「隣に座るぞ白雪」

「は、はい」

安心・安全がモットーの俺は、比較的よい子のツートップ（白雪とレキ）の間にイスを挟んで座る。

「あ、あのねキンちゃん。昨日の夜はゴメンね。レキちゃんに聞いたんだけど、なんだか私、不作法を働いちゃったみたいで……でも、夜のこと全然覚えてなくて……」

「……っ……あ、ああ……」

質、悪っ……！

酔うと大暴れして、醒めるとコロッと忘れるタイプか。考え得る限り最悪の酒癖だな。

コイツの成人後がリアルに怖い。

（……それはそうと……）

イロカネアヤメの事。

猴の作戦について。

俺はまだ、白雪に何も話せていない。

アリアの緋弾との関係うんぬんはいずれ話すにしても、今は時期が悪い。目先の藍幇をなんとかしてから、できれば玉藻辺りをアドバイザーに付けた上で話すべき事だろう。

だが、作戦については……タイムリミットが近い。どうしたらいいんだ……

「――ねえキーくん、決めた？」

にょん、と理子がテーブルに身を乗り出して俺に耳打ちしてくる。

さっきの俺の安心・安全思想を無意味にする動きだ。胸の谷間がクッキリ見えるっての。

「な、なんだよ」

「あの方法にするの？　それとも別の方法思いついた？」

これは……

猴の件だな。

「まだ決めてない。だが他には何も思いついてないんだ」

正直に答えると――

「遅いよ。じゃあ今決めるか思いつくかして。理子、キーくんを信じてるから」

そんなムチャ振りだけをして、理子は上体を引っ込めた。戻りぎわにアリアの太ももを触って、ぎゃーす！　と騒がせてる。今の俺への耳打ちを不審がられぬよう、周囲の気を逸らさせるような動きだ。

どうした。

理子は何かを焦っている？

と、俺は眉を寄せて辺りを見回し……僅かな異変に、気づいた。

諸葛が出てこない。

いつも食事には同席してきて、食前にシェフっぽく素材や調理法の説明をしてくれてたのに。

（具合が悪いのかな。アイツ……）

だとしたら、ちょっと見舞いに行こうかな？

いや、僅かな異変は――それだけじゃない。

今までは俺たちが5人集まるとすぐ豪華な食べ物が出てきたものだが、今夜はまだだ。

その違和感に、俺だけでなくアリアや白雪も気付き始める。

さっきの理子は……いち早く、これに気づいていたようだ。アリアの腿を触ったのも、帯銃を確認するためだったんだろう。

そして少し身構え始めた俺たちの正面、真ん前の扉を――

ばん！　と両手で開いて、お呼びじゃないのが現れた。

「――きひひっ！」

猛妹だ。

昨日までしていた付け毛を外して、ショートツインテールになっているから分かる。

そして……

その手で首根っこを掴んで、1人のメイドを引きずっているのも見えた。

マスクのように口に布を巻かれた、そのメイドは……

（ユアン……！）

院美詩（ユアン・メイシー）。

俺と理子に使われたのが、バレたのか？

ズルズルとユアンを引きずりながら、のし、のし。

カラフルな絹布（けんぷ）の女童丝（ガール・ノェーズ）、鞋を履いた足でやってきた猛妹（メイメイ）は――

ばらっ。

俺たち全員に見えるように、掛（か）け軸（じく）みたいな巻物を縦に広げてみせた。どや顔で。

毛筆で何やら書かれた巻物には、正方形の大きなハンコもついてあるが……

読めない。異体字だらけの行書だし。

ので、

「……」

立ち上がったバスカービルが全員で黙っていると、

「……お前たちに説明してやるネ。これは上海藍幇からの辞令ヨ」

どや顔を解除しつつ、ココは上から巻物を見ながら内容を解説する。

「『遠山金次には上海藍幇より武大校の位、終身契約前払いで三千万人民元の給金を与える。曹操姉妹は全てその正妻側室とする。遠山が中国語を覚えるまで女性教師を付ける』と、書いてあるネ」

辞令の後半を聞いたアリアや白雪が殺人的な目をしたので――

三千万人民元が何円なのか一応計算しかけていた俺の下心も雲散霧消する。

「あと『神崎・H・アリアは武中校、星伽白雪・峰理子・レキは武小校とし、何れも遠山金次配下とする。以上の条件を以て、バスカービルは藍幇に降る事。』ネ。キンチの大校いうのは旅団長ぐらいの地位ヨ。それより上は藍幇全体からしても20人いるかいないかネ。つまり序列20位ぐらいにいきなり入れる破格の待遇。これ断る宇宙規模のバカ、キンチがそこまでバカなら――極東戦役（FEW）ルールで決闘してしまえ、そのお許しももらたヨ」

つまり……

『今なら地位と金と女をやるから藍幇の手駒になれ。断れば殺す』ってシンプルな話か。

さすが大陸の人間は分かりやすいな。

「――ユアン。何か酷い事はされなかったか。ケガは」

猛妹の話を一旦脇に置いて俺が聞くと、ユアンはフルフルと首を横に振る。

「この娘が気になるネ？　キンチ、お前なかなか見る目あるヨ。この娘、銃つきつけても何も吐かなかったある。トボケるの上手かったネ。コイツは、これからキンチの召使いにするネ。そうした方がキンチも藍幇で過ごしやすくなる違うか？」

にい、とユアンを見て笑った猛妹は――

「それにコイツに吐かせる必要無いネ。猴をチョット締め上げたら、峰理子に会ったこと分かったある。ココたち、峰理子のひん曲がった性格はよく知ってるヨ。何かはともかく、ヘンな手を打ったに違いないネ。こっちが諸葛みたいにノロノロしてると、理子動き出す。理子がいる分かった時点で、ココたちは上海にこの辞令出させるよう動いたある」

今度は、ぎろり。理子を睨み付けてる。

不二家のペコちゃんみたいにペロッと舌を出してウインクを返してる理子は、藍幇とはイ・ウー時代に友好的だった間柄。

こっちが向こうをよく知っているのと同様、向こうもこっちをよく知ってたって事か。

そして理子には、自分が動いたからには早晩(そうばん)こうなる事も計算できてたんだろう。

それでも妙にリラックスしてる感じなのは――

さっき猴と会ったあの場に、俺(おれ)がいたから。

俺という切り札がある、と信じてるからだ。

さっきの『信じてるから』というセリフは……

要するに、猴・孫(ノン)の件を丸投げするよ宣言だったって事か。

その殺害または攻略を『不可能(エネイブル)を可能にする男』こと俺に任せるつもりだぞ。ひでえな。

「……諸葛はどうした」

俺は、この場を切り抜けられそうな男の名を出すが……

「――アイツはもう退場ネ。諸葛にあるのは頭脳だけある。上海はま

だ諸葛に香港藍幇を治めさせるつもりだけど、それもそろそろ終わりヨ」

「いいのかそんな言い方をして。諸葛はお前の上役なんだろ」

「それも今日までネ。キンチが武大校なれば、その正妻の位階も上がるのがルールある。それで一発逆転して、諸葛は曹操の部下なるネ。なんでちょっとフライングして、諸葛はもう捕らえてあるある。きひひっ」

そこは実に楽しいポイントなのか、猛妹は目を細めて嬉しそうに声を上げた。

「――キンチ。この辞令が最終交渉・兼・ココのプロポーズある。政略結婚で藍幇とバスカービルは朋友。お前たち、これから一緒に頑張って藍幇のトップ目指すネ！」

ぽんぽん！　とその場でジャンプして1人盛り上がるココだが――

また出たNGワード『プロポーズ』のくだりで、アリアと白雪が地

獄の鬼みたいな目で、理子とレキも冷ややかな目で俺を見てくる。
よしそうしよう、ってココに言ったら今ここで殺されちゃうな。うちの女子4人に。
なので俺と中国嫁の縁談は、お流れという事にさせてもらおう。
そして断るなら……
ここはビシッと、バスカービル女子たちの前でカッコよくキメるぞ。
俺は香港に来てから迷子になったり猴を逃がしたり、チームに貢献する動きをいまいちできてないからな。ここいらでイメージアップしておかないと、立場が無くなるんだ。
「これは上海のミスだな。人選をしくじった」
斜に構えた俺はそう切り出し、鋭めの目つきで――
「――諸葛なら良かったんだけどな。ココ、お前じゃダメだ」
お前たちは交渉役を間違えたぞ、と、ハッキリ告げてやった。
キマッタ！　と自分では思ったのだが……

……あれ……？

なんかココが、ちょっと青ざめて一歩引いたぞ。

「……お、お前……お嫁さん、男のほうがよかたあるか……」

ちょっ……！

そういう意味じゃねえよ！

抗議しようとして顔を上げると、ススス……

バスカービルの女子もみんな、ちょっと上体を避けるようにして俺から引いてる……！

「キ、キンジあんた……ワトソンとミョーな感じで仲が良いとは思ってたけど……それと、あんたのお兄ちゃんの事にはあまり触れないようにしてきたけど……やっぱり、血は争えないのね……あっ、いや、別にあたしは差別とかはしないわよ……？」

「キ、キンちゃん……なかなか、私にお情けを下さらないと思ってたら……そ、そういう事だったんですか……？　これは、子孫繁栄に大

きな障壁が……」

「うひゃー……これは夾ちゃんに報告の要アリだね……薄い本が厚くなるなぁ……前科も考えると、つまりどっちもいけるクチって事だねこりゃ……さすがキーくんだわ……」

「……」

レキまで沈黙長めだし……！

「そ、そっちの話じゃねえよ！　和平交渉に！　出てくるのが！　諸葛のままだったら、よかったのにな、って意味！　だ！」

目を血走らせてベレッタを出した俺に、みんな『うんわかった。怒らないで』という顔。

マイノリティーを優しく気遣うような、ちょっと引きつった笑顔だ。

あーもう……ッ！

せっかくイメージアップを図ったのに、むしろ全女子ドン引きじゃねーか……！

ま、まあいい。この件は後で説教するとしてだ。

俺はブラドのように大きく息を吸い、

「――気を付けッ！」

蘭豹仕込みの号令で活を入れ、バスカービルの意識を今の件からリセットさせる。

それで一応、みんなシャキッとなった。

「お前らにリーダーとして命令する。ここじゃ、もう十分飲み食いしただろ。ここからは仕事の時間だ。『働かざる者食うべからず』だぞ」

俺はそう言って、襟を正す。ベレッタは収めない。

――戦るぞ。

銃を収めない事で、それを皆に示す。

「ココ。俺が言うのも何だが、もっと大きな視野を持てよ。日本には、こういう言い方がある――『金の問題じゃない』。金や地位で世界中の誰もが動くと思ったら大間違いだぞ。お前たちの国でも『巧言令色

少なし仁』とか言うんじゃないのか？」

という俺の物言いに、ココはツリ目をキョトンとさせた。

やっぱりそこは理解できない、という顔だ。

金と地位を与えられたら、敵将でもその組織に寝返るべき。それをしないのはおかしい。

それが……きっと、グローバルスタンダード。一面の真理、理にかなった事なのだろう。

だが――

昨晩も話したが、日本にはその理に合わない動きをする価値観もあるんだ。

それは、ちょっと言葉では理解を得がたい『文化』のようなもの。

むしろ金品をちらつかせて人心を掌握しようとする態度には、それを下品と感じたり、侮辱的だとさえ感じる事もある。少なくとも、俺はな。

向こうはそれが分かってなかった。徹頭徹尾。

そしてこっちも、その価値観を曲げるつもりはない。

まあ俺がもっと国際派だったら、この辺、もっと上手くやれたのかもしれないけどな。悪いがこちとら初の海外なんだ。

あと……

今回一番腹が立ったのは、ニセアリアをやられたこと。

ニセモノ作りが得意なお国柄とはいえ、あれはアリアに失礼だろう。

本人も激怒してたし。

自分がそれに陥落しかかってしまった恥ずかしさも相まって……

戦ると決めたら、どんどん苛立ちが募ってきたぜ。

俺はアリアに対する侮辱だと、引っ込みがつかないところがあるんだ。

あんなのでも一応、俺のパートナーだからな。

「没法子。没法子。あい分かったネ。要するにキンチはココを、藍幇

をフッたって事ネ」

そこでココの表情から、一切の譲歩が消え――

冷酷そうな色だけが、残った。

「フラれた腹いせ、してやるヨ」

ココ。

俺はお前らに、ある一面では感謝してるよ。

世界に一歩出て、ここ香港で分からせてもらった。

日本で間々言われる『何国人はいい人々、何国人は悪い人々』というのは、完全に間違った偏見で……

どこの国の人間にも、いいヤツもいれば悪いヤツもいるんだ。

この中国にも、ユアンたち北角の人々や諸葛みたいに――いい人々、話の通じる人物もいる。そして、ココたちみたいに話の通じないヤツらもいる。

そういう事なんだろう。

つまりその点においては、日本と同じなんだ。

日本にも、いいヤツも沢山いるし、悪いヤツもゴマンといるからな。

「ま、半分ぐらいこうなるかもって思ってたヨ。キンチを味方にしたかったけど、それは諦めたある。決闘……よッ！」

――ビリッ！

ココは巻物を真っ二つに破いてしまう。

良くも悪くも、切り替えは早いんだよな。ココたちって。

「俺も決闘は想定内だ。だがココ。極東戦役（FEW）のルールに基づいて、弱者の介入は許さない。そのルールに従う分には、こっちも従ってやる」

「どういう意味ネ」

「負けたヤツはお望み通り、藍幇に入れてやるって事だよ。もちろん俺もな」

バスカービル側に腹を括らせるためにも、少し強引に話を進めると

――

みんな、別に驚いたような顔はしてない。
一度勝ったココたちに自分たちが負けるワケがない、というような表情だ。
ここは――うちの女子どもが自信家ばかりで助かったな。
「――是（シィ）。ココも藍幇城（ランパンじょう）を壊したくないし、諸葛の報告のせいで使える兵隊の数減ってたとこネ。狭いとこで頭数多すぎてもジャマある。ただし藍幇の手勢は、狙姐（ジュンジェ）、炮娘（パオニャン）、猛妹（メイメイ）、機嬢（イーニャン）……」
そう言いながら猛妹は――
壁に飾（かざ）られてあった鉞（まさかり）や柳叶刀（リュウエイダオ）といった戦器を眺（なが）め回した。
どれもこれも、ただの飾りじゃない事は俺も最初から分かってる。
きちんと造られた、実戦用の武器だ。その中から、今回どれにするか選んでいるんだな。
「……それと女傭隊（メイズ）。人数は伏せるあるが、この城を守る精鋭の特殊部隊いるネ。あと、きひひっ――斉天大聖孫悟空（せいてんたいせいそんごくう）――」

孫の戦闘力には絶対の自信があるらしく、猛妹はそこで笑いを漏らし――

ちゃき、ちゃき。

X字に掛けられていた、2本の蛇剣を手に取った。

蛇剣とは刃が波打つような形をした、凶悪なデザインの剣。それでつけられた傷は深く、雑菌が入りやすく、長く治らない。ただ斬るのではなく……苦痛を与える事も目的とした、恨みのある敵に使うような剣だ。それの二刀流ときたか。

猛妹は威嚇するように、ぴゅん、ぴゅんっ。器用な手つきで、双剣を8の字に回す。

「バスカービル。『死亡遊戯』やるネ。藍幇城は3階層。1階につき1人のココが守るヨ。屋上には最後のココと孫、それと諸葛も立会人として居てもらってるネ。まあ、そこまでバスカービルが1人でも辿り着けるかどうかは――お楽しみある」

……なるほど。

いつも割と4人セットで動いていたココ姉妹だが、すでに布陣済みだったからここには猛妹しか来なかったって事か。

死亡遊戯、とは――ブルース・リーの遺作となった映画の題名。

そのクライマックスで、リーは各階にそれぞれ異なる敵が待ちうける塔を上っていく。

ココはあれをなぞって、1階ごとに兵力を配置したらしい。遊び好きなヤツだ。

さっき話してた特殊部隊の配置は……伏せたな。それはどこで出るか分からないが……

「キンちゃん。この子が言ってることは本当だよ。孫は屋上にいる。それを感じるの」

カチャ、とセーラー服の背後に隠したイロカネアヤメを鳴らして――

――白雪が、立ち上がる。

すると、

「星伽白雪。お前の相手は、この猛妹ネ。あとはみんな上がっていいある。上で待ってる姉ちゃんたちにも、獲物、分配する。これ共産主義ヨ」

独自の共産主義解釈を語った猛妹は、白雪を指名してきた。

猴が提案した作戦を知っての指名か……？

とも思ったが、

「お前は9月、新幹線を斬って計画を台無しにしてくれたネ」

そう語る猛妹の表情には、そういう色はない。

中国剣を使う自分に見合う相手として、日本刀を使う白雪を指名したって事か。

「じゃあ今度は、星伽候天流が――お城を斬ってあげるよ」

俺に作戦を何も聞いてない白雪も、この対戦カードには乗り気だ。

「きひっ」

犬歯を剥いて笑い、酒棚から『XO』と書かれたブランデーのマグナムボトルを取ったココは――びきっ！　ボトルの口を中国剣で断ち、上を向いて大口を開け……

ごぶぉ、ごぶおぉ……

ボトルを口の上でひっくり返して、の、飲んでるぞ。一気に。

その光景に、白雪も驚いてる。

強烈なアルコールのニオイが、ここまで漂ってきた。白雪も酒はいけると昨日発覚しているが、猛妹はその比じゃない。成人男性でも急性アルコール中毒で即死するような量を、一気飲みしている。

「――気をつけなさい白雪っ。あれはただ飲んでるんじゃないわ。酔拳――きっと、その剣術版よ！　ウソかホントか知らないけど、酔えば酔うほど強くなるとか……！」

「――あれは俺も2度見た。あそこまでの分量じゃなかったがな。コ

コの動きが不規則になって、予測し辛くなる。ナメて掛からない方がいいぞ」

アリアと俺が警告し、白雪が「う、うん」と頷く中――

「キンジさん。外に船が集まっています」

視力のいいレキが、窓の外を横目で見ながら告げてきた。

言われて見てみれば、夜の洋上には篝火が幾つも浮かんで見える。

それが、近付いてくる。あれはレキの言うとおり、船だろう。だがその数は――10や20じゃない。百隻以上の船が、この城を取り囲むように殺到しつつあるのだ。

この組織力は警察以上だろう。藍幇の構成員たちか。

「ぶはぁー！　気づくの遅いネ！」

がしゃんっ、と、猛妹がカラになった酒瓶を床に投げつけて捨てる。

「まー、安心するヨロシ。あれは非戦闘員ヨ。お前たち藍幇城から泳いで逃げるできないようにする、壁の役目ネ。きひひーっ」

最初に藍幇城を見た時は、海の上なんて逃げ場だらけだと思ったものだが……

それも、俺の物の考え方が小さかったな。人海戦術で塞ぐ手があったのか。

今やこの藍幇城から逃れる道は無い。海の上に、人の海が重ねられているのだ。

だが決闘という流れになった以上、俺たちも逃げる気はない。理子はどうか知らんが。壁だろうが柵だろうが敷設したきゃしろ、藍幇。

「そんじゃ、始めるネ……うひっく。今夜は戦。戦はお祭りネ……」

ゆら、ゆらり……と、ホラー映画のような足取りでこっちに歩き始めた猛妹は……

下に垂らした剣先を、ずる、ずる。引きずってる。構えない。

この時点でもう、剣術の基本を無視してる。逆にやりにくい相手だぞ。

そして――

「――開戦！」

猛妹がいきなりテンションを上げてそう叫ぶと、

――グァ――――――ン――……！

藍幇城の正面玄関から、耳を劈きそうな銅鑼の音が響いた。

その音に呼応して、ウォォォォ……！　と、四方八方の海から鬨の声が上がる。警笛の音も連なった。ココたちを応援しているのだ。藍幇の海が。

これには白雪も、少し表情に気弱な色を交える。

一見何の役にも立たない、敵の『応援』という行為――

実はこれには強い、催眠術のような効果がある。スポーツ界では常識だが、アウェー戦では敵サポーターの応援がこっちの志気を下げるのだ。自分が敵の一味に囲まれているという事実を思い知らされると、人は誰しも無意識下で能力を鈍らせてしまう。

この海鳴りのような応援には、俺も少し臆病風に吹かれそうだ。
――だがそれを全くスルーできている調子で、
「ほら。じゃあお言葉に甘えてこの階は白雪に任せて、みんなで上に行くわよ。あたしもそろそろ体がなまってきてたし」
アリアが立ち上がり、ピッ。
いつの間にか持っていた、明らかに平賀さんが作ったと分かるアニメっぽいデザインのリモコンを操作した。
すると――ババババッ！　昨夜は俺の寝床にもなった、食堂のあちこちにあった大瓶から小さなサーフボードみたいなものが次々と飛び出してくる。
（あれは……！）
アリアの、YHS　01――ホバー・スカート。その部品たちだ。
ココも含め皆が目を丸くする中、噴射推進音を上げて大食堂内を飛んだそれらは――

空中で幾つか結合し、広い所に出たアリアの背後に飛んできて、ガシィンッ！

まずハーネスで腰の後ろにくっついた。

や、やたらカッコイイぞ。ロボットアニメの変形シーンみたいだ。

だが……残りの部品を待つアリアは、ずるっ、ずるずるっ。

後ろ半分だけの推進器となったＹＨＳ　０１に押し出されるように、こっちへ床を滑り始めた。

どうもそれは想定外の事だったらしく、

「……あ、あれ？」

アリアはピンクの眉を寄せて、リモコンをピッピッピッ！　と何度も押している。

すると残りの前部ホバー・スカート部品たちは……プースッ……と噴射口からマヌケな音を出し、奥のテーブルに不時着したり、床に転がったり、窓から出ていったりしてる。

……こ……故障、か……！

不時着したのもヘンな煙上げてるし。

なんてこった。この重大な局面で壊れるとは。平賀さん、アリアに訴えられるぞ。

「えっ、あ、ちょ、ちょっと！　止まれ止まれーッ！　ってば！」

足をジタバタさせるアリアは、そのまま――

「お、おいッ……！」

床から少しずつ浮き上がりながら、制御不能状態で飛んでくる……俺の方へ！

「えっ！　あっあっ、よ、避けなさいよバカキンジ！」

「――っ！」

小柄とはいえ人1人浮かすだけの推進力を持つYHSの勢いは、凄まじく――

――ぽむうッッッ！

避けなさいと言われて避けたらなぜか避けた方に飛んでこられた不幸な俺は、アリアに薙ぎ倒されるような形で仰向けにブッ倒れた。

激突音が柔らかかったのは、アリアの……ジタバタしていた両脚に頭を挟まれるような形で、ぶつかったからだ。

その衝撃でＹＨＳは機能を停止し、アリアは俺の顔面の上に座るような形で不時着、と相成った。

「……」

何はともあれそのまま窓から夜空へ消える運命にはならなかった、アリアは……

仰向けに倒れた俺の顔面に、ぺたんと崩れた正座で座ってる。

「おおー！　おおおー！　これはゴイスー！」

「……キンちゃんは、よっぽどそれが好きなんだね……」

「……」

3者3様のリアクションが、視界を閉ざされた俺の耳に届く（レキ以外）。

「あー……飲み直すヨ。もうひとビン」

ココの呆れ声も聞こえてきた。

そう。これは白雪にとっては記憶に新しいであろう――ノノ孫と俺がランジェリーショップで格闘戦を繰り広げた時にも、上下逆で取らされた姿勢。

「フッ……ぱり……うな。ちゅ……じゃ……ない」

という俺のセリフは、アリアの脚の間でくぐもり、消えゆく。

ちなみに今のは『フッ……やっぱり本物は違うな。中国製のニセモノじゃ、こうはいかない』と、ココにも聞かせてあげたかったセリフだが……まあ、やむを得ないだろう。

こうはいかない、というのは――

血流の事だ。

俺の体の中心・中央を流れる――あの、全身に心地良いまでの力が漲ってくる――

ヒステリア・モー……

「……」

わしっ。

己の血流を確かめていた俺の頭に、左右から小さな手が添えられた。

そして、ずり、ずりずり。

アリアから見て膝方向に、俺が引っ張り出されていく。はは。凄い力だね。

俺の視界は広がった武偵高のスカートの裏地へ――臙脂色の防弾繊維へと移り、そしてアリアの両膝の間から天井を仰ぐ形となった。

「やあ」

改めて俺が挨拶をした、お人形さんのように愛らしいアリアの顔は

……

今や、レキ並の無表情顔。しかも赤紫色の瞳から光を失わせている。

アリアから産み出されたかのように、スルッと仰向けのまま床から這い出た俺は――

背筋で軽く跳ねて、タンッ。

片膝立ちになって着地し、アリアの顔をのぞき込んであげる。

「――思い出したよ。アリアと俺が、出会った日の事を」

理子によるチャリジャックで窮地に陥っていた俺を、アリアは空から救い出してくれた。

その時はアリアが、俺を受け止めてくれた。

「今夜は、俺がアリアを受け止める事ができた。少しはあの時のお礼になったかな」

まだ心を失った状態のアリアを、きゅっ。

俺はあの時にもしてあげたように、お姫様抱っこで抱え上げる。

そこで、ガシャン。YHSは外れて落ちた。

俺は同じく光を失った目でこっちを見ている白雪を、

「ここは白雪に任せる。白雪が目撃した今のような俺の姿も、二度ある事は三度ある――三度目は白雪と、かもしれないね。白雪が猛妹に勝って俺とまた会えれば、だけど」

我ながら何だかよく分からない理屈に、爽やかな笑顔を添えてあげた。

するとそれまで硬直していた白雪は、称えても称えきれないほど幸せそうな笑顔にすぐなって……

「――はい！」

取ったね。星伽の封じ布。

猛妹。この白雪は手ごわいよ？　君も心して掛かるといい。

そして……

抜刀して八相に構え、刀身に炎を纏わせた白雪にこの場は任せて――俺たちは大食堂を抜け、2階へ続く階段へと向かう。

（――猴）

せっかく猴が立ててくれた、イロカネアヤメを使った孫殺害作戦は……

最初の最初から、不可能となったね。

つまり俺にはもう、君を殺す手が無くなったんだ。

でも、いいさ。

そんな手、最初に捨ててしまおう。

どの道、こうなった俺には女性を傷つける事なんてできないんだから。

それに猴。俺は君と同じぐらい、孫を愛しているんだよ。孫は俺に『好みのタイプ』と言われて喜んでくれた。『本気にしちゃうからな？』と、受け入れてくれさえした。

その気持ちをくれたのだから、俺もあげよう。何もかもを。

君が俺を撃つというのなら、撃てばいい。

本気の気持ちを込めて、撃っておいで。
愛のレーザー――受け止めてみせる。

俺、理子、レキ、そして俺の腕の中のアリアは――
1階ホールを駆け抜け、1階から2階への階段を警戒しながら上る。
「藍幇城は2階まではオープンなんだけど、籠城戦になった時に備えて――3階に上がる階段が1つしかないんだよ。敵が張るとしたらそこだと思う」
理子に言われて、俺は偵察がてら見回した2階バルコニーの光景を思い出す。
あのバルコニーは上の屋根が飛び出していて、3階には上りにくそうだった。
あれはいわゆる忍者返し――対人のネズミ返しだ。3階には上ろうとしても上れない、単純だが効果的な侵入防止構造だったのだろう。

手すりに狛犬のような飾りのある階段を上がりきり、2階ホールに出ようとした時。

「――！」

お姫様抱っこされていたアリアが俺の胸を叩き、パッ、と床に下りた。

そして全員に制止して黙るようジェスチャーし、シリアスな表情で……ぺたんこの胸を、階段の曲がり角ギリギリまで寄せた。

アリアはその角から、ホールとその奥の大階段から見えるように制服のタイをつまんでヒラッと露出させる。

すると――ガガガガガッ！

防弾タイを掠めた十発以上の弾丸が、龍のレリーフが為された壁に無数の弾痕を生じさせた。

「――銃はQBZ―95Bが12と、QBZ―03が4ね。発砲位置は高いわ。きっと階段に隊列を組んでる」

銃声だけからそれらの情報を読み取ったアリアは、スカート内のレッグホルスターから白銀と漆黒のガバメントを抜く。

アリアのいうQBZ―95B・QBZ―03とは、北方工業公司製のアサルトライフル。

日本の武偵的には95式B小銃・03式小銃として知られており、95式BのBとは通常より全長が短いカービン銃を意味する。

しかも今の発砲の速さ、集弾の様子から見てそれなりに撃てる――訓練された兵たちだ。それがおよそ2個分隊分いる。

こっちのはガバメントのアリア、ベレッタとDEの俺、ワルサーとデリンジャーの理子、ドラグノフのレキ。圧倒的に火力不足だし、人数も3分の1以下だ。

俺は武偵手帳から歯医者が使う口腔内鏡のような柄付き鏡を出して、アリアと一緒に角からホールの奥をコッソリ窺うが……

（……困ったな）

昨日見た黄金の大階段に、巨大な亀が居座っている。

正確には六角形や五角形のシースルー防弾盾を亀の甲羅のように隙間無く組み合わせた、お団子頭のメイドさんたちが。

肩を寄せ合った16人は……跳弾射撃をも防げるようにか、頭上や背後も盾で塞いでいた。半分に切った巨大サッカーボールみたいな具合で。

しかも、盾には閃光弾対策にサングラスみたいな色が入ってる。防御は万全だな。

甲羅の中央には、腕組みして仁王立ちしている――

つまり1人だけ働いてない、おそらく炮娘と思われるココの姿もある。そのお腹の帯に挿さっているのは、イスラエルの傑作短機関銃・ロングマガジンのUZIだ。

それらの様子を観察していると……甲羅の隙間から、パンッ！

亀の首のように突き出た03式から単射があり、俺のミラーの柄が折

られてしまった。

あーあ、欠けちゃったよ。ミラー。

「……」

やれやれ、と肩をすくめて仲間にはおどけて見せたが……

どう排除しようかな。あれ。

まさに亀と蛇の融合した聖獣、玄武って感じだよ。

攻防共にパーフェクトで、処置し難いね。

――これはヒステリアモードの俺にも、少々の難問だ。

仮に煙幕を焚いても、敵は甲羅の中から階段に弾幕を張ればいいワケだし……

レキにやられた閃光弾に対策を立ててるって事は、音響弾にも備えがあるんだろう。

アリアが持ってるらしい炸裂弾で吹っ飛ばす手もあるが、それだと死傷者が出かねない。

武偵法9条――日本のお堅い法律は、実戦じゃ大きなハンデだよ。

「……誰が行くの？　誰も行かないなら、あたしが行くわよ」

玄武の陣を見ても平然と、そのアリアが二丁拳銃を掲げてる。

だが俺はその手をそっと掴み、トリガーに掛けないよう人差し指を優しくつまんだ。

確かにアリアの強襲能力があれば、あの陣だって問答無用で蹴散らせるかもしれない。

アリアには1階での失策もあるし、ここで名誉挽回を図りたいのは分かるが……

「……っ……っ……！」

「アリア、待て」

「……っ……！」

俺は手のひらの温もりでアリアをテンパらせて、玄武とは戦わせない。

この子が出たら、俺も出ずにはいられなくなる。
アリアと俺の拳銃は連射や3連射も可能なカスタムガンだが、16丁ものフルオート銃を相手に銃撃戦を繰り広げたらすぐ弾切れになる。
敵もそれが狙いなんだろう。
経験上――当然、向こうも知っているハズだ――アリアや俺はよく弾切れに陥るからな。
こっちとしては、銃の名手のアリアをこんな早い段階で使い切りたくはない。
だが……
（となると、この難問を任せるのは誰がいいんだろう？　……理子？　……レキ？）
人事を決めきれず、俺は悩んでしまう。
「三分钟后前进！　瞄准射击峰理子！　您可以杀了！」
何やら大人の女性のキーキー喚く声が聞こえ、理子が『あちゃー』

という顔をしたので視線を向けると……

「メイド長さんだよ、今の声。理子があの人に化けて、キーくんを猴(コウ)ちんの所へ連れてっちゃったからさぁー。あっはー、『理子を狙え、殺していい』とか言ってるよ。ちなみに『3分したら前進』だってさ」

てへへーと後ろ頭を掻(か)きながら、理子は苦笑(にがわら)いした。

（……グズグズしてると、向こうが先に動くか）

そりゃ亀(かめ)にも足はある。ジッとしてるとは限らないよな。

となるとこっちも急がないと。

じゃあ……しょうがない。頼るか。

理子を殺すという話を聞いてから、床で『私が行くわ』と影絵(かげえ)でジェスチャーをしてる――

「ヒルダ。ここは君にお願いするよ」

俺がそう言い、理子がキョトンとするやいなや……

――サーッ――……！

理子の足下から影が伸び、分離して、2階ホールへと飛び込んでいった。

さっき落とされた俺のミラーを理子が慌てて拾い、欠けたそれを俺と覗くと――

メイドたちは自分の足下、黄金の階段を影がシュルシュルと上ってきた不自然な光景にざわついている。影があるからには何か飛んでいるのかと、何もない上を見回す者もいる。

だが、誰も、何ら有効な対処はできていない。

それはそうだろう。影と戦えるもんか。俺もかつて、手も足も出なかった経験がある。

見る間に、影は翼を広げた大きなコウモリのような形になり……

――パッ――！　バチチバチバチバチッッッッ！

階段全体から、眩い閃光と激しい放電音が上がった。

（……！）

あれはヒルダが得意とする攻撃。敵の足下に60～90万ボルトの高圧電流を流し、スタンガンのようなダメージを与える技だ。俺も外堀通りやスカイツリーで一度ならず食らっている。

がしゃがしゃがしゃ、と、感電したメイドたちは一斉に倒れ、階段を転がり落ちていく。

それを見下ろすように……ぞぞ……ぞぞぞぞぞぞ……

……姿を、現したぞ。黄金階段の上部に。

縦ロールをかけた金髪ツインテール、蝋人形のように白い肌、真っ赤な口紅をさした唇、黒を基調としたゴシック&ロリータ衣装の――

「……素晴らしいわ」

――竜悴公姫・ヒルダ。

姿を見るのは久しぶりだな。

というのも日光を嫌うヒルダは夜行性で、主に昼間を睡眠時間にしているのだ。理子はともかく、俺やアリアとは生活リズムが合わない。

そう考えると、この藍幇（ランパン）との戦いが夜間に始まったのはラッキーだったかもな。

「倒れ伏す敵を睥睨（へいげい）するのは、私の大好きな光景よ」

サディスティックな笑みを浮かべ、ハイヒールをカツンと鳴らしたヒルダから――

感電したせいで盾（たて）や銃（じゅう）をきちんと構えられないメイドたちは、一旦（いったん）フラフラと貴賓（きひん）室の中へ逃げていく。

さすがの炮娘（パオニャン）はヒルダの放電を直感で予測し中途半端にジャンプでもしたのか、さほどダメージを受けていないようだったが……メイドたちの将棋倒しに押し潰（つぶ）されつつ、黄金階段から転げ落ちていた。そこで何度も頭をぶつけたダメージもあり、共に退却してる。

――貴賓室を銃で牽制（けんせい）しながら、俺たちはこれを好機と階段まで駆け抜ける。

「さすがだよ、ヒルダ。手を貸してくれて助かる。どうにも中国（ここ）では、

頭数で負ける事が多かったからね」

気位の高いヒルダを、まずは褒めておくと――

「ほほほ」

ヒルダはツリ目を細め、真紅のマニキュアをした手の甲を口元に寄せて笑った。

そして、背中の……かつて理子に切り取られて今は復活中のコウモリっぽいミニ翼を、ぱた、ぱたたた。羽ばたかせた。

どうやら、褒められて嬉しかったらしい。

そして、

「今は私も師団の俘虜。この階段ひとつぐらいなら、守ってあげてもよくてよ」

ここで敵を足止めする役まで、自発的に請け負ってくれたぞ。

昔ワトソンに教わったヒルダ攻略のヒント……『褒める』。これはホントに効くんだな。

ヒルダの趣味にも合いそうなこの大階段は、黄金製。
金は、この世で最も電気伝導率の良い金属の1つ。
電気を流して敵を通行止めにするには、うってつけの場所だ。ちょうど3階への階段はここしかないと理子から聞いたところだし。
「本当は獣人界の有名人――孫に会ってみたかったところだけど。まあ、あとで死骸でもちょうだいな」
くるる、と室内にいるのに差しているフリフリの日傘を回したヒルダに、
「……殺す予定はないんだ。いずれ2人のデートをセッティングしてあげるよ」
無責任な事を言い残し、俺は3階への階段を上っていく。
踊り場で足下が大理石に変わり、そこにアリア、レキ、理子が一列になってついてくる中――
「呀哈ァ――ッ！」

たったったたたたた！

大きな青磁器の壺を抱えて、炮娘が2階ホールに飛び出してきた。

最後尾の理子が振り返り、立ち止まって左手のワルサーP99を向けるが――

「……!?」

炮娘に、発砲できないでいる。

壺や甕といった陶磁器は、中に炸薬を詰めれば原始的な爆弾にもなるのだ。

元寇――十三世紀の中国が日本に侵攻してきた時に使われた『てつはう』という擲弾の中にも、鋭い陶器の破片が入っていた。それが高速で爆散すれば、十分な殺傷力を持つ。

壺の中身が分からない以上、撃つに撃てない俺たちの視界で――

貴賓室の扉の隙間から、シャッ！

フリスビーのように、大きなマクラが投げ出された。

そしてそれがヒルダの手前、黄金階段の中腹に乗っかる。
敵の不可解な動きにこっちが進退窮まっていると、
「嘿ッ！」
炮娘は壺を抱いたまま、階段にダイブする。
ある種の特攻戦術かとも思ったが……ぼふん。
うまい具合に、炮娘はマクラの上に壺を置いた。自分はその上に腹ばいになっている。
「……何がしたいの？　お前」
ヒルダがココを睨み付けるものの、ココは「きひっ」と笑って壺の上にしゃがむ。
自爆じゃないと見たヒルダから――バチッ！
すかさず黄金階段に高圧電流が流れたが、壺は爆発しない。磁器は絶縁体――
「――みんな走れ！」

炮娘の作戦に気づいた俺はアリアやレキを押しやって、3階へと走らせる。

あの壺は武器じゃない。ただの絶縁体、足場なんだ。高圧電流をやり過ごすための。

ヒルダが眉を寄せる中、俺は理子にオシリで3階側へ押された。

「キーくんには孫ちゃんがいるでしょ。あの子、待ってるよ」

半分だけ振り向いてそう言った理子は、チャキッ。右手でも、ワルサーを構える。

ここでヒルダを1人にせず、一緒に敵を足止めするつもりなんだ。

俺を先へと行かせるために。

ばっ！　と壺から跳躍した炮娘は、UZIの弾幕で俺たちを通路の角へと後退させつつ大理石の踊り場に着地してくる。

「り、理子っ……！」

心配して振り返ったアリアに、

「――双剣双銃は甘くない。そうだろアリア」

理子はツーサイドアップのテールでナイフを抜き、『武偵殺し』の頃のようなムードで返す。

俺には体つきを見ただけで判別できたが、メイドたちには炮娘ほどの超人的な跳躍力は無いだろう。あの方法でここに来られるのは、炮娘だけだ。

だが、ヒルダの電力も無限じゃない。さっき放った2発目も節約気味の放電だった。

あの電流地雷も、何回使えるか分からないぞ。

――急がないといけない。

理子が守る階段の角へ、ジリジリと迫ってくる炮娘の気配を背に…

…

「理子、任せたぞ」

俺はアリアとレキを押しながら、上へと進む事にする。
「1つ貸しだからな、キンジ。ここはあたしとヒルダが時間稼ぎしてやるよ」
炮娘の動きを確認しようと理子が角から出した、さっきの欠けたミラーの中で……
理子の『あたしとヒルダ』というセリフが聞こえたらしいヒルダが、パタパタと黒翼を羽ばたかせているのが見えた。

俺・諸葛（しょかつ）・理子が今朝コーヒーを飲んだ、3階のカフェテリアに上がると……
「……」
誰も、いない。
2階が賑（にぎ）やかだっただけに、逆に不気味（ぶきみ）なムードがあるな。
俺、レキ、アリアは物音を立てないよう、バーカウンターの裏をし

ゃがんで移動する。

しゃがみ姿勢での移動は、女子2人のスカートが少し気になるところだが……俺は先頭。振り返らなければ、見て失礼にあたるようなものは見ずに済むだろう。

という俺の雑念を払うように――パァン！　とカフェテリアに発砲音が響いた。

パリンッ！　バスッ！　という着弾音が頭上のやや背後で鳴り、俺は仲間の無事を確認するために振り返らざるを得ない。

そこでは、しゃがんだレキのショートカットの頭に……パラパラ……

割れたカクテルグラスの破片が、棚から少量降ってきていた。

「――キンジさん」

あー……レキが……

ちょっとだけ、怒った顔になってるような気がしないでもないな。

その後ろで膝を閉じたアリアは丸見せだけど。怒りの表情を。

いや、ごめんなさい。ホントに。

俺は別に下心があって見たワケじゃないんだ。２人とも。

「これは、挑戦です」

どうやらアリアとは異なり、俺ではない誰かに立腹しているような感じで……

レキが、静かに告げてくる。

「今の狙撃は、彼女のメッセージなのでしょう。移動中の私がどこにいるのかを予測して、撃ってきました。それが出来るのは――」

煌めくグラスの破片を頭から払おうともせず、レキは狙撃銃を少し持ち上げる。

「……狙姐か」

俺がココ姉妹にもいる名狙撃手の名を出すと、こくり。レキが頷いた。

「彼女はこのフロアの奥に潜み、すでに1度私たちを見逃しています。発砲音から狙姐の位置が把握できました。この階に私たちが上がり、このカウンターに身を隠すまでの間は――彼女は3人の誰でも、狙撃できたはずです。ですが狙姐は敢えて、撃たなかった」

「ナメてくれるわね」

アリアが口をへの字にすると、

「そうではないと思います。狙姐は、自分だけが遮蔽物の陰に陣取るのはアンフェアだと考えたのでしょう。だから私がここに身を潜めるまで待ち、それから私を指名した」

レキが淡々と、そんな話をする。

（本当に……狙撃手は、それ以外の帯銃者には分からない世界にいるものだよな）

敵に自らぶつかっていく俺たちとは違って、狙撃手はこっちに気づいてもいない相手を一発で仕留めるような――ある種の、超越者のよ

うな力をその身に帯びる。

そのせいか、変わった物の考え方をするようになるヤツが多いのだ。

よくあるパターンは、妙に信心深かったりジンクスにうるさかったりするヤツ。或いは、『自分ルール』を何がなんでも厳守するヤツ――狙姐は多分、これに該当するんだろう。

「狙姐の挑戦を受けます。キンジさんとアリアさんは屋上へ行って下さい」

そう言って、レキは――

相棒のドラグノフ狙撃銃を抱え直す。

「私は狙姐を倒すか、ここに釘付けにします。彼女は比叡山での狙撃戦の再戦――私との決闘を望んでいるのだと思われます」

決闘、か。

レキと狙姐は――喩えるなら、現代に甦った女騎士と女騎士。

数百m、時には数kmにも及ぶ長大なランスで互いを突き合う、騎士

同士みたいなものだ。

それが、フェアに決闘しようとしてる。

そう考えると……この勝負は、ジャマしていいものではなさそうだ。

――ここは、レキの意志を尊重しよう。

「俺たちを撃てても撃たず、レキが身を潜めるまで待った……だって？

そういうのを、ナメてるって言うんだよ。自信過剰な狙姐ちゃんに、一つ思い知らせてやってくれ。誰が世界最高の狙撃手なのかって事を」

俺はレキの頭とヘッドホンに乗っかっていたガラス片を手で取り除いてあげてから……

「あの晩あの森で、レキは俺にこれをくれたね。今夜は、俺があげよう」

昨日ポケットにしまっていた、カロリーメイト・水果味を出した。

それをそっと、愛らしい曲線を描くレキの胸ポケットに挿してあげる。

「……」

「乗り越えておいで、レキ」

静かな、しかし女騎士としての誇りを賭けたその戦いを。

3階から屋上へ向かう、暗く細い階段で――

「キンジ、ちょっと待って……ごめん」

声に振り返ると、アリアが階段の少し下で胸を押さえていた。

息切れしている、ように見える。こんな階段を上る程度で？　東京タワーの展望台まで階段を駆け上がれるようなアリアが？

俺はアリアの所まで下りて、

「遅効性の毒に心当たりは？」

瞳孔や呼吸の様子を診るが――正常だ。

俺は衛生科じゃないから確かなことは言えないが、本当にただの悸に思える。

「ううん。ちょっと……胸が……でもこれ、よくある事だから。持病みたいなものよ」

アリアは左胸に手を置いて、すぅー、はぁー、と深呼吸している。

何度か俺も目撃したが……アリアは時々、この発作を起こす。とはいえしばらく安静にすればすぐ治るものらしい事も知っている。今はムリさせず、小休止を置こう。

アリアから仄かに漂う、クチナシのような甘酸っぱい香りの中……俺もアリアをさすってあげるけど、場所が場所だけに背中側からにしておこうね。

しかしアリアの胴体はどっちが胸でどっちが背か、目印となる膨らみに乏しいから少々迷うなあ。

などと失礼な事を考えていると、階段の暗がりの中で――

俺のポケットが、何やら光っている事に気づかされた。

中にあったバタフライ・ナイフを取り出すと……鞘を開く前から分

かるほど、赤く発光している。これは昔パトラからアリアを救った時や、孫とのカーチェイス中にも見られた現象だ。現象そのものは不可解だが、タイミングに何か共通点があるような……

――その時。

「……！」

「いるわね……」

俺とアリアは共に、同じ方を見上げる。

――感じるぞ。

超能力者でも何でもない俺にも、あの恐竜のように手ごわい気配が感じ取れた。

この上に、いる。

孫悟空――悠久の歴史を持つ中国でも伝説とされる、圧倒的な存在が。

それが今、掛け値なし、本気、抜き身の状態でいる。すぐ上の、藍

幇城の屋上に。

彼女と対戦するのは3度目だ。

1戦目はこっちの油断、2戦目は孫の遊び好きのせいで、お互いに不本意な1勝1敗を経験している。

その間に時は流れ、バスカービルの侵攻、藍幇内での政治的な変化などが起き……

ついに、俺と孫は抜き差しならない所まで来てしまった。

だからこれが俺と孫との最終戦。次は、無い。

今までみたいに歯切れの悪い、曖昧な関係はもう終わらせるんだ。

君と俺との関係を、ここでハッキリさせよう。孫。

4弾　その美しい瞳に、俺だけを映して

The end of contradiction

アリアの動悸も収まり、静かに階段を上がりきると……

強い西風が吹くそこは、屋上の西端だった。

藍幇城には日本の城と同じように、山なりになった屋根の稜線を結ぶ大棟がある。

日本では鯱鉾が据えられる位置には高さ2mほどの黄金龍の彫像があり、俺たちはその片方の下に出た形になる。

そして遠く、大棟の東側の端――もう1匹の黄金龍の前に、3人の人物がいた。

まず、長い黒髪を風に流し、腕組みして仁王立ちする孫。猴じゃない。遠目にも分かる。

その隣に、煌びやかな清朝中国の宮廷衣で正装した機嬢。ココ姉妹の1人だ。その手に気体爆弾・爆泡を収めているのであろう香水瓶が

握られているのも見える。

両手首を縄で縛られ機嬢の隣に立たされている、これも正装した諸葛。

彼らの背後には……赤い旗が、2本掲げられている。

五星紅旗――中華人民共和国の旗と、バウヒニアの花を描いた香港特別行政区の区旗だ。

ふと俺たちの背後を振り返れば、日の丸とイギリス国旗が掲げられている。

俺とアリアが上がってくるのは、監視されてたって事だな。

「屋上での戦い、か……」

つい口をついて出てしまったが――

これは菊代のお屋敷、鏡高組の上での戦いと同じシチュエーションになったな。

そこで、俺とほぼ同じ戦闘能力を持つジーサードは斃されている。

たった一瞬で。

今の俺は、あの時のジーサードと同様に無策だ。

まるで弟の二の舞を演じに来たようにすら思えてしまう。

「すごい包囲ね。逃げ場は無さそうだわ」

アリアの言葉に促(うなが)されて見渡せば、ヴィクトリア湾の入口沖、藍塘(ランタン)海峡に位置するこの海域は無数の船に囲まれている。

大きな円を描いて集まってきている船たちは、小型フェリーやクルーザー、漁船や荷船、ただのボートに至るまで様々だ。藍幇(ランパン)には多様な職種の人々が所属しているからな。

「どの船も篝火(かがりび)を焚(た)いてて、綺麗(きれい)だ。大きな光の輪で、孫の金箍(ノン・きん・かん)冠を表現してるのかな」

みんな、立場上は敵(てき)なワケだが……俺はそんな感想を述べてしまう。

実際これは、見とれてしまうほど美しい光景だ。

船の輪は次第に藍幇城(ランパンじょう)に近付いてきていて、船同士の距離(きより)も詰まっ

ていく。点線だった光輪が、線になっていくように見える。まるで洋上のマスゲームだね。

「ノンキねえキンジは。見なさいよ、泳いで出る隙も無さそう」

そもそも泳げないアリアに退路は無いんだけどな。この城に入った時点で。

でもそう言うと戦う前に殺されてしまう。アリアに。

ここはクールに笑みだけ浮かべて、黙ってよう。

――ぺた、ぺた。

太い平均台のような棟を……裸足の孫が、悠々とした足つきで前進してくる。

棟は直線。左右に移動すれば、瓦屋根の坂道。

これは射線が直線である如意棒にとって、極めて有利な地形だ。

（なるほど、だから孫はよく屋上で戦うんだな）

孫の後ろには、機嬢と諸葛もついてきている。

こっちも拳銃の交戦距離を意識しているので、近付けるのはむしろ有難い。

「行くぞ、アリア」

「OK、キンジ」

向こうに合わせるような素振りで、俺たちは棟の上を進む。

そうして、お互いの距離がそれなりに詰まってきた所で……孫たちが、立ち止まった。

拳銃で仕掛けるには少し遠い距離だが、様子見の意味も含めてこっちも歩みを止める。

揃いも揃ったり……諸葛亮孔明、曹操孟徳、シャーロック・ホームズ、遠山の金さん。それらの子孫に加えて、孫悟空ご本人。カオスだな。

風の中で最初に喋ったのは——意外にも、諸葛だった。

「この決闘は、極東戦役の一戦。バスカービルと藍幇の勝敗を決める

戦いです。よろしいですね、機嬢（シーニャン）」

その宣言は俺（おれ）たちにというより、ココに釘（くぎ）を刺すような言い方だ。

諸葛は――比較的根回しの済んでる海外勢力を香港藍幇（ホンコンランパン）に入れて、上海藍幇（シャンハイランパン）とのパワーバランスを保（たも）つ延命策にしたがっている。そのために、極東戦役すらも利用するつもりだ。その狡猾（こうかつ）さ、頭が下がるね。

ココは金銭を使って、上海藍幇の影響下に俺たちを置こうとしたが……

ここで孫（ソン）が俺に勝てば、藍幇内ではバスカービルとは『香港藍幇の孫が決着をつけた』という形になる。

香港藍幇が担当している極東戦役は続くワケだし、名実ともにその間はバスカービルを自分たちの傘下に置いてられる――ってのが、諸葛の筋書きなんだろう。

まあその話は、ここで俺が負ける事が前提になってるんだけどな。

「この舞台、藍幇城（ランパンじょう）の上ネ。海の上からの人目もいっぱいある。これ

で戦って私闘言うは無理あるヨ。ココにもメンツがあるネ。曹操の名にかけて、いいある――これは、正式な決闘。そっちはキンチ、アリア。こっちは孫、それと機嬢。2対2の、大将・副将戦ヨ」

と言うココ――機嬢だが、その顔に自分が戦うという緊張感は浮かんでいない。

それはそうだろう。

今の俺には何となく分かるが、おそらく彼女は平賀さんのような武器職人。

ココ姉妹の周囲には、見た事も聞いた事もないような武器が多すぎる。ココはそれぞれ担当を決めて無敵の『万武』を演じていたワケだし、後方支援係のココが独立していても何らおかしい話ではない。

イ・ウーにも出入りして売りさばいていたらしい海水気化魚雷、乗用ICBM、爆泡や前にジャンヌが話していた無反動機関銃もこのココが造ったのだろう。

つまり、このココは……姉妹の中で1人だけ戦闘能力が無い、武器作りの専門家なのだ。

護身用に香水瓶（アトマイザー）――爆泡のシャボン玉発射器を持ってきてはいるが、風は西風。俺たちから見て追い風だ。そこは運が無かったな。機嬢。

それでも平然としているのは――

この戦いを、孫に任せきるつもりだからだろう。

孫には必殺のレーザーがある。

それで俺を、あわよくば俺とアリアをいっぺんに斃（たお）させ……アリアが残っても、孫ならアリアには遅れを取らないと踏（ふ）んでいるのだ。

正直――それは少々、いただけないな。

俺の事はともかく、アリアを甘く見てるのは。

だがこっちとしても、さっき持病（じびょう）の発作（ほっさ）をやったばかりのアリアを戦わせたくはない。

実質、俺（おれ）と孫（ノン）の一騎打ち。

不承不承ではあるが、そう認識しておこう。

「――死战开始！」

戦いの始まりを機嬢が叫ぶと、階下のどこかから――

――グァ――――――ン――……！

再び、あの大銅鑼の音が響いた。

――グァ――――――ン――……！

2度目の銅鑼で、孫と俺の目が合う。

――グァ――――――ン――……！

3度。そこで止んだ。これが――どうやら、大将同士の決戦を報せる合図らしい。

それを聞いて、船の輪が全て停泊する。

ヒステリアモードの眼に映る彼ら……サラリーマン、八百屋、学生、バス運転手、警官、アイスクリーム売り、駅員……老若男女が、屋上に立つ俺たちを見上げている。

それは乱戦の終わりも意味していたらしく、階下で散発的に聞こえていた銃声も止んでいく。

皆、この抗争が屋上の一戦で決着をつけるフェーズに至った事を悟り……

自分たちは手を出さないよう、これ以上は戦わないようにしているのだ。

中国の文化では、人海戦術の総力戦と武将同士の一騎打ちを厳密に分けて考えるらしい。

いわば、この戦いは三国志演義に描かれた関羽と呂布、趙雲と夏侯恩のような一騎打ち。雑兵が乱入していい戦いではない。助太刀をしていいのは、関羽に味方した張飛のように一流の戦士に限られる……って事か。

悪くないな。そういうムードは。狙撃銃とかでジャマしてきそうな気配も無いし。

そこで――グイッ。

孫が勝利を表すように、フライング気味に片拳を上げた。

それを必勝の予告と見て、周囲の船からワァーッ！　と喝采が上がる。

ココがやったんだろうけど、分かりやすい旗が揚がってるもんな。

中国・香港は正義の味方、旧占領国・旧宗主国の日英人は揃って悪者ってことか。プロレスみたいだな。

まあいいや。たまには悪役をやってやろうじゃないか。テロリスト紛いやヤクザばかり相手に戦ってきて、イイ者のキャラは食傷気味だったところさ。

「さて、一応訊いておこうか……」

ノリの大変いい俺は、ちょっとワルモノっぽく斜に構えて孫に語りかける。

「――誰なんだ、君は」

俺の孫への問いに、アリアや機嬢、諸葛は少しキョトンとするが…

…

孫は、ニィ、と犬歯を剥いて笑う。

「闘戦勝仏、九龍猿王。孫悟空さ」

「もう一度訊く。三度は訊かないぞ。お前は、誰だ」

「言わせてみろよ」

俺から盗んだ男喋りの日本語で、孫はそう返してくる。

「――黙秘するって事だね？　孫。まあ、その権利は万人にあるけどね」

「識りたければ、日本に居ればよかったものを。それにそれはどこまで知っての質問だ、遠山。生中な理解で語り、あまりあたしを怒らせるな。お前は今、あたしの視界にいるんだぞ」

孫の言う、『視界にいる』――

それは、レーザーの銃口を向けているのと同義だ。

安い脅しを吹いてまで、言いたくないんだな。自分の正体については。

「分かった。これ以上は聞かない。ちなみに俺が知ってるのは、君が不完全な緋緋神（ヒヒガミ）だということまでだよ」

女性に問われたので、俺が正直に答えると……

「猴（コウ）が喋ったか。バカなヤツめ。でもまあ、半分はあたしが言ったようなもんか」

猴・孫の責任切り分けは自分でもイマイチできてないらしく、孫は『しゃーなしだな』という顔になった。

「……よし遠山。お前だけ答えてあたしが答えないのはちょっと悪いんで、その代わりに『生きる』という事の本質を教えてやろう」

代わりになるのかなそれ。

という顔をした俺に、孫はニタァ……と笑う。

「生きるという事は、『死ぬまでの長い長いヒマ潰（つぶ）し』だ。ヒマ潰し

には、面白い遊戯をしなきゃいけない」

――面白さ至上主義、か。

なんか理子も言いそうだな、そういう事。

「で、遠山」

「なんだい」

「今の世の中は、半分つまらないな」

「……？」

「恋は楽しい。恋はある。だがもう1つ、欠けているものがあるんだ。この世の面白味の残り半分――戦が無い」

と言う孫の目は……ジョークを言ってる感じじゃないな。

「やりたきゃ傭兵にでもなればいい」

「なったよ。でも当代の戦争は面白くないんだ。弱っちい庶民に鉄砲持たせて、どっちか全滅するまで醜く撃ち合うだけ。あんなの、石ころを並べて数を競ってるようなもんだ。今の世には、三国志の頃のよ

うな――宝石のように磨き上げられた、超人同士の戦が、足りない！」

孫は両拳を胸の前で上下に振り、駄々っ子みたいに叫ぶ。

「あたしは人智を超えた者同士が相まみえて、命懸けの真剣勝負をする戦が大好きなんだ。そこには、究極の情熱が燃えさかる。戦は恋と同じ――至高の遊戯なんだよ」

恋は戦争。戦争は恋。そのどちらも遊び・・ときたか。

すごい価値観だな。

だが……

「――あたしは命を以て遊ぶ者。命を産み出す『恋』と、命を奪い合う『戦』を司る――女神様なのさ」

見えてきたぞ。

コイツは確かに、緋緋神だ。

孫は孫なりに、自分の正体――俺の最初の質問に答えてくれたってワケか。

かつて、玉藻が言っていた。緋緋色金は戦と恋を好む色金。それに憑かれた者は恋心と闘争心を激しく昂ぶらせ、戦を起こす祟り神になると。

その話に、今の孫の話は恐ろしいほど被る。

それと、猴の昔話。猴に緋緋色金と共に孫の人格が移植された際、そのプロセスには『石牢に3年閉じこめる』というものがあった。その期間は、シャーロックがイ・ウーで語っていた緋弾の継承条件――3年の間、緋弾と共にあり続ける――および、殻金つきの緋緋色金の『法結び』が完成する3年という期間ともピッタリ一致する。

（……ああ……）

恋。戦争。色金。イロカネアヤメ。殻金。それらで色金を制御しようとする、星伽神社。緋緋神を殺したという、遠山侍と星伽巫女。緋色の研究。シャーロックの見せた、緋天・緋陽門。ジーサードが言っていた、超々能力者。そして、最初には兄さんから聞いた――

――『緋弾のアリア』――

今までバラバラだった様々なものが、ヒステリアモードの脳内で…

…

繋(つな)がって、いく。パズルのように。

いろんな事が、分かってしまう。分からなければよかったような事まで。

――だが、ダメだ。

今そこにショックを受けて、気を逸(そ)らしてしまってはいけない。

これは孫(ノン)のような神仏(かみほとけ)に片足を突っ込んでる存在からしてみれば、ただのヨタ話。俺(おれ)はこれからそういう存在と戦わなければならないんだ。喋(しゃべ)っただけで、呑(の)まれてたまるか。

落ち着け。落ち着くんだ……キンジ！

「……」

自らも緋緋神になりかねない事を知っている、アリアは……

黙っている。

表情にも大きな変化はない。

だが、俺にはアリアが努めて平静を保とうとしているのが分かる。

動揺しているのだ。アリアも。

アリアが至った予感は、シャーロック譲りの直観によるものなのだろう。だが恐らく、理詰めで至った俺の推理と近いもののハズだ。

――アリア――

「緋弾のアリア。そこで見届けろ。色金は一にして全。全にして一。じきに、お前も来い。恋と戦の咲き誇る、女神の園へ……」

孫は大仰に手を広げ、まるで姉妹に接するように優しく語る。

アリアは、答えない。

レキのプロポーズにあった言葉――一にして全、全にして一――そ

こも、出てきたか。

あの時の事を思い出して少し気恥ずかしくもなるが、お陰で……

少し、分からない部分が生じてきたな。さっきの推理に。謎が深まったよ。

これは、良いことだ。ミステリーが残る、という事は……まだ色金の件、いかようにも転びうるということになる。俺の中では。だから今の発言には感謝するよ、孫。

俺は意を決して、

「恋と戦争、か。大きなテーマだが、あいにく俺の好みには合わないな。どちらも」

孫に正対し直し、鋭い視線を向けた。

――アリアに話しかけるな。

――君の相手は、俺だ。

そう、目で警告するように。

「はは。昔と何も変わらないんだな、遠山侍は」
相変わらず訳知り顔で語る孫は、何者かに操られている。
それを俺は先日のカーチェイスでも見抜いていたが……
その何者かは、女性あるいは女性的な存在だ。多分。
ここでは仮に、孫の表現を借りて『女神』としておこう。
となるとヒステリアモード的には、その女神様と俺が子孫を残せるかどうかという点が重要になってくるのだが……どうかな？　それはさすがに、分からないね。
この場合、俺は本能的に『大事を取って、残せるという事にしておこう』という判断を下す事になる。
つまり、傷つけたくはない。
とはいえ、彼女の望みは俺と決着をつける事なんだろう。
傷つけず、勝敗をハッキリさせる――
レーザーに立ち向かうという難題が、さらに難題になったね。

「遠山。お前との功夫。汽車追逐。楽しかったよ。お前は恋と戦をあたしにくれた。涙が出るくらい、嬉しかった。そのお返しに、全力で――愛をこめて、射ってやるよ」

「それが君なりの愛か。まさに戦神だね」

「お前とあの巫女は、あたしの天敵。現世を楽しむためには、いてもらっちゃ困るんだ。まさかその天敵に自分が恋するとは思わなかったけど、恋ってそういうもんなんだよな」

風に靡いていた、孫の髪が……

淡い緋色の光を帯びつつ、広がり出す。

風向きが変わった訳じゃない。

視覚的にも分かる。超常の力が、孫の内部で高まっているのだ。それも、止めどなく。

孫は目を閉じ、呼吸を整えている……だけのように見える。

その周囲から……カタカタカタ……と、指一本触れていないのに、

藍色(あいいろ)の屋根瓦(やねがわら)が震え始める。それが、広がっていく。

「……っ……？」

アリアが足下や海を見回す。

微震（びしん）している。城が。海が。大気が。孫（ソン）を中心に。

地震ではない。これは恐らく、孫のケタ違いな……『発勁（はっけい）』。日本語で言う、『気』のようなものだ。それが藍幇城（ランパンじょう）に近い海面を泡立たせ、山々や星々さえも震わせているように錯覚（さっかく）してしまう。俺（おれ）自身も、あてられているんだ。突風のような、孫悟空（そんごくう）の気を。

（……ッ……）

孫は……確かに、神に類する存在だ。

それを文字通り、肌で感じさせられてしまう。

対する俺は――ただの男子高校生。

頼みの綱（つな）のヒステリアモード（ノルマーレ）も、通常のものだ。

中枢神経（ちゅうすう）系の活動が30倍を超えて上昇する、ベルセやレガルメンテの血流は感じない。

「――さようならだ、遠山――」

スッ――

と、万物の微震が止まる。

一気に周囲は静かになり、風も……止んだ。

孫の……コンディションの気剣体、全てが整ったってワケか。

「刀や拳で長く合を重ねるのも好きなんだけどね。それはもうやった。だから――如意棒。一発勝負だ。如意棒だけで、白黒つける。あたしが突いても立ててたら、遠山の勝ちさ」

そう告げた、孫の……

右の瞳が、光り始める。

どこまでも濃い藍色の闇の中、白い月明かりの下で……赤く……！

「如意棒の如意とは、意の如く。あたしの意の如くどこまでも伸び、射殺す棒って事さ。射程距離はどんな狙撃銃よりも長大で、大気による減衰と地球の丸みにのみ依る。攻略は絶対ムリ、不可能だぞ」

孫がそう語る中、レーザーの発射に備えて諸葛とココが少し下がる。
「あともう1つ見せたかったけど、使うまでもなかった技がある。勉斗雲。現代の超能力用語で言う短距離絶界橋、分かりやすく言えば『瞬間移動』さ。つまり、遠山――お前はあたしからは逃げても逃げられない。もう、受けるしかないんだ」
聞いてないよ。瞬間移動まで出来るなんて。
まあ、いま聞いたけど。
そういう新技を後から話すの、どうかと思うよ？
「――アリア、下がって。俺と孫の直線上に立っちゃいけないよ。君は俺の隣にいてくれ……いつも」
この期に及んでまだ甘い声で思わせぶりな事を囁き、アリアを赤面させてる俺自身も、どうかと思うけどね。
俺の『隣にいてくれ、いつも』に赤くなってから……「ほんと、あんたはどんな時でもそういう事を言う……！」と、アリアはイイ感じ

にいつものツリ目になってくれた。
そして、ジャキジャキッ。
二丁拳銃を両方とも構えた。片方は薬莢が視界を飛ばないよう、傾けつつ。
「ふふ。面白くも恥ずかしい男だよ。遠山は。こんな局面でも、かわいらしい女の前ではカッコつけるんだな」
「その通りだけど、それがどうかしたかい？」
俺にそう返された孫はプッと小さく笑い、アリアはワタワタした。
「もう1人の可愛い子、孫。君は、俺を狙ってくれるね？」
「どういう意味だ、遠山」
「たとえ君が神様であろうとも――アリアを傷つけたら、許さない」
そう宣言した、俺に……
アリアは拳銃を落としそうなぐらいワタワタして、孫は少しイラッとした顔になった。

妬いてくれてるのかな、孫。
「だから孫。その美しい瞳に、俺だけを映して」
「……死ぬ覚悟か。お前」
「アリアのためになら死ねる」
がちゃちゃ。
とうとうアリア、銃を落としちゃったよ。そして震える手で慌てて拾ってる。
「善いなあ。恋は善いなあ。恋は、咲く花の如し――」
孫は詠うようにそう言って、ゆらり。
前へ倣え、のポーズのように両手を前に出した。
それは恐らく、孫なりの測角の姿勢。
視線に加えてその手が、俺を狙っている事をハッキリ示している。
もう……孫の瞳は赤い星のように光っている。その明るさが、急に増した。

俺の記憶でいえば、これはジーサードが撃たれた時の孫の瞳とほぼ同じ明度だ。

猴も言っていた。孫はもう止まらないだろう。発射される。

ジーサードの時の記憶によれば、あと8秒。

「――だがそれも、ここで散る花よ」

来るぞ、光速の一撃。

あと5秒――！

「散らせるものなら、散らしてごらん」

これが最後になるかもしれないこの決めゼリフも、語尾が女性向けに柔らかくなった。

ヒステリアモードは継続中という事だ。それなら、いけるぞ。

信じるよ、孫。俺を狙ってくれ。アリアを撃つな。

そうでなければ――

――成り立たないんだ。今この土壇場で思いついた、レーザーの攻

略・法が。

そう。理子（りこ）の予想通り、俺は思いついている。いま隣にいるアリアのおかげでなれた、ヒステリアモードの力で。

孫。君は如意棒（にょいぼう）の攻略が『絶対ムリ』、『不可能』と言ったね。

それはタブーなんだよ。俺にとって。

ムリって言っちゃダメって、出会ったその日に禁じられてるからね。

そこのアリアに。

それに、不可能？　それは俺に言ってはいけない言葉だったね。

俺は――不可能（エネイブル）を可能にする男、なのだそうだから。

もちろん、この方法でなんとかなるかどうかは分からない。五分五分って所だ。

でも、賭（か）けてみる。それしか俺に道はないのだし。

そして――俺の世界が――

ヒステリアモードが見せる、スローモーションの世界に変わった。

今回は事が事だけに、超々高速度カメラで撮ったようなウルトラ・スローの世界だ。

この世の何もかもが今、ほぼ制止して見えている。

その世界で俺はまず、レーザーに対抗するためのあるアクションを起こす。

もうどうせ係は止まらないのだから、何の隠し立てもなく、悠々と。

だが……その直後、予想外の事が起きた。

アリアが横から発砲したのだ。

それもさっき銃を拾った際、誰にも気づかれないよう向けていた俺の方に――!?

火薬の燃焼で赤熱化した.45ACP弾は今、アリアの銃口を出ようとしているところだ。

これはもう、そのまま飛ばさせるしかないだろう。弾は俺には当たらないコースを飛びそうだし――このアリアの発砲の意味は、後で考

える事にする。

今は、レーザーに集中だ。

（――矛盾（むじゅん）――）

レーザーは、光速の攻撃。

俺に到達するまでの時間は、ほぼゼロ。

言わば発射と同時に着弾（ちゃくだん）する、滞空（たいくう）時間のない弾だ。

それを俺が、滞空時間があるものにする。

猴（コウ）の証言もあったが、レーザーの『照射時間（しょうしゃ）』は――ジーサードが撃たれた時の記憶を元に、ヒステリアモードの俺（おれ）はそれを精密（せいみつ）に思い出せる――コンマゼロ９５５９秒。

つまり０・１秒弱、光を滞空（たいくう）させればいい。

そうすればレーザーは俺に届かない、ただ光っただけのものとなる。

無い時間を、有る時間とする。

無いものを、有るものとする。

――これは、矛盾かもしれない。

だがこの俺にかかれば、矛盾も矛盾ではなくなる。

矛盾？　そんなもの、言葉の意味を変えてしまえばいいんだよ。

矛盾とは、『無敵の矛と無敵の盾』という物語から生まれた言葉。

だが俺はそれを、『矛を盾に変える』という物語に変える。今、ここで。

（悪いな、シャーロック）

そこの諸葛も、シャーロックには借りがあるみたいだが――

俺も、借りが出来てしまうな。

このレーザー攻略法は、肉体的には何の能力も使わない。小学生にもできることだ。

さっき俺が起こしたアクション、それは……

持っていた一番長い金属物、言うなればこれが俺の矛だ――スクラマ・サクスを、軽く放り投げただけ。ただし、極々精密に。

そう。俺の矛盾を実現するには、ほんの僅かな誤差も許されない。記憶の中でも直径が7㎜しかないレーザーの射線に、スクラマ・サクスの先端から柄に覆われている金属部分――中子の後端までを、正確に乗せる必要がある。

だがヒステリアモードの俺にとって、それは集中力を高めれば簡単なことだ。

――『矛を、盾にする』。

その防御方法は、実は大昔からあるものだ。

日本で言えば武士が使っていた、『峯搦め』という技がそれにあたる。

つまり自分の刀の比較的柔らかい峰の部分を、適切な角度でわざと敵の刃にぶつけさせ――敵の刃を食い込ませて、文字通り食い止めてしまうという発想。

遠山家にもその技は伝わっていて、爺ちゃんの爺ちゃん……つまり

俺の四代前の遠山が遺した安物の刀にも峰にガッツリと敵の刃が食い込んだV字の跡があった。

俺のレーザー防御技、『矛盾』は――その延伸版。

都合良く直刀でもあったスクラマ・サクス全体を使って、レーザーを受け止める技だ。

――スクラマ・サクス。

持ってるのを時々忘れるほど影の薄いお前だったが、ここで出番だぜ。一世一代のな。

それにこの防御法は、俺がお前を信頼してるからやれる面もあるんだ。

お前は大英帝国の至宝とやら。なまくら刀じゃない。だから、信じて託すぞ。

守りきってくれ。俺の後ろにある、俺とお前の国の旗共々。

「――――！」

この超々スローモーションの世界でも、如意棒――
レーザービームは、突然視界に出現した緋色の光線として知覚された。
一方、俺が放ったスクラマ・サクスは空中で完全に制止しているように見える。
そのスクラマ・サクスの先端がレーザーに当てられ、花開くように融けて広がり始めた。
ここまでで、照射からコンマゼロ1秒。
始まったぞ。
コンマ1秒未満の、矛と盾の戦いが。
コンマゼロ2秒。
融解は止まらない。スクラマ・サクスの切っ先はガラス細工を作る時のように膨らんで、コンマゼロ3秒で先端側からブワッと破裂し始める。

コンマゼロ4秒。

スクラマ・サクスは、もう中央辺りまでレーザーを潜り込ませてしまっている。先端はミルククラウンみたいに広がって、閉じていた傘が開く光景を上から見ているようだ。

コンマゼロ5秒で――

――分かってしまった。

この勝負は、俺の負けだ。

スクラマ・サクスの先端から後端までは70cm8mm。猴が撃ち抜けなかった仮想戦艦大和の主砲防盾より厚い盾、ではあったのだが――

融点は、大和の高張力鋼よりも若干低かったらしい。その若干が命取りになった。

――スクラマ・サクスはレーザーに貫通される。コンマゼロ1秒弱の照射時間を残して。

そしてあの甚大な威力を誇るレーザーは、その時間でも十分……

俺を撃ち抜ける。後ろの2枚の旗ともども。
その瞬間が近付いている。コンマゼロ1秒ずつ。
コンマゼロ6、7、8――レーザーが、スクラマ・サクスを、貫けた――！
その時、この極微小時間の世界では閉じる事もできない、俺の眼に――

ぱあっ！

俺の胸の前で花開く、アリアの銃弾が映った。
……レ……レーザーを、受け止めている……！
スピンが掛かっているため、弾丸はバラの花のような形に融け開いていき……広がった部分は空気で冷え、花びら同士が絡まるようになって……星形に、安定していく。
そして、そこで――
――時間の流れが、戻る。

まず、バッ！　と鍛冶場のような熱風が一瞬だけ俺を正面から叩いた。

アリアの弾は空気をはらむような形になってしまったせいか、へにゃん、と一旦夜空に飛んでいってから……くるくる……と、ブーメランのように回転しつつ、俺たちのそばの瓦屋根へと戻ってくる。

膨らまされて表面積が何十倍にも広がったスクラマ・サクスは、すぐさま薄い部分から空中で冷え固まっていく。そして、パサリ……

その『開きかけの傘』のような形状のまま、俺の足下に落ちた。

――レーザーを撃たれても立っている俺を見て、孫は……

「……」

発光を終えた目を丸くして、黙っていた。

俺の足下に落ちたスクラマ・サクスの形状から、どう防御されたのかも分かったようだ。

機嬢もあんぐりと口を開け、諸葛も糸目を見開き、これには絶句し

てる。

……その気持ちは分からないでもない。

中国が世界に誇る伝説の存在、藍幇の切り札、孫悟空。

その必殺技が、目の前で破られたんだからな。

「突いても立ててたら、遠山の勝ち――そう言ったね。孫」

一応の確認をしておくと、孫がその顔から驚愕の表情を消していく。

そして静かに、クルリ。

回れ右して、背中とシッポをこっちに向けた。

孫は機嬢に悔しそうな顔を向け、中国語で一言、二言話す。

すると機嬢は「えっマジ!?」って表情になり、小さく歯ぎしりした孫が、うなずき……

「あたしに二言は無い」

背中越しに俺へそう告げて、あとは静かにヴィクトリア湾を見つめている。

ペタンとその場に座り込んでしまった機嬢は、しばし沈黙の後……ツインテールの中に隠していたらしいインカムに、何かを中国語で告げた。

すると……――グァ――――――――ン――……！

階下から、銅鑼が1回だけ大きく打ち鳴らされた。

どうやらそれは敗北を示す合図だったらしく……

藍幇城を囲んでいた船からは、警笛の音が連なる。敗者を労り、勝者を称えるように。

「ココ……機嬢。潔く認めてくれたね。ありがとう」

警笛を聞きながら俺がそう言うと、

「中国人はメンツが大事ネ。負けた時は負けた、潔く皆に言わないと後で非難されるヨ」

機嬢はプイッと横を向いて、膨れっ面になってる。

ようやく……俺も緊張感を解き、チラッ、と横目でアリアを見ると

……

アリアは黙って腕組みし、再び吹き始めた西風に長いツインテールを靡かせていた。

戦いが終わった事は分かったようだが、その表情は少し複雑だ。

（自分の発砲の意味を、後から理解した顔……って感じだな）

俺は屋上を少し歩き、星形に広がったアリアの弾を……

チョイ、と触って熱くない事を確かめてから、つまみ上げる。

そして円錐形に――『開きかけの傘』のような形になったスクラマ・サクスを、こっちも冷えて固まってる事を確かめてから、大棟の上に立てる。

バランスが取りにくかったが、少し上から押して曲げたら……校庭に置くカラーコーンみたいな具合に、立ってくれたよ。

「アリア。君に頼まれていた物があったね」

振り向いた俺に呼ばれると、アリアは「？」という顔で立ったスク

ラマ・サクスを見る。

キョトンとしたその表情は、普段のアリアのものだ。

俺はスクラマ・サクスのなれの果て、その尖った頂点に星形の.45ACP弾を据えて……

円錐の上に星、という形状を作ってみせた。

「――ほら。お望みのクリスマス・ツリーだよ」

全て金属製で、飾りはてっぺんの星だけだけどね。

まあ、これでOKしてもらえないかな？　原材料は大英帝国の至宝。

加工者は孫悟空。世界にも類を見ない、超レア物のツリーなんだから。

ウインクした俺に、アリアは小さく笑い……ツリーの所までやってきて、

「……ほんと、あんたには参るわ。じゃあこれでガマンしてあげる」

欧米人がよくやる、『やれやれ』のジェスチャーをした。

そしてそのジェスチャーからの、くるくるすぽっ。二丁拳銃をスカ

ート内に収めてる。
しかし……いやはや、恐れ入ったね。アリア。
コンマゼロ数秒の世界に、的確に銃弾を滑り込ませてくるなんて。
放り投げた針の穴に全力疾走しながら糸を通すような行為だったよ、あれは。
でも、アリアはそれをやってのけた。
まさに拳銃の天才としか言いようがないね。
だけど……
「よく分かったね、アリア」
「何が？」
「俺があやって、孫のレーザーを防ごうとした事だよ」
「うーん。分かったというか、なんとなくそうじゃないかなって思ったのよ。カンで」
「防ぎきるにはこのツリーの長さが少し足りなかった事まで、勘付い

てたのかな」

「そうじゃないけど。ほら、あんたドジだから。そういうこともあるかなってね」

そうか。あの局面で――アリアは孫ではなく、俺の動きに注目していたんだな。

それで俺がどう防ごうとしているのか見破り、そのアシストとなる弾を撃ってたんだ。

これも……凄い事だな。俺本人でさえあの場で思いついた技を、瞬時に見抜いてアクションを出来たなんて。

「さすがはシャーロック・ホームズの曾孫だ。その直感の鋭さ、恐れ入るよ」

笑顔で称賛する俺に、アリアは少し頬を赤らめて上目遣いになった。

そしてちょっとだけアヒル口になって、

「違うわ。パートナーの――あんたの事だから、分かったのよ」

恥ずかしそうに、そう呟いてくる。
なるほどね。以心伝心ってやつか。俺とアリアも、もう組んで長いからね。
――さて――
と、俺は孫の方に向き直った。
海を見ていた孫は、俺の視線に気づくと流し目するようにこっちを見てくる。
「……人類初だ。あたしの如意棒を受け止めたのは」
そう、告げてくるが……
一応、俺の弟も先に生き延びてるんだよな。
でもまあ、言わないでおこう。孫、プライド高そうだし。
「殺せよ」
また海に視線を戻した孫は、そんな事を言ってくるので……
「殺さない。孫を敬ってる玉藻に怒られたくないからね」

俺が肩をすくめてそう言うと、
「武偵法9条でしょ」
アリアが横からお小言してきた。
はいはい、とアリアに苦笑いを返してから、俺は孫に改めて語りかける。
「孫。1回負けたぐらいで大げさだよ。誰だって、負ける事はあるんだ。言うだろ？　『猿も木から落ちる』って」
と……冗談めかして言っても、孫は笑ってくれない。
お猿さんの孫悟空には鉄板だと思ったんだけどな。今の。
「――遠山。極東戦役の『試合』に勝った褒美に、いい事を教えてやろう。確かにお前は如意棒を受け止めた。しかしそれは、無数にあるあたしの技の1つに過ぎない」
まあ……それは認めるよ。
まだ孫は勁斗雲――イマジナリ・ジャンプとかいう瞬間移動技も出

してないしな。

勝負には勝ったけど、本気で闘り合ったら勝てる気はしないさ。今でも。

負け惜しみを言って少し勢いづいた孫は、毅然とした顔でこっちを向く。

「それだけじゃない。これは確かにあたしだが、あたしの髪の毛1本に過ぎないんだよ」

ん……？　こっちは少し、理解に困る発言だな。

西遊記で、孫悟空は自らの毛をちぎって分身を作る魔術を使っていたが、それとは少し意味合いが違いそうだし。

訝しがる俺に語りながらも、孫の見開かれた目は――

アリアを、見ていた。

「……今夜は面白かった。面白ければ、それでいい。だから遠山侍。戦え。戦い続けろ。恋して、戦え。あたしはそういう遠山の血筋を好

いてるんだ」

これは……どういう意味だ？

遠山は過去の代にも、孫に会っていたというのか？　いや、そうとは考えにくい。

――あはははッ――

と、負けたのに勝ち誇るような笑い声を上げた孫は、最後に……

「孫は飽きたよ。負けたしな。興が乗るまで、もうやらない。世界のどこかでまた戦おう、遠山。再見」

そう言うと突然、ふらりっ――

立ったまま気絶したように、体を傾けていく……！

まるで投身自殺でもするかのようなその動きに、

「――！」

孫の側へアリアが駆け出したので、俺も続く。

長い黒髪を靡かせて、棒のように倒れかけた孫のスカートを――

「哎ッ――――哎呀！」

機嬢が慌てて両手で引っ張ってる。

それでバランスが中途半端に取れて、すとん、とその場に女の子座りしてしまった孫は――いや、俺には分かる。これはもう――猴は、眠りから覚めるように目を開いた。

「……？　こ、ここは……はわぁ……！」

同じ声帯が出してるとは思えないほど腑抜けた声で、猴は自分が屋上のフチにいる事に驚いている。

そして、べたぁん。

落っこちないようにしようと思ったのか、屋根にへばりつくように伏せた。シッポまでペッタリと瓦に押しつけてる。

それを見てアリアは少しズッこけながら足を止め、無い胸を撫で下ろした。

都合、藍幇の3人側に歩み寄った俺も……

ある程度は、安心した気持ちだ。
孫を操っていた何者かは、孫という存在を演じる事に飽きたような言葉を残していった。
その何者かは女性。ヒステリアモードの俺には分かったが、それは本音らしかった。
孫から猴を救うという俺の決意は……
いくらかは、果たせたと考えてもいいだろう。
「……如意棒を防ぐ事もそうですが、これも不可能と思われていた事です。パトラの鍵も使わずに、孫が猴に戻るとは……！」
諸葛はさっきから驚きの連続といった様子で、細い目を白黒させている。
その諸葛に俺は歩み寄り、その腕を縛っていた縄を、バタフライ・ナイフ――もう光は止んでいる――で、切ってやった。
「諸葛。不可能な事なんか、何もない……希望を捨てるな」

病の事が頭にあったので最後に一言そう付け加えると、諸葛は苦笑して頭を振った。

「也罢……この御仁は。常識を悉く覆して見せて下さる。道理に囚われてばかり事物を考える自分が、愚かしくさえ思えてきましたよ」

アリアと同様、『やれやれ』の仕草をした諸葛は……

まるで何事も無かったかのように、右手と左手をそれぞれ反対の袖に突っ込むポーズを取った。そして、俺に背筋を伸ばしてみせる。

「ここで片膝でも突いて頭を垂れたい気分ですが、いま、藍幇とバスカービルは横並びになったところ。対等な関係と言えましょう」

「なによそれ？」

諸葛と機嬢はそこに正座！　と言い出しそうな顔のアリアが、眉を寄せる。

「――これより藍幇は『師団』の一員となり、その支援をするという意味です」

しれっとそんな事を言った諸葛に、アリアはキョトンとしてから…

…

判断を仰ぐように、俺を見上げてくる。

「ずいぶんココたちが暴走してたが……内部を纏められるのか？」

「少なくとも香港は。今回の背反で曹操姉妹の位階は下がりますし」

丸メガネの下から、ギロリ。

しゃがんでいる機嬢を諸葛が睨むと、機嬢は「うひい」と頭を抱えるような仕草をした。

諸葛、あんたコワイ顔もできたんだな。

「それに今後は、曹操姉妹の勤労意識も高くなるでしょう。つきましては遠山さんの臣下として……」

「それは先日とさっき、丁重に辞退したところだよ」

「なんと勿体ない。ご覧の通り扱いは難しいですが、優秀な子たちですよ？」

一連の暴挙を見た俺に平然とココを掴ませようとしてくる諸葛も、只者じゃないなこれ。

ていうか押しつけようとしてませんか？　ココ姉妹を、俺に。

暴走ツインテールは、1人で手一杯だよ。これが4人増えて5倍にだなんて、想像しただけで身がもたなさそうだし。

……まあ……

……押しつけられるんだろうけど。今までの人生経験上。

「ただ遠山さん、手前味噌ではありますが――藍幇が眷属から師団に変わるという事は、上海の動き次第では極東戦役に於ける大きな戦力の傾きになりますよ」

警告するような、諸葛の予想に……

俺も、意見は同じだ。

俺の知る限り、極東戦役は起点となった日本を中心に師団有利の展開となっている。

内部の政治的事情で全力を出せなかったとはいえ、大手・藍幇が敗れたとあれば眷属はこれから猛反撃してくるかもしれない。きっと、なりふり構わない攻撃が――

――ごち！

痛っ……

「ていうかキンジ!?　ここからは反省会よ！」

アリアの背伸びパンチでシリアス顔を解除させられた俺に、つい笑ってしまった諸葛が袖で口元を隠してる。

アリアは元スクラマ・サクス、現クリスマス・ツリーをペシペシ叩き、

「あんたこの剣、さっき自分でも言ってたけど――盾にするにしても短かったじゃない！　あたしの援護がなかったら、どーするつもりだったの!?　まったくバッカなんだから！　ハラハラさせるんじゃないわよ！　ほんっとにキンジは！　キンジは……その……」

あれ。

いつものクドクドガミガミが、途中で急に勢いを失った。

俺、何もしてないぞ。いつも通り『生まれてきてスミマセン』って顔で神妙にペコペコしてただけなんだけど……

全力で踏(ふ)んでいた『対キンジ怒りのアクセル』を急にブレーキングに変えたアリアは、きゅん……きゅううううん……と、赤紫色(カメノア)の瞳(ひとみ)がどこにあるのか分からなくなるぐらい顔を赤くしていって――

その瞳を横にそらして、

「……ほ、ほんと、あんたは……あ、あたしがついてないとダメなんだから……！」

――ボソッ、と、への字口で呟(つぶや)いた。

独り言みたいに、でも確実に俺に聞こえるような声量で。

なんというか、アリア的には今のが『だからずっと一緒にいるからね』的な告白成分を多分に含む発言だったらしいね。

それを言う直前になってアリアは自らセリフの成分に気付き、恥ずかしくなり、言うか言うまいか迷ってから……それでも、言ってくれたんだ。ちょっと横を向いてだけど。

これは嬉しい事だね。

ヒステリアモードで宥める前に、アリアが自らスキを作ってくれるとは。

いま眼前で『ほ、ほら、な、何か今の発言に反応しなさいよ……！』的にモジモジするアリアには、ありがたく反応をさせてもらうよ。

ここで攻勢に移らないと、またいつもの徹夜お説教コースになってしまうし。

「じゃあ、こうして――」

さっき俺をグーパンチしたアリアの手を、俺は少し器のような形にした手で持ち上げる。

映画で見た、紳士が貴婦人をボール・ルーム・ダンスにいざなう時

の高さまで。

「ふぇ？」

こう見えても英国貴族のアリアはそれに反応してしまい、『お手』みたいな状態で俺の手のひらの上で指を伸ばしている。

「くっついててもらおう」

俺はその手を優しく握り、洋画『ローマの休日』の記憶を元に、1、2、3――おお、さすがアリアだ。きちんとついてきた。

グレゴリー・ペックを完璧に再現する俺の動きに、アリアはビックリした顔をしつつもステップを合わせてくる。オードリー・ヘップバーンのように。

テンパって俺を見上げながら、それでも体が覚えているらしいステップを踏むアリアが――ピンクのツインテールを、ため息が出そうなほどに美しく靡かせて――

クルリとアリアの体を半回転させた3拍目で、俺は足を止めた。

背後から左手でアリアの華奢な腰を抱きとめ、右手は、放さない。
そうして、アリアは俺に後ろから抱かれたまま、俺はアリアの肩越しに……
2人で、香港島と九龍半島を隔てる夜のヴィクトリア湾を眺める形になった。
「ま、まさかあんたが踊れるとは思わなかったわ。いつも奇襲ね。どこで習ったのよ」
「強いて言えば、ローマかな」
「……はあ？」
犬歯を見せつつ半分振り返ってきたアリアの腰を、俺は抱き直してしっかり支えてやる。
あぅ、と小さな声を出したアリアはヴィクトリア湾の方に顔を戻して……くにゃ。
下を向き、元々真っ赤だった耳や首筋を含む頭部から煙を上げ始め

た。

「……うぁ」

などと少し驚いたような声も出したので、

「何に驚いてるんだい、アリア？」

垂れたアリアの頭（うへ）を追うように俺も身を少し屈（かが）めて、耳元に囁（ささや）いて尋ねる。

すると、しばしの沈黙の後……

こっちの俺には素直なアリアは、ちゃんと答えてくれた。

「……こ……こうしてると……キ……キンジの体って、意外と大きいんだな、って……」

そうじゃなくてアリアがちっちゃいんじゃないかな？

でもそう言うとこの体勢からの跳（ハ）ね腰（ツ）で海に叩（たた）き落とされる。ここは黙っておこう。

アリアはヒステリアモード的に言えばβ（ベータ）エンドルフィンが出まくっ

てる感じで、つま先から指先までプルプル震えてさえいる。
それが、可愛かったので……
「寒いのかな。それなら――日が昇って暖かくなるまで、抱いててあげるよ」
もう一度からかったら、「もも、もうあったかいからら」と辛うじてノーサンキューを意思表示してくる。やっぱり、なかなか意志の固い子だね。
でも、とうとうちょっと折れたのか、ヒステリアモードの聴覚では聞こえないぐらいの小声で「時よ…止まれ…」なんて呟いたね。ダメだよアリア。アリアが言うと本当になるかもしれないから。
機嬢と諸葛、それと猴の呆れ気味の視線が背中に刺さって少々痛いが……
アリアはもう、自分と俺の事しか頭にないらしい。
興奮すると、他が見えなくなっちゃうタイプなんだなあ。怒った時

と同じで。

「キンジ」

「なんだい」

アリアは赤面顔を伏せたまま――

「ＩＣＣ、リッツ・カールトン……ＯＺＯＮＥでは、ごめんね」

迷子になった俺にバリツを叩き込みまくった、あの時の事を謝ってきた。

「あれは俺が悪かったんだよ」

「ううん。あたし……キンジの事になると、感情がコントロールできないところがあるの……会った頃から、なんでか、ずっと。自分じゃどうしようもないの。だから……」

喋りながら、アリアは少しずつ涙声になっていく。

そして、

「これからもキンジにツンケンしたりするかもしれない……そ、そし

たら……またいつかＯＺＯＮＥでの事みたいになって……あんたは……いつかあたしの事、嫌いに……」

嫌われるのが怖い、というように……震えながらそう言った。

なんだ。

そんな事が言いたかったのかい。

「これからもキンジにツンケン――それはつまり、今までと同じってことだよね」

苦笑いして俺が言うと、アリアはキョトンとしてこっちを見てくる。

カワイイなあ。潤んだその大きなお目々も。

そう思うと、俺の笑顔も自然と優しくなる。

「今までの事で、俺がアリアを嫌いになったかな？　じゃあ今、俺が腕に抱き寄せている人は誰だろう？」

考えるように小首を傾げた俺の胸に――『あたしよ』と答えるように、ぐるり。

アリアは前後を１８０度回転させて、俺の胸に抱きついてきた。
顔は俺のブレザーに押しつけた状態だけど、嬉しそうに、すっごくデレデレさせてるよ。ヒステリアモードだと、こんな事まで感触で分かるんだなあ。
「アリア。まだＩＣＣでのバスカービル幹部会議……２人の食事の約束、生きてるかな？　２日ほど遅刻しちゃったけど」
耳元に囁くと……
うんうんうんうん。アリアは俺の胸の中で何度も頷いた。
その頭を右腕でそっと抱き留めて――
俺は感謝の気持ちを込めて、アリアの髪にキスする。
アリア。
たとえ音速の銃弾を止め、光速のレーザーを防ぐ事ができても、俺にはアリアのような富やステータスは無い。
だけど今、俺たちはこうして助け合い、並び立っている。

だから俺は、今はそっと君の手を取らせてもらいながら――一旦（いったん）、戦う事の他には空っぽの自分ということに開き直らせてもらおう。

そう思うと、フッと肩の荷が下りたような気持ちがする。

俺はクリスマス・イブの深夜でも暖かい南シナ海の夜風に吹かれつつ、俺に多くの事を教えてくれた九龍（ガウロン）半島と香港（ホンコン）島を見渡す。

そこにあった、日本では見られないほどの激しい格差。

俺は自分とパートナーとの格差をそこにダブらせ、自分の中でごまかしきれなくなって、一時は絶望した。一文無しになって座り込んだあの北角（ノースポイント）と、あの煌（きら）びやかなＯＺＯＮＥ（オゾン）で。

でも人は絶望しても、そこで終わりじゃない。

その後も生きるんだから、開き直って、立ち直るしかない。今の俺みたいに。

そうすればほら、君を再びこの腕に抱き留められる。

だけど、このままじゃいけない。
開き直りの後には、やらなきゃいけない事がある。
それはきっと、新しい意志を持つこと。
戦うこと以外はからっきしな自分を、少しずつでもいいから変えていこう――という、意志を持つことだ。変わるということは1年や2年でどうこうできる話じゃないが、長い時間を掛けたって構わない。これはその時間に値する目標だし、何より……自分はダメなヤツだって拗ねてるだけじゃ、カッコ悪いからな。男として。
――格差なんか、埋めればいいんだ。
それには俺が上っていけばいい。この高い坂、その上にアリアがいる長い階段を。努力すればいいんだ。少しずつでも。
ユアンだって上ろうとしていたじゃないか。貧困から抜け出そうと、努力していたじゃないか。
（俺だって、やればできる事なんだ。それはきっと……）

今はまだ仮免許の気分だが、いつかアリアの隣に堂々と並び立つ事だって――

腕の中で撫でるたびに「やん…」「…ひぅ」などと上がるアリアのアニメ声を聞きつつ、俺は「ああ、この時間ももうすぐ終了だなあ」と心の中で呟いて苦笑いする。

だってほら、白雪と理子が屋上にやってくる足音がする。

「……キンジ……」

と、アリアが俺の胸の中で蕩けた声を上げた時……

「あいや待たれいっ！」

「あーずるーい！　キーくんとアリアだけで、いーことしてるー！」

なぜか歌舞伎調の白雪の叫びと、プンスカ怒った理子の声が聞こえてきた。

びょん！　とジャンプして驚いたアリアを前に、苦笑いで振り返った俺も……いつの間にか真後ろにいたレキに、ちょっとビックリだ。

ええっと、このアリアとレキ、それと突進してくる白雪と理子、

（今回は1、2、3、4……）

機嬢（ジーニャン）は屋根に寝っ転がってアクビしてて、猴（コウ）は真っ赤になって手を覆（おお）いつつもしっかり指の間からノゾキモード……だから、とりあえずバスカービルの4人のレディーを同時にお相手すればよさそうだね。そのぐらいなら、うん。なんとか俺の器量（きりょう）の範囲内だよ。

と、4人まとめて抱きしめてあげようとした時――

俺のポケットから、『華のうちに』の曲が。ケータイだ。

……あれ？　ここの4人でもないとなると、誰からの電話だろう？

俺は4人をウインク一発で全員制止させ、携帯を見るが……あれ、テレビ電話だな。

それも、国際電話で――発信者は、かなめ。

ジーサードの看病でホノルルだかハバナだかの拠点（きょてん）に行ってた、俺の可愛（かわい）い妹だ。

俺が画面を見ながら電話に出るなり、

『メリークリスマス、お兄ちゃん！　こっちはもう25日だよー！』

ぽぽん！

画面に向けてクラッカーを鳴らしたかなめは……武偵高の女子寮の一室にいるようだ。

テーブルにはホールのケーキを何人かで切り分けて食べた跡がある。キラキラした紙のトンガリ帽子までかぶって、クリスマス会でもしてたんだね。

携帯画面を見ると、こっちは時差がマイナス1時間あるので11時43分……まだイブだが、日本はもうクリスマス当日という事らしい。

「いま東京にいるって事は、ジーサードはもう大丈夫なのか」

どうもそこが心配だった俺が尋ねると、

『うん！　基地に軍医さん呼んだのと、ツクモっちがヘンな薬草で治したのとで――もうピンピンしてるよ。昨日は基地でウェイトリフテ

イング203kg挙げたって言ってた』

何やってんの金三。部下の前でカッコつけたいのは分からなくもないけど、無茶したら傷口が開くぞ。ていうか本人の体重から考えて、アメリカ記録に並んでないかそれ？

まあ……ジーサードの事だし、撃たれた翌日トライアスロンに参加してても不思議とは思わないけど。

もう大丈夫そうなのは確かだし、そこはこれにて一件落着かな。

『お兄ちゃんはどうしてるの？』

「こっちは極東戦役のコマを1つ進めたところだよ。藍幇のみんなも、これからは師団に力を貸してくれることになった」

と言うと、ぱちぱちぱち。

制服姿のかなめは画面の中から拍手してくれて――

『さすがお兄ちゃん！　東京も平定したし、アジア制覇だね！』

笑顔で褒めてくれてから……えい、えい、と拳をためて……

『じゃあ次はヨーロッパだ！』

おー！　と、マロンブラウンの前髪を跳ねさせて拳を突き上げてる。

『――っていうのも、ヤバいらしいんだよね。極東戦役の欧州戦線。さっきタマモっちも言ってた。バチカンもリバティー・メイソンも、超人戦士たちが全滅ムードだってさ』

アジアが落ち着いてきたと思ったら……次は、ヨーロッパか。

これはヘタしたら日本に飛び火してきかねない。少し、戦況を聞いた方がよさそうだな。

「玉藻もそこにいるのか」

『うん。でも今はジャンヌと中空知さんとでお風呂』

そう言われて気がついたけど、よく見ればかなめがいるのはジャンヌの部屋だ。

ジャンヌや中空知……彼女たちのチーム・コンステラシオンはシン

ガポールに行ってたハズだけど、もう帰国したのかな。
修学旅行（キャラバン・ツー）Ⅱは自由に日程を決めていい事になってるけど、けっこう早いね。
『ヨーロッパじゃイ・ウー残党主戦派（ノマド・イグナティス）のパトラと、魔女連隊（レギメント・ヘクセ）のカツェ。これが組んで無双（むそう）してるみたい。あと眷属（グレナダ）では傭兵（ようへい）を雇（やと）ってて、それがやたら強いらしいんだよね』
「……傭兵？　そんなのアリなのか」
『タマモっちいわく、アリなんだってさ』
「雇われたのは、どこの何者なんだ。頭数は？」
『男女2人。アジア人らしいけど、2人とも非合理的なぐらいまるっきり正体不明だよ。だから、ただ――《妖刀（ようとう）》《魔剣（まけん）》って呼ばれてる』
かなめとの会話が不穏になってきたところで――
それに重なるように、藍幇城（ランパンじょう）の屋上にも不穏な空気が流れ始めた。

孫と機嬢が立ち上がり、ヴィクトリア湾の方を向いて中国語で何事か会話している。

ケンカを始めそうだったアリアたちバスカービル女子4人も、揃ってヴィクトリア湾を見ている。

何か……海に、異常が起きているようだ。

通話を一旦置いておきつつ、俺もそっちを見やると――

（……霧……？）

それは俺の視界にも、ハッキリと捉えられた。

今やもう、藍幇城を囲む船からもざわつく声が聞こえてきている。

――海霧だ。

だが海全体に靄がかかるのではなく、海面の一部だけにかかっている。

まるで水面に雲がひとつ降りてきたかのような、不自然な光景だ。

それが、西から東へと……ゆっくりと、ゆっくりと、流れてきてい

る。香港の方へ。

――あの霧。

あの霧に、俺は……

見覚えがある。

あれはあの悪夢のようなイ・ウーでの戦いの最中――シャーロックが『予習』と称して俺の視界を塞ぐのに用いた、濃霧の術。あれに似ている。どこがというワケではないが、何となく……！

……ずずず……ずずずずん……と……

洋上に止まりだした霧を掻き分け、文字通り霧散させながら……

フェリーどころではない、信じられないほど巨大な人工物が先端からジリジリと洋上に出現してきた。

（……あれは……タンカー……!?）

石油タンカーだ。

目測だが全長270m、全幅45mを下らないサイズだろう。

さすがに船名や船籍までは分からないが、武藤から分類法を聞きかじった事はある――大規模2種石油タンカー。ヘタな空母よりドでかい、巨大船舶だ。

水面側から順に赤、黒、甲板上は白という典型的な着色をされたそのタンカーは、その赤い部分がほとんど見えないほどに喫水線が深い。石油を満載してる。

こっちの屋上、城内、そして城を囲む船からのざわめきが大きくなり……

ある瞬間に、ワァーッ……！　と、自分たちが見た物が信じられないというような声に変貌した。

……どうやら……

（――一難去って、また一難……ってやつか）

見えてきたようだぜ。

――次の敵が。

『お兄ちゃん聞こえてる？　ヨーロッパ戦線の事だけど……パトラは知ってると思うけど、それと組んでる子はね、ヨーロッパじゃ20世紀最大の悪夢――』

携帯からは、片通話になったのが通信状態のせいかと思ったかなめの声が続いている。

「かなめ、話はまた後でしょう。ごめんよ――そいつが見えてきたようなんだ」

タンカーの船尾楼の上――

通常ならパナマや日本、アメリカなどの国旗を掲げる所にはためく、大きな旗がある。

ライトアップされたその旗の名を、アリアが呻くように呟く。

「――鉤十字……！」

そう。それは、第二次世界大戦当時のドイツ国旗。

逆卍形を傾けた、ナチス党の党章旗だったのだ……！

5弾　招かれざる海霧（アクアマリン・クロイツ）

鉤十字（かぎじゅうじ）――厳密には逆鉤十字（きゃくかぎじゅうじ）旗の下には、それに敬意を払うように控（ひか）えめに掲（かか）げられた旗がもう1枚あった。

赤地に白い盾（たて）、その盾の中には獅子（しし）のような荒ぶる黒い獣の姿がある。

「カツェ……！　あれは魔女連隊（レギメント・ヘクセ）の旗だッ」

それを見た理子（リーゼ）が、裏理子の喋（しゃべ）り方で焦（あせ）った声を上げた。

――カツェ――

ヒステリアモードの頭脳が、宣戦会議（ハンディーレ）でバチカンの大使・メーヤに発砲（はっぽう）した魔女の姿を映像記憶として思い出す。彼女の眼帯（がんたい）に描かれていた、鉤十字のマーク共々。

忘れるべくもない。

いの一番に眷属（グレナダ）入りを宣言した、カツェ＝グラッセだ。

「カツェ？　カツェ＝グラッセなのね、あの旗は……！」

その名に、アリアが表情を険しくする。

「そうだよ。カツェはあたしと同じイ・ウー中退者。あたしみたいに退学にされたんじゃなくて、魔女連隊に帰隊するために自主中退したクチだよ」

カツェ＝グラッセ。魔女連隊。昔アリアに聞いた事がある。

彼女らは……札付きのテロリスト組織。アメリカが言うところの『ならずもの国家』に高給で雇われ、各地で悪事を働いているヤツらだ。

「――魔女連隊ってのは元々、大戦後すぐイ・ウーに逃亡してきたナチス・ドイツの残党。当時ハインリヒ・ヒムラーが育成してた、アーネンエルベの超能力部隊なんだ。カツェはその9代目隊長で、二つ名は『厄水の魔女』……！」

かつてはイ・ウーの同窓生だったが、今はもう仲間ではない――

とばかりに、理子がカツェや魔女連隊について情報を喋る。

「飛んで火に入る夏の虫だわ。風穴開けて、捕まえてやる！　……ママの冤罪96年分は、イ・ウー時代のアイツの罪なのよ！」

とてもタンカーには届かない距離にも拘わらず二丁拳銃を抜いたアリア……に合わせて、俺もデザート・イーグルを早抜きする。

そしてアリアと同時に、3つの銃口で同じ対象――

屋上の端、黄金龍の彫像の上に突如として出現した『何か』を狙う。

だが……

（……な、何だ……あれは!?）

俺たちが気配を感じたそれに皆が目を向け、揃って目を丸くしてしまう。

そこにはブヨブヨとした、何だか分からないゼリーのようなものが乗っかっていたのだ。

大きさは1m半弱。少し白みがかるように濁っているが、ほとんど

透明だ。

形状は言うなれば、抱き枕を立てたような感じ。そいつがフラフラと立っている。

薄気味悪いソイツの上には霧が出ていて、そこからシュルシュルと水蒸気が供給されており――

「……厄水形……！　すごい、複写人工霊体も組み合わせてる……なんて高度な魔術なの。みんな、あれにあまり近寄らないようにして。毒や酸じゃないけど、ヘタに触ると頭とか顔だけ捕まって溺れさせられちゃうよ」

という白雪のS研的なセリフと共に、視覚的にも伝わってくる。あれは魔的な存在だ。

俺の……あまり得意じゃない分野の相手だぞ。

水蒸気の供給が終わり、ギャハハハハ……！　と笑い声を上げつつ次第に女の子っぽい形になってきた厄水形とやらに――

「このスライム野郎ォー！」

「……ッ！」

ババババッ！　理子と、少し怯え気味のアリアが発砲した。

だが、弾はそれこそ水を撃ったかのようにただ減速して向こう側に突き抜けただけだ。

それを見て俺も、無用の長物となったDEの狙いを外さざるを得ない。

「撃ってもムダだよ2人とも。厄水形の本体は別のところにいるものなの。これはたぶん、ただのスピーカー。喋らせよう」

超能力慣れしている白雪が、冷静にアリアたちを制し……

風下の厄水形を爆散させようと香水瓶を構えていた機嬢も、手を袖に引っ込めた。

厄水形は……色の淡い3D映像みたいな、女の形状になっていく。

俺にさえ一目で分かる――魔女の姿に。

……間違いない。

これはカツェ＝グラッセ。眷属、魔女連隊の大使。その姿だ。

カツェは鍔広の黒いトンガリ帽子を被り、肩に大烏を乗せている。

風が吹いているのにはためかない漆黒のローブは、白雪の言う通りこれがどこか遠くにいるカツェ本体を立体生中継している物なのだという事を示していた。

どこまでも典型的な魔女っぽいカツェだが……1つ、通常の魔女ではない点がある。

それは右眼にした、臙脂色の眼帯。

そこに描かれた、鉤十字の紋章だ。

ニィ、と片頬を引きつらせるようにして笑みを作ったカツェは、ベルベットのローブを撥ね上げさせて――

右前腕をビシッと平たい胸の前で横向きに構えてから、

「――勝利万歳！」

いきなりやりやがった。

ピンと指先まで伸ばした手をナナメ上に突き上げる、いわゆるナチス式敬礼を。

それにイラッとした顔をするのは、ヨーロッパ暮らしの長いアリアと理子だが……

俺は今の動きで見えた、ローブ内の制服を分析にかかる。

あれは正式なナチの制服を、きちんと仕立てたもの。タチの悪いコスプレって感じじゃない。

そうであれば——軍服や制服は、履歴書のように着用者の地位や所属を語るものだ。

色彩が明瞭ではないから、確証は持てないものの……

制服はタイトなミニスカートではあったが、親衛隊女性補助員（SS-Helferinnen）の制服とは異なっていた。映画などでもお馴染みの、親衛隊（SS）の黒制服——だがアルゲマイネ親衛隊（SS）でもない。細部が違うし、そもそも髑髏章（トーテンコップ）つ

きの制帽じゃなく魔女の帽子を被っている。

右の襟章はSSのルーン文字。左は星章4つに2本線。中佐相当だ。

それで連隊長とは苦労人だな。所属部隊を示すカフタイトルは、見たことのないもの。首には騎士鉄十字章。勲記の年号は……に、2007年？　戦時中どころか、ついこの間じゃないか。

――おそらく、魔女連隊とは……

存在そのものがナチス・ドイツの軍事機密とされた、秘密部隊。それが戦後も明るみに出なかった。そういう隊・兵器・作戦は、世界各国に間々見受けられるものだ。

そいつらが後継者を作って未だに活動してるって話も、実はこの業界じゃ間々耳にする。

イ・ウーも、言わばその1つだったワケだしな。

「――やあやあ諸君！」

カツェはおかっぱ頭の黒髪を揺らし、紅い左の瞳だけで一同を見回

すと……

「おーい楽しんでるかー？　楽しいよな戦争は！」

これはまた……孫というか理子というか、見事な戦闘狂まる出しっぷりだな。

渋面をする俺の前で、ニコニコ顔のカツェがルガーP08を出してタンカーを指し示す。

「鬼払結界の中で震えてた臆病者共――バスカービル！　あれは、お前らへの宣戦布告さ。ついでに裏切り者のヒルダもブッ殺す。香港は対魔性が強くて魔術のノリが悪いからよォ、あのタンカーでこけら落としといこうや！」

カツェは……あのタンカーを、何らかの攻撃に使うつもりか。

まあ、こっちもまさか単に石油を運んでるだけとは思ってないけどな。

「規模の大小に拘わらず、戦争は多様な力のバランスの取り合いだ。

極東戦役（FEW）でいえば、西に師団（ディーン）のリバティー・メイソン、東に眷属（グレナダ）の藍幇（ラン・パン）。組織力のあるこの2つのバランスは崩したくないところだぜ。というわけで、敗北した藍幇ッ！　裏切り者には制裁を――だ。殲滅（せんめつ）してやる！　ただまあ、人数が多いんで町ごと殲滅する事にした」

町ごと……？

カツェはあのタンカー1隻（せき）で、香港（ホンコン）を町ごと皆殺しにするつもりなのか？

そんな事、できるワケ――

……

……――！

「あたしは爆泡（バオパオ）入りのツェッペリン号を造りたかったんだぜ？　でも上に怒られてよォ。『優秀なテロリストは、手間も金もかけず敵（てき）に一大打撃を与えるものですわ！』とかって。まあつまり工期も予算も無かったんで、ジャックしたタンカーで安上がりにお前ら皆殺し、って

こった。あーあ」

まるで『サッカーの作戦立案でコーチに怒られたよー』というぐらいの軽いノリで愚痴ったカツェの厄水形は……どろり。

ローブの裾辺りから、溶けたゼリーのように崩れ始めた。

「ほんじゃ、先に逝ってろー。あたしもいずれ逝くから、また地獄で戦争やろうぜ。あっそうだ。おい、遠山キンジ、星伽白雪」

……ん？　溶けながら、名指ししてきたぞ。純日本人の2人を。

「次はイタリア抜きで戦ろうな。エヘヘェ」

それは第二次世界大戦……日独伊三国同盟の話か？　時代錯誤も甚だしいな。

ヘラヘラ笑いながら、カツェの厄水形はドロドロと溶けていき……最後は水になって、黄金龍の彫像からザバァと下へ落ちていってしまった。

チッ、という理子の舌打ちが聞こえて振り向くと――

「イ・ウーじゃ……そこのココが爆弾戦術、カツェが乗っ取り戦術をあたしに教えたんだ。あれはカツェが理論上可能と言ってた『タンカージャック』……！　あまりにも物がデカすぎるから手口を教わっただけだったけど、カツェは実践するつもりだぞ」

青ざめた顔で、理子はハーケンクロイツを掲げて海を行くタンカーを睨んでいる。

「――あれはシンガポール船籍の、シーマ・ハリ号ある。載貨重量15万トン、たぶん全部原油ネ。ジャックされてる、間違いないヨ。海峡航路、正しく進んでない」

袂から出したメガネをかけ、水平にした片手をおでこにあてた機嬢

が、タンカーを見て教えてくれる。武偵高で言うところの車輌科的な知識があるらしい。

「どういう戦術なの、タンカージャックって。岸壁にぶつけて爆発させたって、せいぜい数ブロックが大火事になるだけだわ。火はどうせ消し止められる。でもカツェは香港ごと滅ぼすような事を言ってた」

アリアが理子に尋ねると、理子は――

「タンカージャックは、タンカーをぶつけて町を爆破する戦術じゃない」

俺がさっきヒステリアモードの頭で思いついてしまったのと同じ、タンカーを使用した最も効率のよい敵地攻撃方法を……語る。

「ニュースで原油流出事故の映像見た事あるだろ。タンカージャックでは、まず港湾内でわざとそれを起こすんだ。原油は海水より比重が軽いから、すぐ湾内に浮いて広がりきる。香港は温暖だ。15万トンの原油はじゃんじゃん揮発していくぞ。その揮発ガスが1・3%以上混

ざれば、空気は全て導火線になる。街の小さな火が海に引火して、湾全体が一気に燃え上がるんだ。その燃焼で空気中の酸素を奪って、窒息と一酸化炭素中毒で都市を丸々1個、殺す。ナチスが開発してた『真空爆弾』を元にした、大量破壊兵器ってやつさ」

理子の話に、屋上の全員が絶句する。

――炎の海に変わる、ヴィクトリア湾。

――死の町に変わる、香港。

あの1隻のタンカーが、本当にその地獄絵図を産み出しかねない事が……その話から、伝わってきたからだ。

「……超巨大版の、原始的な燃料気化爆弾みたいなものね。キンジ、乗り込むわよ」

その沈黙を、二丁拳銃を手にしたアリアの勇敢な声が破る。

だが、シージャックに対していきなり強襲というのはセオリー無視だ。

「――待てアリア、刺激したくない。相手は乗っ取り犯だ。それにタンカーなんだから、発砲は厳禁だよ」

俺がそう言うと、さすがに銃はホルスターにしまいつつも……

「カツェが今の作戦を成功させたいんなら、すぐには実行しないハズよ。原油を撒くのにベストな位置……海流とかがうまい具合になってるポイントまで、まずはタンカーを運ぶ。逆を言えば、その場所取りをされるまでがタイムリミットだわ」

アリアは直感頼みの思考ではあるものの、一理ある事を言ってくる。さすが、イギリス武偵庁時代にテロリスト慣れしてるだけあるな。

よし……やむを得ない。行くか。

「――諸葛、香港水上警察に連絡を」

俺はそう言いながら、真っ青になってる機嬢に心の中で呟く。

（因果応報だね、ココ）

ココは自分たちが新幹線でやったような攻撃を、今度は自分たちに

仕掛けられたワケだ。まあ、攻撃のスケールは格段に大きくなってるけど。

これに比べりゃ、理子のハイジャックなんてカワイイもんだったな。

「……やれやれ。魔女連隊も手が早い。昨日の友は今日の敵、とはよく言ったものです」

携帯を取り出す諸葛も言うとおり、カツェは――

早かったな。今後敵対する流れになった、藍幇の始末が。藍幇とバスカービルの戦いが藍幇の敗北で終わる事も予測して、前もって攻撃準備をしていたんだろう。怖い女だ。

それにしても、俺は乗っ取り事件に縁があるね。

チャリジャック、バスジャック、ハイジャック、新幹線ジャックときて――

海外でまで、しかもまさかタンカージャックにお目見えするとは。

縁切り神社でお祓いしてもらおうかな。乗っ取り事件との悪縁。

「……いるよ。キンちゃん。あのタンカー……シーマ・ハリ号の中に、大きな力を持った魔女がいる。きっとカツェ＝グラッセだよ。それと、もう1人……これは……パトラ？」

タンカーの方にぱっつん前髪の額を向けて、目を閉じた白雪が語る。どうやら鬼道術で、超能力者の存在が分かるらしい。アンベリール号で戦った事のあるパトラの気配も感じたようだ。

（――新幹線ジャックの時の、ココと同じだな）

カツェは退路を確保した上で、作戦を確実に成功させるために、あのタンカーに乗っているんだ。

彼女らの姿が見えるわけもないが、俺はタンカーを睨み付ける。

俺はＩＣＣから見下ろした香港全景と、白雪との観光中に携帯で表示したＧＰＳ地図の記憶を組み合わせて……その行き先やタイムリミットを概算しようと試みる。

タンカーは藍塘海峡を悠然と進み、ヴィクトリア湾の入口・鯉魚門

に進んでいる。

まるで毒薬の錠剤が、巨大都市・香港の腹へ入っていくようだ。

風向きはさっきから西風のままで、海流は緩やかに西から東へ流れているように見える。原油をヴィクトリア湾に行き渡らせ、その揮発成分を風に乗せることを考えると……湾の西側まで、九龍半島と香港島の間を東から西へほぼ丸々横断しきった位置辺りに場所取りするに違いない。

となれば、タンカーの速度から考えて——タイムリミットは、およそ30分。

藍幇城からタンカーまで移動し、テロリスト魔女たちを強襲・逮捕して、原油流出用の仕掛けを解除し、さらに岸壁に激突しないよう停船させると考えると……

かなり、厳しいぞ。30分じゃ。

アリアの直感通り、動くなら今だ。1秒でも惜しい。

「――一番速いボートを用意しなさい！　1秒でも早くシーマ・ハリ号に行くわ！」

アニメ声で叫んだアリアも、俺と似たような回答をカンで導き出したようだ。

しかし、最初にタイムリミットを確認する辺り……俺たちもジャック慣れしたもんだね。

「ダメだよアリア。きっと……ボートじゃ行けないよ」

胸の前で小さく手のひらを握った白雪が、今度は近い海を見渡している。

それに倣って俺も藍幇城の周囲の海域を見ると、城や城を囲んでいた船たちが外海側に少しずつ流されている事が分かった。波が出てきているのだ。それも、この辺りだけに。

「これは……きっとカツェの術だよ。波を操って、海路を妨害してる。カツェ――厄水の魔女は、きっとあらゆる液体を操る魔女なの。きっ

と途中でボートを沈められちゃう」

白雪の言葉に、俺とアリアは弱り顔を見合わせる。

液体を操る……厄水の、魔女か。今回は原油が、その厄水って事かい。

じゃあどうする。対処するにも、タンカーまで行けないのではどうしようもない。

空を飛んでいこうにも、アリアのYHSは故障中だ。

「――機嬢。ヘリか何かないのか」

俺に問いかけられた機嬢はインカムを押さえながら、焦った顔で振り返る。

「藍幇城にはヘリポート無いヨ。だから水上機呼んだネ。20分で着くある」

……それじゃあダメだ。乗り込んでタンカーに着く頃には時間切れになってる。

俺が弱り切った顔をしていると、
「……遠山。あのタンカーに行くですか」
カットオフ・セーラー服の猴が、俺を見上げながら聞いてきた。
「そうしたい所なんだが、短時間で行く足がないんだ」
「今なら、行く方法あります。時間はかかりません」
そう言う猴は俺とアリアの……顔ではなく、体全体を見ている。
どうも、俺たちの体の大きさを測っているようだ。
「なに。どうやって行くの」
アリアが尋ねると、
「――觔斗雲です」
猴は如意棒と同じぐらい有名な、西遊記に出てくるその名前を告げた。
「科学で言うと、ワームホールを使った位相空間の連続複写移動。現代西洋魔学で言うと短距離絶界橋です。觔斗雲とは――つまり、瞬間

移動の法です」

これも事実は小説より奇なり、だよな。

さっき孫も言ってたが『どんな所にもひとっ飛び』と絵本に書かれていた雲の正体が、瞬間移動の術だったとは。

どういう理論による移動方法なのか、ヒステリアモードの俺にも得体がしれないが……白雪に目配せすると、『ギリギリ大丈夫だと思う』的な、ぎこちない頷きはいただけた。

……賭けてみるか。

あまり好きじゃないが、もう超常現象は慣れっこだし。

なにしろ時間が無い。それに、グズグズしてたらどうせ酸欠でオダブツだしな。

「それでシーマ・ハリ号まで行けるのか」

俺が猴に確認しているのを見て、アリアも覚悟を決めたような顔になる。

「あい。視界内なら」

という猴に促されて見ると、鯉魚門付近を航行するシーマ・ハリ号はもうすぐ香港島の陰に隠れてしまいそうだ。

もう船首の辺りは、島の向こうで見えない。

「ただ、これは如意棒と同じで1昼夜に1回しか使えないです。行くなら片道で、帰りは自分で帰ってくる必要があるです。それと運べる体積に限界があるです。人間ならおよそ2人分です。2人送るなら、猴は行けないです。いま見たところ、遠山とアリアさんならギリギリいける体積です」

――行けるのは、2人だけか。

できれば超能力の専門家・白雪を送り込みたいところだが、体積オーバーでは仕方ない。

ああ、神様は時に酷な事をするね。

白雪。君のアリアより豊満な体型が、ここでアダになるなんて。

アリアと白雪という組み合わせもあるだろうが、カツェやパトラと交渉する道を考えると……手前味噌にはなるが、ヒステリアモードの俺の頭脳と、女性を口車に乗せる能力が必要になるだろう。

ここは、俺とアリアだ。

ホームズ4世とその相棒の連携力に賭けよう。

それに、アンベリール号での戦いで……パトラは白雪と互角だった一方で、アリアには負けている。その体験がある分、パトラとの交渉にはブラフを打ちやすいかもしれない。

「分かった。まず俺とアリアで行く。機嬢は水上機で、白雪を最優先してバスカービルを運んでくれ。理子はキャリアGAのメンツに連絡を。アイツらも香港にいるんだ」

俺が各々にそう命令をしている間に、猴はアリアと俺を手で抱き寄せている。

もう時間が無い。

タンカーはもう前半分ほどが香港島の向こうに隠れてしまっている。

「……来了来了（ライラーライラー）、觔斗雲（ジンドゥユン）、来了（ライラー）……」

これ以上説明をしているヒマはないというムードで、猴は俺とアリアの腰を抱いたまま目を閉じる。そして、らいらーらいらー……と幼い声で唱え続けている。

その、数秒後……

キラ、キラ、キラ……と、猴の胸の前に小さな金色の粒が生じた。白雪に説明されなくても分かる。これは何らかの超能力だ。

その光が、風に揉（も）まれる金粉（きんぷん）のように空間を行き来し始める。行き来する空間は球形で、その直径がどんどん膨（ふく）らんでいくような感じだ。

飛（と）び交う光の粒は、2つ、4つ、8つ——128、256——パッ、パッ、と、倍倍に増えていく。

瞬く間に、それが俺とアリアの周囲を覆（おお）い尽くし……光の靄（もや）のようになった。

まるで、光る雲の中にいるみたいだ。
その、瞼が開けていられないほどの光の中で……
猴の手が、俺の腰から離れていくような感覚がする。
猴が唱えていた呪文のような声が、それに合わせて少しずつ遠ざかっていき――

下方向に聞こえていた波音が、横方向に移ってきた。
さらに周囲の光が金色だけではなく、赤、青、黄色や紫、白光など……色とりどりに、変わっていく。だが明るさは極端に収まった。
今はむしろ改めて夜空の下、薄暗い所にいて、周囲にいろんな色の光があるようだ。

「……？」
眩んだ目を細めて、キョロキョロと辺りを見回すと――
まず前で同じくキョロキョロしてるアリアが見えた。
他には、誰もいなくなっている。猴もいない。

遠いライトで照らされた足下は藍幇城の屋上ではなく、ツルツルした防錆塗装の鋼板に変わっていた。辺りは校庭何枚分かの広さがあり、少し離れた所には工場の屋上みたいな具合にパイプラインが何本もある。遠くには小型のクレーンや、マンホールみたいな原油取り出し口も見えて……

……驚いた事に……

ここがあの藍幇城から遠く離れた石油タンカー、シーマ・ハリ号の甲板上だと分かる。

やって、くれちゃったな。猴。それもアッサリと。

これが……『瞬間移動』ってやつか。すごい体験をさせられたもんだ。

身体的には、何の感覚も無かった。ただ眩しかっただけだ。

「……初めてやったよ。テレポーテーションだなんて」

ため息混じりに言った俺を、アリアは赤紫色の瞳で見上げてくる。

あれ。アリア、あんまり驚いてないな。
「あたしも自分がやるのは初めてよ。でも、敵が使うのはモスクワで見た事あるわ」
そういえば……そんな事を言ってたね。
夏休みの最後の日、探偵科棟の掃除を手伝ってもらった後に。
「でも、もうちょっと驚こうよアリア。俺たちはまだ人間であるべきだろ？」
「あんたがそれ言う？　まあ……聞かされて1分でやる事になるとは思わなかったから、そこはちょっと驚いたけど」
もう諦めよう。こういう事で普通の女の子らしいリアクションをアリアに求めるのは。
「それよりキンジ。良かったわね」
んしょ、と、膝ぐらいの高さにあった細めのパイプラインの上に立ったアリアが――

ちょっと含み笑いしながら、恭しい手つきで周囲の景色を示した。
さっき俺が、ツリーをプレゼントした時みたいなムードで。
「――念願の夜景よ」
言われて、見回すと……
ヴィクトリア湾――九龍半島と香港島の合間に侵入したシーマ・ハリ号は、湾岸地域に香港が誇るビル群の夜景のまっただ中にいた。
ここに移動してきて最初に感じた色とりどりの光は全て、香港の街灯りだったのだ。
日本のセンスでは決してこうはしないであろう、色彩豊かなビル街のライティング。
来た時に飛行機からも見た、競い合うように夜闇を照らすビル群。
みんなに助けられた北角の、生活感のある光を並べたマンション群。
九龍の華やかな五つ星ホテル。世界中の企業が誇らしげに社名を煌めかせる、ネオンサイン。ライトアップされたドーム状の建物。表面全

てを光らせたビルもある。そして遠景には、アリアとケンカしたＩＣ。

その全てが水面に映り、カラフルな輝きを倍増させている。

まるで、宝石箱の中にいるようだ。

そのダイナミックな美しさに、ひととき俺は……

言葉を、失う。

――１００万ドルの夜景――

これが、それなんだ。ようやく見れたよ、父さん。

まあ、こんなシチュエーションで見る事になるとは想像もしてなかったけど。

「普通は片方の岸から片方を見るものだけど、ヴィクトリア湾からだと両岸見えるから、２００万ドルの夜景ね」

叮愛(かわい)い事を言ってくれるねえ、アリア。

「それを映す君の瞳(ひとみ)もある。さらに倍で、もうプライスレスだ。あり

がとう」

「なにバカ言ってんの。あたしがこれを見ろって示したのは、上気向上のためよ」

アリアは、キリッ。

形のいい眉をツリ上げて、さっそく仕事モードだ。

ちゃき、ちゃき。オイルタンカーの上というのにアリアが小さな手で二丁拳銃を抜くが、それも……大丈夫そうだ。昨今のタンカーだけあって、甲板各所が防弾仕様になってる。海賊対策だろう。

俺も、浸ってる場合じゃないな。

今夜はベレッタとデザート・イーグルの二丁拳銃でやらせてもらおう。

どうも、数が――多そうだからな。

「絶対に守るわよ。このアジア有数の、一大経済都市を」

「ああ。俺も守りたい。貧しくとも幸せそうだった、あの人々を」

アリアは九龍（ガウロン）の超高層ビル街の方を、俺は香港島（ホンコン）――ちょうど今、北角（ノースポイント）の沖に差し掛かっているところだ――の方を向き、背中合わせになってお互いの死角を守り合う。

清濁併せ呑（せいだくあわせの）む香港は今、この劇薬のようなタンカーをも迎え入れてしまっている。

１００万ドルの夜景――この無数の光の1つ1つに、人々の生活が、それぞれの夢が、笑顔があるんだ。それを、守らないと。

「『世界に雄飛（ゆうひ）せよ』。武偵憲章（ぶていけんしょう）9条の通りになったわね」

「もっと平和的に雄飛したかったね」

語り合う俺とアリアの周囲には……さっきから……

アヌビス神を模した、犬の頭をしたパトラの砂人形（スレム）たちが見えている。

元から甲板を警備していたのに加えて、後部の低層ビルみたいな居住区からもゾロゾロ出てきた。いきなり囲まれ気味だよ。

警戒するように距離を取る砂人形たちは、今回はダークグリーンの服を着ている。よく見たらナチの野戦服だよ。これはカツェの影響かな。

まさにナチスの亡霊といったムードの砂人形たちは、夏にピラミディオン台場で見た時より少々武装がレベルアップしてる。前は1振りだった斧が両手に2振りになってるし、腰に拳銃のホルスターを提げてるのもいる。あれはモーゼル・ミリタリーかな？

船尾方向には、巨大なハーケンクロイツ旗がはためいている。

昨日の友は今日の敵、などと諸葛は言ってたが……俺の爺ちゃんも、カツェの一味と昔同盟してたのは事実だ。だが今回、俺は敵対する事になる。

（次は、あれが相手か……）

と、俺は眉を寄せて鉤十字の旗を見上げる。

まあ……今まであれこれ戦った敵のパターンからして、いつか来る

とは思ってたけどな。あれ系も。

ぐい。と、背中合わせのままアリアが俺の左腕を後ろから引っ張って……

俺の、腕時計を見たようだ。アリアは普段、しないからな。

そして手を放したので、俺も腕時計を見る。

すると時計はちょうどその時、0時を示し――

「メリー・クリスマス、キンジ」

――12月25日になった。

拳銃構えながら、『メリークリスマス』か。

まあ、俺たちらしいクリスマスかもね。

あーあ。本当、俺はクリスマスにロクな思い出がないよ。

それが今年も追加されてしまった。

「この時を2人で迎える事ができて、光栄だよ――メリー・クリスマス、アリア」

Go For The Next!!!

あとがき

はいどうも！　赤松（あかまつ）です！

短編集『キャストオフ・テーブル』を挟み、久々の本編となる14巻をお届けします！

ちなみに……今回のあとがきは、ネタバレを含みます。

もしまだこの本の小説部分をお読みでない方は、ご注意ください。

さて、さて……

上下巻っぽく書かせていただきました13巻・14巻は、香港（ホンコン）編。執筆にあたっては香港へ取材へ行ったのですが……書いてるうちに、もうまた行きたくなってきました（笑）

赤松が香港を訪れたのは去年で2度目でして、1度目は香港がイギリスから返還された頃でした。さすがに昔の事なので、記憶もあやふやなのですが……100万ドルの夜景は、真珠のネックレスみたいに

白かったのを覚えています。でも今の香港の夜景は、キンジが見たように色とりどりの宝石箱のよう。あのころ少年だった私が大人になるだけの時間が経ったわけですから、街もガラッと変わるんですね。どっちも美しかったですよ。

そうそう。小説に書きたかったけど書けなかった物がありました。取材で食べた、ある有名な杭州料理レストランの名物・蟹粉拌麺。あまりの美味しさにビックリした料理です。これは何匹もの上海蟹の蟹味噌を1杯のあんかけ麺に使う、贅沢な料理。お値段を見て、2度目のビックリも体験できました。

――1杯のあんかけ麺が、日本円にして約4千円とかもうね……！

でも本当にお値段に見合う美味しさだったので、これは小説に書こう！　そうしないともったいないし！　と思ったのですが……キンジが食べるチャンスが、書いても書いても来ないのなんの。なので結局、料理名はここでご紹介する事になってしまいました。

ちなみに……藍幇（ランパン）がバスカービルに満漢全席（まんかんぜんせき）を饗（きょう）するシーン。あそこで白雪（しらゆき）が食べて、キンジが目撃だけした『あんかけ麺みたいなもの』が、この蟹粉拌麺です。

いずれ白雪が再現して作ってくれる事を、キンジのために祈るとしましょう。

14巻のラストでは、なんとナチス・ドイツの残党がキンジたちに宣戦布告してきました。

対するキンジも、敵（てき）幹部がちっこい女の子でも油断（ゆだん）してませんでしたね。これはきっと、ちびっこ亜理亜（アリア）に手も足も出ない日々の体験が深層心理で働いたんでしょう。アリアえらい！

ではまた、次は——深海色とアイスブルーの恋しい頃に、本屋さんでお会いしましょう。

2013年4月吉日　赤松中学（ちゅうがく）

14巻発売おめでとうございます！
今回の表紙のかなめはなかなか
かっこよく描けた気がしてます。

かなめにニーソックスを
履かせてみたかったので
表紙のラフを何案か出すうちのひとつに
混ぜてみたのですが、
見事ボツりましたので
ここに載せておきます。

また次巻でお会いいたしましょう！

著者

赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。『アストロノト！』で第3回ＭＦ文庫Ｊライトノベル新人賞優秀賞を受賞。本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の2シリーズ目となる。

イラスト

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。

代表作は『ぷらばん！』『Ｅ×Ｅ』『夏空カナタ』『天神乱漫』『のーぶる☆わーくす』『ＤＲＡＣＵ－ＲＩＯＴ！』。

小説では『これはゾンビですか？』（富士見書房）の挿絵を担当。

趣味はゲーム、読書。

ゲームはもっぱら携帯ゲームばかりをプレイ中。